

ポケットモンスターXY&サン・ムーン 二人の紡ぐ物語

ソーナ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ポケモンが大好きなので書いてみました。

なにかと至らないところがあると思いますがご了承ください。

XYが好きだったのでそれを元に書いてます。

年齢を少し変えて今作では15歳として設定しています。

目次

EXストーリー	
召集	1
HAPPY NEW YEAR!	5
新たなる始まりの地方	
新しい地方 アローラ	28
ポケモンスクールへようこそ!	34
アローラ、最初のバトル	42
新たる始まり	49
再会	56
サプライズイベントINアローラ!	67
守り神とのバトル	76
放て、全力のZ技!	89
二人だけの休日	96
新凶鑑、その名は……	106
アローラで初ポケモンゲット!	117
スイレンとアシマリの夢	132
お騒がせ双子姉妹	140
スイレンとアシマリ、本気のバルーン!	147
セレナ、アローラで初ゲット♪	160
セレナ、新たなる挑戦!	171
サトシとセレナ アローラ、デートショッピング!	178

EXストーリー 召集

「あれ……ここどこだ？」

「ピカチュウ」

「確かポケモンスクールでセレナたちと話していた……えーと、確かその時手紙が来たんだっけ？」

サトシは自分の記憶を頼りに、ここに来る前のことを思い出そうとした。

「そういえばセレナたちどこにいるんだ？というか……」

サトシとピカチュウは自分達がいる場所を中心にぐるりと周りを見渡した。

「ほんとどこだここ？」

「ピカチュウ」

サトシとピカチュウが首をかしげて考え込んでいると。

「サトシ！ピカチュウ！」

「セレナ！」

「ピカチュウ！」

セレナがサトシとピカチュウの前に現れた。

「セレナ、ここがどこかわかるか？」

「いいえ。私もわからないわ」

サトシが聞くと、セレナは首を横に振って答えた。

セレナもどうやらこの場所が何処なのかわからないみたいだ。

「他の皆は何処だろう？あの光に包まれたからここに来ていると思うんだけど」

サトシは周囲を再度見渡して言う。
すると。

「あー！お兄ちゃん！サトシとセレナだよ！」

そんな声が後ろからサトシとセレナの耳に聞こえてきた。

「今の声って！」

「もしかして！」

サトシとセレナが声のした方を向くと、

「久しぶりサトシ！セレナ！ピカチュウ！」

「お久しぶりですね二人とも」

「ユリーカ！シトロロン！」

「ユリーカとシトロロン、どうやってここに!?!」

「実はある手紙を貰って、それを開けると光に包まれて、気付いたらこの場所にいたんです」

シトロロンがサトシたちに説明した。

すると更に、

「サトシ！セレナ！」

「おーい、二人ともー！」

シトロロンとユリーカが来たところから、ククイ博士たちが姿を表した。

「ククイ博士！みんな！」

「よかった。みんなも来ていたのね」

「気が付いたらいつの間にかあの先にいてな、サトシとセレナの姿がないから心配したぞ」

「そうなんだ」

「あ、そうそう。俺たちの他にも二人いるぜサトシ」

「え？二人？」

ククイ博士の言葉の二人にサトシは首を横にかしげた。

「サトシ！」

「セレナ！」

ククイ博士の言葉の後に、みんなが出てきた扉から更に声が聴こえてきた。

「タケシ！」

「カスミさん！」

そこにいたのはサトシの昔の旅仲間、タケシとカスミだった。

「二人ともどうしてここに………つて、もしかして二人もあの手紙を?」

「ああ。俺もカスミもサトシたちと同じ手紙を受け取ったみたいだな」

「でもってその手紙を開いたら、光に包まれて、次の瞬間にはあの場所にいたのよ」

タケシとカスミもサトシたちと同じ手紙を受け取り、この場所に呼ばれたみたいらしい。

「ところでここって何処なんだ?」

「さあ?」

「あそこ、もうひとつ扉があるよ」

マーマネの指差したところには片側が水色とピンクで、もう片方が赤と青で装飾された大きな扉があった。

「ほんとですね」

リーリエがシロンを連れて扉の前に向かい取っ手を握り引いたり押したりする。

「開きませんね」

「うーん。とりあえず、開くまで待つか」

サトシはリーリエの言葉にそう返した。

「それもそうね。私たちを呼んだということはいづれ開くと思うし」

サトシの提案にセレナが肯定する。

「それじゃ、開くまで待つとしますか」

ククイ博士の言葉でそれぞれ、時間を過ごした。

カスミとタケシはククイ博士と。リーリエ、マオ、スイレンは女子同士で。カキとマーマネは男同士で。サトシとセレナはユリーカとシトロンと話していた。

それから15分後。

”ギイー————ガタン!”

先程まで開かなかった大きな扉が開いた。

扉からは輝く光が溢れでて、サトシたちを照らしていた。

「扉が開いた！」

「ピカチュピイ！」

サトシとピカチュウが光溢れる扉の前にたちそう呟いた。

すると、

『お集まりの皆様、お待ちせいたしました。扉の奥へとお進みください』

そんなアナウンスが何処からか流れ出た。

「と、言ってるけどどうする?」

「行くしかないでしょ」

「そうね」

サトシとセレナが扉の前にたち、

「いこう」

「いきましよう」

後ろのククイ博士たちにそういい、光溢れる扉の中へと入っていった。

HAPPY NEW YEAR!

「広い場所ねサトシ……」

「ああ。前に行ったオールドラン城の広間に似ているな」

「ピーカチュー」

サトシたちが扉の奥に進み、目の前の光景にそう呟いていると。

「うわあ、綺麗な場所だね」

「ああ」

「キリトくん、かなり広いね」

「そうだな」

「広いホールだね。何人入れるんだろう?」

「《星武祭(フェスタ)》のメインステージの観客席ぐらいじゃないかな?」

「………幻想的な場所ね」

「すごい場所です兄様、姉様」

「うん。扉の奥がこうなっているなんて……」

「フフフ。零華ちゃん眼が輝いているよ————つて、それはことりちゃんたちもだね」

ホールの四隅からそんな声がサトシたちの耳にはいる。

サトシたちは声が聞こえてきた場所をみる。

そこには自分達と年代とかわらぬ少年少女たちがいた。

サトシたちから右前側にいる一団はどこかの学校の白の制服や黒

「えーと、ソーナはなんで私たちを呼んだの？」

「あれ？キリトたちにはアリスとユージオが手伝ってくれたはずだけど．．．．．そう言えば秘密にしといてって言ったんだっけ」

「それで一体．．．．．」

「フツフツ。実はみんなを呼んだのは．．．．．」

『『『『『呼んだのは．．．．．』』』』』』

「みんなで、楽しく！仲良く！新年の始まりを過ごすためだよ!!」

「あー、そう言えばそろそろ今年も終わりなんだっけね」

「そうだよ明久！それで、どうせならみんなと過ごしたいなと思ってね。言つとくけどリアルに友達が居ないからって訳じゃないからね。——まあ、友達なんてもの必要ないし要らないから、いないだけだよ」

『『『『『．．．．．』』』』』』

「とまあ、そんなことよりみんな楽しくワイワイ過ごそう！」

『『『『『オオオーーーーーー！』』』』』』

ソーナの掛け声により楽しいパーティーが始まった。

パーティーが始まり、ホール内には様々な食べ物や飲み物が置かれ、各自それぞれ他の登場人物たちと話していた。

ある場所では——

「凄いわねあなたたち」

「うん。学校の廃校を阻止するためにそんなことするなんて、生半可

な気持ちじゃできないよ」

「ホントだよ」

「えへへ、そんなことないよ」

「そうです。私たちは自分達のためだけではなく、音ノ木坂学院全員のためにしているのですから」

「やれやれ、海未ちはほんと固いな」

「なっ!?そ、それはどういう意味ですか希」

「そのまんまの意味やんよ。なあ、エリチ」

「え、ええ。そうね」

「まあ、海未が堅いのはいつものことだしね」

「まあ、それは確かに言えるわね」

「凜もそうおもうにや」

「真姫に、にこ、凜もですか!?!」

「わ、わたしはそんなことないと、思うよ」

「かよちゃんはやさしいにや」

「そう言えば絵里ちゃんはロシアに住んでいたんだよね」

「ええ。もしかしてレインとセブンもかしら?」

「ええ、そうよ。と、いつてもお姉ちゃんが7歳、私が1歳の頃に両親が離婚して私はアメリカに、お姉ちゃんは日本に行くことになったのよ」

「そうだったの。ごめんなさい、辛いこと言わせてしまった」

「気にしないでいいわよ。それに今はこうしてお姉ちゃんと会えるん

だから、平気よ」

「アハハッ♪。全く、セブンはほんと甘えん坊だな」

「別にいいでしょお姉ちゃん」

「はいはい」

「セブンちゃんかわいい」♪

「ま、まあ当然よ」

「それでなんだけどセブンちゃん」

「なにかしら?」

「これ着てくれないかな?」

「な、ななな、なにそれ!？」
「え?これはことりが作った服だよ」
「あ、あなたが作ったの!?!じゃなくてなんで幼稚園の服なのよ!」
「似合うかな?って思ったのよ」
「わ、わたしはもう12歳よ!」
「まあまあ、早く着替えようよ」
「いやーア!た、助けて、お姉ちゃん!」
「え、ええ……」
「ことりちゃんの悪い癖が出ちゃったね」
「全くことりは……。可愛いものに眼がないんですから」
「へえー。そうなんだ」
「あ、戻ってきたみたいね」
「お待ちせよ♪セブンちゃんを更に可愛くしてみたよ♪」
「せ、セブン?」
「ど、どうかな、お姉ちゃん?」
「うん!超かわいいよ七色!」
「お、お姉ちゃん!?!それリアルネームよ!」
「ありやく、レインちゃんも変なのが出ちゃったよ」
「もしかしてレインってエリチと同じでシスコンなのかな?」
「うくん、見た限りそうみたい」
「ちよつと希、シルヴィアさん。私は別にシスコンじゃないわよ。それにシスコンならあそこにいるわ」
「綾斗くんと話してる明久くん?」
「まあ、確かに絵里の言うとおりでと思いますよ」
「そうだねえ。明久くんは昔から零華ちゃんのこと大切にしていたからねえ」
「アハハ。過保護過ぎってほどだけだね」
「それもそうね」
「あ、でも綾斗くんもかなりのシスコンだよ」
「そうなのかい?」
「うん。綾斗、子供の頃なんて遥お姉ちゃんの後ばかり追いかけて

いたんだから」

「それはかなりのシスコンだな」

「でも、ちよつと可愛いかも♪」

「やれやれ。英玲奈はともかくあんじゅもことりと似たような慣性の持ち主だったわね」

『『『『ハハハハハ』』』』』

アイドル同士、音楽関係などを話していたり。

また、あるところでは――

「遙さん、免許皆伝なんですか!」

「ええ。リーファちゃんとラムくんはどうなの?」

「私のところは免許皆伝とかはない、ですね。剣道なので」

「はい、俺のところもリーファさんと同じですね。もつとも剣道をやっていたのは中学生までなんですけどね」

「ラム君、そうだったの?」

「はい。一回中学の全国大会で優勝しましたよ」

「すごいねラムくん。私のところは剣術だからなあ。剣道もするはするけど大会とかには出ないんだよね」

「じゃあ、今度試合しませんか!」

「え、リーファちゃんど?」

「はい。あ、でも遙さんがよろしければですけど」

「私はもちろんいいよ!ラムくんもどうかかな?」

「俺もいいんですか?」

「もちろん」

「もちろんだよ」

「では、お言葉に甘えて俺も参加させていただきますね」

三人の男女が剣について話していて、

またあるところでは――

「へえ、お前さんはかなり料理できるんだな」

「まあな。おれのところは兄妹が多くてな、親が不在勝ちなもんでおれが面倒見ているんだ」

「ほえー。その年で主夫みたいとはすげえな」

「今はポケモンドクター見習いでな、家庭の方は弟たちが手伝ってくれてるよ」

「いい家族だな」

「全くだ」

「そう言うエギルだつて嫁さんがいるだろうが」

「まあ、俺がいない間も支えてくれていたからな。自慢の嫁だ」

「くうく、羨ましいぜ紺畜生！」

「それについては同意するぞクライン！」

「タケシ！我が同士よ！」

「やれやれだな」

男三人が盛り上がっていて、

またあるところでは――

「それじゃあオーフェアさんは綾斗さんにいつもそうやってもらっているんですか？」

「……ええ。シルヴィアもだけど。恵衣菜や翔子、セレナは？」
「私は明久くんにも甘えてるかな。明久くんの膝の上で頭を撫で撫でしてもらおうと気持ちよくて眠っちゃうだよ」

「……私は雄二によく料理を作ってもらってる。家事もだけど雄二は吉井と同じくらい家事レベルが高い」

「私はよくサトシにお菓子を作ってるかな？お菓子を食べたときのサトシの嬉しそうな表情がかわいいというか、癒されるんだよね」

「……なるほど。私も今度綾斗にやってもらおうかしら？」

「膝枕を？」

「ええ」

「……なら私も雄二にやってもらおう」

「じゃ、じゃあ私もサトシに今度してもらおう、かな？」

と、結婚している女子の恋バナ？らしき、情報交換などをして――

『』『』『』まだ、俺（僕）たちは結婚してないぞ（よ）!!!『』『』『』

いま、なんか五ヶ所から同時に同じ言葉が聞こえた気がしたのですが……気にしないでおきましようか。

そして、またあるところでは――

「おいおい、お前さんは忍者かよ」

「……そんなことはない。一般」

「いやいや、それはさすがのオレっちもヤーちゃんに同意するぞ」

「や、ヤーちゃんっておれの事かよ、アルゴの姉さん」

「ニヤハハ。いいネーミングだろ？」

「そ、そうかあ？なら土屋はなんだ？」

「……俺は別にいい」

「ん？ツツチーだぞ」

「プツ……！つ、ツツチー……以外にかわいい名前だな」

「だろ？」

「……あまり嬉しくない」

情報屋同士、情報入手についてを語っていたり。

またあるところでは――

「へえー、そっちの世界も面白そうだな」

「ああ。俺たちの世界も面白いがキリトたちの世界も面白そうだな。VRMMOだったか？是非やってみたいな」

「俺もサトシたちの世界でいろんなポケモンと触れ合ってみたいな。ピカチュウみたいなポケモンが沢山いるんだろ」

「ああ。それぞれの地方によって出るポケモンも異なるんだぜ」

「そりや行ってみたいな」

「それ、僕も行きたいな」

「俺も、かな」

「明久と綾斗もか」

「あー、でも俺は明久の世界が気になるな」

「召喚システム、だっけ？」

「うん」

「どんなものなんだ？」

「えくと、テストの点数がその召喚獣の力になって、操作は自分でやるんだ」

「ウゲー、テスト受けないといけないのか」

「俺たちのところもテストはあるけど、確か明久のところは違うんだっけ？」

「点数の上限がないからね。自分の能力次第ではどんどん点数が増えていくよ」

「うわー。大変そうだな」

「まあね。あ、でも綾斗のところも大変じゃないかな？」

「んく。まあ、ね」

「アハハ、私としてはみんなの世界に行ってみたいけど」

「ソーナも？」

「それはそうだよ。面白いじゃん」

「二「アハハハ」」

「ところでみんなはなんで彼女たちが好きになったの？」

「んく、俺は第一層からずっと一緒にいて、レインがいると何て言うのかな……こう、安心するんだよ」

「僕は恵衣菜と小さい頃から一緒にいて、気心が知れているし一緒にいたいからかな」

「俺はシルヴィとオフエリアと一緒にいると楽しいからかな。二人を俺は必ず守りたいって思うんだ」

「俺はセレナから様々なことを教えてもらったりしたし、セレナと一緒にいると安心するからと、夢を持っているからかな」

「なるほどねく」

「ソーナはいないのか？」

「え？なにが？」

「好きな人だよ」

「ええっ!？」

「そう言えばソーナはいないの？」

「気になるな」

「え、ええ………。私は別にいないよ。それに友達とかいないから、そう言うのがわからないんだよね」

「………」

「あのく、哀れむよいな目で見ないでほしいんだけどなく。ちよつと虚しくなるよ」

「アハハ………」

「なんて返したらいいかな………」

「ごめん、ソーナ」

「聞いちゃいけないことだったかな………」

「ちよ、ちよつとー！べ、別にこの世界だったら幾らでも友達はあるよ
〜！」

主人公同士で話していたりした。

そして時は進み。

「さあて、今年も残り時間が少なくなってきたね」

ソーナはパーティー会場の時計を見てそう言う。

「ホントだな」

「んく。みんなはなにかやりたいことあるかな？」

ソーナは会場の全員を見て言う。

「んく。あ、じゃあソーナ、僕と試験召喚バトルしない？」

「え？」

「あ、明久くん!？」

「に、兄様!？」

「お、いいなそれ! じゃあ俺もソーナとデュエルしたいな」
「き、キリトくんも!？」

「じゃあ、俺もソーナと闘ってみたいな」

「綾斗くんまで!？」

「……ハルお姉ちゃんどうにかして」

「アハハハ、無理だよオーフェアちゃん」

「はいはい〜! なら俺もソーナとバトルしたい!」

「サトシ!？」

なんと明久、キリト、綾斗、サトシからバトルの申請をソーナは受けた。

「つて、ちよつと待ってよ! 私は明久たちのように召喚獣持つてないし、キリトたちのように剣や防具も無いんだよ! 更に言うとなんか綾斗たちのように星脈世代でもないし煌式武装も装備してないよ! サトシのようにポケモンは持つてないんだよ!」

ソーナはそう言うが。

「その辺りはソーナの力で」

「作者の権限だね」

「ちよつとー!! そんなのに使いたくないよ!」

ソーナはツツコミに疲れたのか呼吸が荒くなっていた。

他のみんなは苦笑や笑いを堪えているものが多かった。

「ハァー。——いいよ。闘ってあげるよ」

「「「よしっ!」」」

「なんでそこで4人は嬉しそうにサムズアップするのさ!」

ソーナは更に落胆した。

「じゃあ、最初に綾斗、次にサトシ、で明久、キリト。でいい?」

「俺は構わないぜ」

「僕も」

「俺も大丈夫だよ」

「俺もだぜ」

「じゃあ、移動しようか」

「セアッ！」

「ハアアッ！」

気合の入った声が周囲に響響き渡る。

そして8分後。

「ゼアッ！」

「ッ！」

『戦闘終了（エンド・オブ・デュエル）！Draw！』

綾斗の攻撃を受け流し、カウンターでソーナの放った斬撃と綾斗の放った斬撃が二人の校章を同時に真つ二つに切り裂き、デュエルが終了した。

「引き分けか。強いなソーナは」

「綾斗こそ、強すぎるよ」

「謙遜しないでよ。ソーナの武器もだけど力量も凄かったよ」

「綾斗と比べるとまだまだだけどね」

ソーナら自虐的に肩をすくめながら言う。

「さて、次はサトシか」

「じゃあ俺は観客席にいくよ。頑張つてねソーナ」

「ハハ、善処するよ。ありがとう綾斗」

綾斗はそう言うと、観客席に向かって歩き去った。

綾斗が立ち去ると、代わりにサトシが来た。

「綾斗に勝利おめでとう、ソーナ」

「ありがとう、サトシ」

「バトルは一对一のシングルでいい？」

「いいけどひとつ問題があるんだよ」

「問題？」

「……私がポケモン持ってないこと」

「あ」

「もしかして今さら？それに私言っただけ……」

「あー、じゃあ、また今度でいいか」

「ごめん、そうしてくれると助かるよ」

「じゃあ、この試合はバトルは無しということ。次は明久か」

「そうだね」

「まあ、頑張れよソーナ」

「ありがとうサトシ」

サトシとのポケモンバトルはソーナがポケモンを持っていないと言うことで先に見送りで、次は明久とのバトルになった。

「早速だけど試合しようソーナ」

「うん。科目は日本史でいい？」

「僕はいいよ」

「オツケー、じゃあセツトするね」

ソーナはそう言うと、召喚システムのフィールドを張り、明久から距離をとった。

「いいよ、明久」

「うん、じゃあ——」

「二試獣召喚（サモン）!!」

日本史

2年Fクラス 吉井明久 978点

VS

ソーナ 814点

「ソーナも日本史得意なの？」

「まあ、ね。5科目の中で私は国語と社会が得意だから」

「なるほどね。それじゃあいくよ!」

「参ります!」

ソーナの召喚獣は虹色のコートを着ているというなんとも派手な衣装だった。

そして、武器は双剣だ。

「ゼアツ!」

「ヤアツ!」

金属音が二人の召喚獣の武器から響く。

「やるね。もっと早くしていくよ!」

「それは私もだよ。それじゃあ早速!」

ソーナの召喚獣は明久の召喚獣から距離をとると、双剣を前に構えた。

すると、その双剣は一つに合わさった。

「!?それは、弓!?!」

「いくよ!」

ソーナは弓を連続で射ち放ち明久の召喚獣を攻撃する。

明久は召喚獣を巧みに操作してかわしたり弾いたりする。

「更に!」

ソーナは弓を両手に持ち、分割した。すると、それは黒金と白銀の拳銃へと変わっていった。

「今度は銃!?!」

「いっけ!」

「ちよ、ちよっと!」

明久は素早くかわすがソーナはどんどん弾を撃つ。

「そして!」

「今度はスナイパーライフル!?!」

そして、ソーナは二丁銃を結合し、黒銀のスナイパーライフルを構え、連続で撃つ。

そしてそれを明久は同じように構えた二丁銃で弾を撃ち落ととしていく。

弾撃ち（ビリヤード撃ち）だ。

「でもって今度は！」

ソーナはスナイパーライフルを片手で持ち横に構える。

その途端、スナイパーライフルは光輝き細身の剣、細剣に変わった。

「今度は細剣!?もしかして腕輪!?!」

「え?腕輪じゃないよ。というより腕輪持つてないよ」

「え?じゃあそれは?」

「あ、これ?イメージをすることによって様々な武器に出来るんだ」

「うわー、チート?」

「いやいや、明久の《事象改変》の方が一番のチートだからね」

「あ、それは確かに」

「ね。それじゃあ、どんどんいくよ明久!」

「ええーっ!」

それから10分後

2年Fクラス 吉井明久 36点

V S

ソーナ 25点

ソーナと明久の点数は、あと一撃で戦闘不能という状態にまでなっていた。

「これで決めるよ」

「もちろん!」

「ハアアアアアアアアアッ!」

「ゼリヤアアアアアアアッ！」

ソーナの召喚獣と明久の召喚獣の双剣がそれぞれの召喚獣を切り裂き、互いの位置を交換して背を向けて立つ。
そして、

2年Fクラス 吉井明久 0点

VS

ソーナ 0点

同時に召喚獣は虚空へと消えていった。

「引き分けかあゝ」

「つ、疲れたゝ」

「いやあ、さすが明久だね」

「ソーナこそ、さすがだよ」

「アハハ、ありがとう明久」

「さてと、最後は――」

「俺の番だな」

明久の言葉を引き継いで、出てきたキリトが答えた。

「そうだね、キリト」

「じゃあ僕はみんなのところにいるよ。二人ともいい試合をね」

明久はそう言うと、キリトが出てきたところから観客席に向かって歩き去った。

「さてと――」

「うん」

ソーナはキリトの言葉に頷き、ウィンドウを表示させデュエル申請画面を開きデュエルを申請する。

「全損決着でいいよなソーナ？」

「もちろんだよキリト」

モードを全損決着にしてデュエルを双方とも受諾する。

キリトとソーナは互いに距離を取り、向かい合う。

そして、キリトは背中に装備している双剣の柄を握り、抜刀する。それぞれ剣の色は黒と白だ。

『『エリユシデータ』と『ダークリパルサー』、だね』

「ああ。俺の最もな愛剣だ」

「それじゃあ私も——」

ソーナは目を閉じ集中する。

すると、ソーナの衣装がキリトの防具と似たような感じになった。だが、その色はキリトが黒に対してソーナは虹色のような七色の派手だが落ち着いた装飾だった。

そして、両手を広げ何かを掴むような動作をする。

「——来て、『テイング・トウー・テル』、『スターライト・ナイト』」

そしてソーナの手元に白銀に輝く剣と虹色に輝く剣が現れ、それを握った。

「へえー、それがソーナの剣か。俺やレインと同じで二刀流なんだな」

「まあ、二刀流の方がやり易いんだよ」

「じゃあ、始めようぜソーナ」

「了解」

キリトは左手を前に、右手を後ろに、腰を少し落として構える。

ソーナは右手を前に、左手を少し下げて構える。

そして、両者の中央に浮かぶウインドウが0になりデュエルが始まった。

「ふっ！」

「はあっ！」

キリトは始めに右手の剣を突きだしてきた。それをソーナは左の剣で反らす、そのコンマ一秒後左の剣が迫ってくる。だが、それはそこに当たる直前にソーナは右手の剣で防ぐ。

「やるな！」

「《二刀流》ソードスキル《ダブルサーキュラー》だよね」

「ああ」

「それじゃあ今度はこっちの番だよ！」

ソーナはそう言うか否や、キリトの剣を弾き、左の剣でキリトの胴を薙こうとする。

「ッ!？」

しかし、それはキリトがバックステップしてコートのボタンが取れただけだった。

だか、ソーナはさらに攻撃をする。右手の剣を振り上げ右斜めから振り下ろした。

「くっ!」

さらにそれをキリトは防ぐ。が、さらにソーナは左の剣で攻撃する。

「セアッ!」

「ッ!」

「ハアッ!」

ソーナは右手の剣にライトエフェクトを纏わせ、キリトを攻撃する。

「片手剣ソードスキル《バーチカル・スクエア》か」

「どうせなら私も使おうかなって、ね」

「なるほどな。じゃあどんどんいこうか」

「そうだね!」

「ハアアッ!!」

ソーナとキリトは、幾つものソードスキルを放ち剣戟を与える。

そして、互いのHPがレッドゲージにまで入り、残り一撃で戦闘不能となるところまで削れていた。

「これで決めるか」

「そうだね」

ソーナとキリトはそう言うのと、同じ構えをした。

右手を肩の高さまで上げカタパルトのようにし、剣の切っ先を相手に向け、左手を前にし構える。

「ハアアアアアアアアアアッ!!!」

右手の剣にクリムゾンレッドのライトエフェクトが付き、ジェットエンジンのような轟音が響く。

そして、剣を突きだしたような体勢で互いの位置を交換して止まった。

『D r a w』

空中に浮かぶウインドウにはそう表示された。

どうやら二人のHPが同時に0になったらしい。

「はあ、はあ、はあ。さすがキリト」

「ソーナこそ。さすがだな」

「ありがとうキリト」

キリトは剣を背中の中に戻し、ソーナは剣を取り出したように虚空の中へとしまった。

「さてと、これで終わったし戻ろうか」

ソーナはそう言い指をならした。

ソーナが指をならすと、次の瞬間には元のパーティー会場に戻っていた。

「おっと、そろそろ新年だね」

ソーナは時計を見ていう。

「ホントだな」

「今年は色々あったけど、みんなのお陰でなんとかいけたよ。ありがとう」

ソーナはみんなを見てそう言う。

「あ、みんなカウントダウンを始めるよ」

新たな始まりの地方 新しい地方 アローラ

カロス地方でのカロスリーグに始まり、フレア団の襲撃、カロスの危機、壊滅してしまつたミアレシティ復興、カントー地方への帰郷と目まぐるしい数日間が過ぎそのカントー地方のマサラタウンで疲れを取つて数週間後。

ここはアローラ地方にある4つの島の1つメレメレ島。
今ここには一人の少年と少年の相棒がいた。

「ピャツホー！気持ちいいぜ！なつ、ピカチュウ！」
「ピツカチュウ！」

俺の名前はサトシ。そして相棒のピカチュウ。
今俺たちはママのバリヤードが当てた福引きの景品でここ、アローラ地方のメレメレ島にバカンスで来ているんだ！

俺は今アローラ地方のライドポケモン、サメハダーに乗ってポケモンジエツトスキーを満喫している。

青い空、青い海、カントーのマサラタウンとは違う常夏の島。

どれもこれも新鮮で俺とピカチュウはわくわくしている！

「頼むぜ、サメハダー！」

「ピカピカチュウ！」

「サメツ！」

俺とピカチュウの声にサメハダーは一声上げ水中に潜つて行つた。水中には様々な水ポケモンが棲息していた。サニーゴやラブカス、ケイコウオ。更にはミロカロスまでいた。海の透明度は凄く遠くまで

見えるほどだった。

そのとき、岩に見たことないポケモンがいた。

そのポケモンは黒くてピンク色の棘が生えていた。俺は興味津々にそのポケモンに触れた。

触れるとポケモンは口のような場所から手を飛び出してきた。

「ぶわっ!?!」

「ピガッ!?!」

俺とピカチュウは驚いて口の酸素を思いっきり吐き出してしまった。

目の前にいるピースをしているポケモンは心配そうに見てきた。俺もとっさにそのポケモンにピースで返した。

だが俺もピカチュウも酸素を吐き出してしまったため水中に長くいられなかった。俺はサメハダーの背を軽く叩き浮上するように頼んだ。

「サダッ!」

サメハダーはすぐさま海面へと浮上してくれた。

「はあ、はあ、はあ……」

「ピカ、ピカ、ピカ……」

俺とピカチュウは水面に出ると大きく息を吸った。

呼吸が落ち着くと俺は、目の前にラプラスに乗って釣りをしている女の子がいることに気付いた。

その隣には、

「見たことないポケモン!」

俺が見たことないポケモンが手を叩いて笑っていた。

「アウツ、アウツ、アウツ」

女の子はいきなり現れた俺とピカチュウに驚いたようで呆然としていた。

手元の釣竿を見るとさっきまでは何か釣れていたであろう釣糸が上がっていた。

だが、肝心の糸の先には何もいなかった。

「あ、ごめん。脅かすつもりは無かったんだ。……もしかして、

俺たちのせいで逃がしちゃったか？」

「ううん、平気」

「本当にごめん。ラプラスもごめんな」

俺は視線を隣にいるポケモンに向けた。

目の前の女の子は視線に気付いたようで。

「あ、この子はアシマリ。水タイプのポケモン」

アシマリを抱いて言った。

「アウアウアウ」

「へえ、アシマリって言うのか。可愛いな！アシマリもごめんな。

じゃあ、俺もう行くな」

「えっ？あ、あの・・・」

「大物、釣れるといいな！それじゃあ！」

俺はそう女の子に言うのとサメハダーに行くように促し女の子を背に帰っていった。

side
????

ライドポケモンのサメハダーに乗った男の子は私に大きく手を振るとサメハダーに乗って遠くに行ってしまった。

「面白い人だったね、アシマリ」

「アウツ」

私は隣にいるパートナーのアシマリを見てクスツ、と笑った。

歳は私と対して離れて無いだろう。恐らく同年代だと思う。一緒にいたピカチュウを見るにあの少年は他地方から来たのだろうと推測出来る。だが私はあの少年の眼に浮かぶ好奇心を見た。彼の眼はポケモンが大好きで大切だと言うことを物語っていた。尚且つ彼と一緒にいたピカチュウにライドポケモンのサメハダーも彼の事を信

頼している感じだった。

それに私は自分のパートナーであるアシマリが褒められた事が嬉しかった。

「……名前聞いておけば良かったかな？」

「アウツ！」

side out

「ママー……！」

俺はサメハダーから降りライドポケモンレンタル屋に返すと走ってママとバリヤードのいる場所まで行った。

「あら、サトシどうしたの？アローラの海は楽しかったかしら？」

「うん！海が透き通っていたし見たことないポケモンがいーっぱいいたー！」

「ピカピカチュウ！」

「それは良かったわね」

「バリバリ」

「それじゃあそろそろ着替えて出発しましょうか」

「えっ？何処に？」

「オーキド博士のいとこさんの所よ」

「あつ、そう言えばそうだった」

俺たちはアローラ地方に来る前オーキド博士から届け物を頼まれたのだ。

時はアローラに来る前。

『このポケモンの卵を私のいとこのナリヤに渡してほしいのじゃ』

『もちろんですわ、オーキド博士』

『スママセンなー、ハナコさん』

『いえいえ。サトシがいつもお世話になっていきますから』

『それじゃあお願いします』

『わかりました』

オーキド博士から渡されたポケモンの卵を持って俺とピカチュウ、ママ、バリヤードはアローラ地方にバカンスに来たのだ。

ついでに俺はオーキド博士から空のモンスターボールを貰っていた。カロス地方と一緒に旅したルチャブルやファイアロー、オンバーンはオーキド博士の所にいる。

ゲッコウガは今、プニちゃんことジガルデとともにカロス地方を移動して、ヌメルゴンは故郷の湿地帯を守っている。

つまり今俺の手持ちのポケモンはピカチュウだけなのだ。

そして今。

今俺たちは、ケンタロスの引くタクシーに揺られながらオーキド博士のいとこのいるポケモンスクールに向かっていた。

途中、ママはお土産に新鮮な果物を持っていこうとバリヤードと共に果物屋で果物を見ていた。

俺はピカチュウとともにケンタロスタクシーで待っていると、近くの土が盛り上がりそこから俺の見たことないポケモンが出てきた。

「ん？わっ、見たことないポケモン！」

俺は瞬時にタクシーから降り出てきたポケモンへと走りよった。

「お前カッコいいな！なんていうポケモンなんだ！」

俺は見たことないポケモンだった為、顔をポケモンに近づけて言った。

そしてそのまま頭を撫でようとすると。

「ついだだだだっ！痛い痛い！」

ポケモンは俺の指をアゴらしきもので挟み込んで来た。

俺はあまりの痛さに飛びあがり手をぶらぶらとした。

なんとか振り払うとポケモンはまた穴を掘って離れていった。

「あっ！まって！」

だがポケモンはそのまま森の中に行ってしまった。

俺は見たことないポケモンに興味を祖刺られて。

「よし、ピカチュウ。アイツをゲットしてやろうぜ！」
「ピカッ！」

俺はピカチュウとともにポケモンを追って森の中に入って行った。

ポケモンスクールへようこそ！

「待てー！ー！ー！」

「ピカピーカ！」

俺とピカチュウはポケモンを追って森に来ていた。

追ったポケモンは一度土から出たあとまた土奥深くに潜ってしまった。

「どこだどこだ〜！」

俺はポケモンが潜った土を手で掘るが中々現れない。すると上から木の実が落ちて来た。

「痛。ん？これは・・・オボンの実？」

俺はいきなり降ってきたオボンの実で辺りを見渡した。

「あれ、ここ、何処だ？何処に卵を届けるんだっけ」

俺が辺りを見てみると。

”クウー、クウー”

と鳴き声が聞こえた。

「なんだ!?ポケモンか!?!」

辺りの木々を見ると左端の草木がガサガサなった。

出てきたのはピンクの手足に黒い体の着ぐるみ見たいな可愛いポケモンだ。

そのポケモンは右手を上げこっちに手を振っていた。

「おーいー！」

「クウー」

こっちも振り返すとポケモンも振り返して来てくれた。

俺はそのポケモンに触れようと近付こうとしたその瞬間。

「キィー！ー！」

目の前のポケモンは右手ですぐそばにあった木を一本折った。

「え!?!えええー!?!」

「ビツ!?!ビーガー!?!」

俺とピカチュウはその光景に口が塞がらなかった。

更に目の前のポケモンは左の木々を一本、二本とへし折っていつ

た。

「キーーーーー！」

「うわあああああー！」

「ピッ、ピーカーー！」

俺とピカチュウはすぐに後ろを向き走った。全速力で。

「キーーーーー！」

木々をへし折ったポケモンは俺たちを追い掛けてくる。

木々をへし折りながら。

しばらくすると後ろから木々が倒れる音やポケモンの鳴き声が聴こえなくなった。

俺は走ってきた方を見るとそこには誰もいなかった。

「た、助かった……」

「ピーカ……」

俺とピカチュウが安堵していると不意に頭上に影がうった。

上を向くと。

「あ、あれは！……リザードン！」

リザードンがいた。

リザードンはその背に人を乗せて奥に飛んでいった。

「追い掛けようぜ、ピカチュウ！」

「ピッカチュウ！」

俺とピカチュウはリザードンが飛んでいった方に向かって走った。

しばらく走ると森から抜け広い場所に出た。

「なんだ、此処」

「ピーカ」

そこには俺と同年代の子や、色々なポケモン。少し離れた所には大きな建物があった。

俺の目の前には大きな運動場。その奥には先程海で見た青いポケモン、アシマリと見たことないポケモン2匹がいた。

「おっーアシマリだー！他にも見たことないポケモンがいる！」

見たことないポケモンに、俺は興奮し目の前の柵を乗り越え近寄ろうとグラウンドを横切ろうとした。

すると。

「気を付けてー！」

ポケモンたちの近くにいた白いワンピースを来た女の子が言った。

「えっ?」

俺は立ち止まり女の子が言った意味を模索した。

すると横からドドドドツ、と言う音が聴こえてきた。

横を見ると3体のケンタロスが競い会うかのように走ってきたのだ。

前にサファリパークでケンタロスを十数匹ゲットし今はオーキド博士の所にいるが、ゲットしたケンタロスたちは俺が近くにいると凄いい速さで此方に来て、俺を撥ね飛ばすので瞬時に俺は横からくる3体のケンタロスをかかわそうとしたが時既に遅し。

「おおああああああ!!」

「ストローツプ!止まってケンタロス!」

避けること叶わず3体のケンタロスに撥ね飛ばされ、ケンタロスに乗っていた女の子の声で止まったケンタロスの土煙からは忠告してくれた女の子の近くに俺は落下していた。

「ケンタロスが来るので気を付けて下さい、と言おうとしたのですが………」

白いワンピースの女の子が俺に聞こえるように言ってきた。

「ピカピーン?」

「あの、大丈夫ですか?」

ピカチュウと白いワンピースを着た女の子が心配そうに聞いてきた。

「ああ、平気平気。俺、ケンタロスの突進には慣れてるんだゲットした事もあるんだぜ」

「そうですか。良かった………はっ、きやつ!」

女の子は安堵したようでホツとするが、俺の様子を確認しに来たケンタロスが来ると小さく悲鳴を上げ俺の背中に隠れた。

ピカチュウが女の子を覗きこんで見ると女の子は更に小さく悲鳴を上げ少し離れていった。

「もしかして、ポケモンが怖いのか？」

「こ、怖くはありません！ポケモンは大好きです！………学びの対象としてはですが」

女の子はポケモンは大好きなんだろうが何らかの事情があつて触れられないのだろうと俺は察した。

「ごめんね。突然森から飛び出してくるんだもん。急には止まれな
くって」

ケンタロスに乗っていた女の子たちがこっちにやって来てそう
言った。

「大丈夫！こちらこそごめんな、急に森から飛び出しちゃって。ケン
タロスたちは無事？怪我とかしてないか？」

「あ、ううん。大丈夫だよ。私たちもケンタロスたちも」
「そっか、それなら良かった」

俺は近くに来たケンタロスたちを一匹ずつ撫で謝った。

流石に十数匹もケンタロスがいるとケンタロスが好きな場所が感
覚でわかるため俺はケンタロスが気持ちいい場所を撫でた。

「ブモオ〜♪」

「凄いですね。こんなケンタロス初めて見ました」

「へへ。ケンタロスをゲットしてるって言っただろ。それでなんと
なくケンタロスたちが気持ちいいと感じる場所がわかるんだよ」

「へエー」

「すごい」

「ぼく、こんなケンタロス初めて見たよ」

「初対面のポケモンの筈なのに………」

「君もやってみる？」

「い、いえわたくしは………」

女の子は少し戸惑う感じで俺の手とケンタロスを交互に見た。
するとこの中で一番背の低い男の子が。

「リーリエはねポケモンに触れないんだよ」

と言ってきた。

「触れます！論理的結論としてわたくしがその気にさえなれば………」

！」

リーリエと呼ばれた女の子がそう反論する。

「……けどリーリエ、ここに来てからポケモンに一度も触れてない」
「うっ！」

青髪のアシマリを抱いている女の子の言葉にリーリエは息を詰まらせた。

「大丈夫。そのうち触れるようになるさ」

「そうだよ、リーリエ」

「はい……」

俺と緑色の長い髪の女の子がリーリエを励ますと、リーリエは涙目になりながら返事を返した。

俺はもう一度このアシマリを抱いている女の子を見た。

何故なら。

「あー！君確か、海で釣りしてた！」

つい先程、海で出会った女の子だったからだ。

女の子も思い出したようで。

「あ！ハギギシリの！」

「ハギギシリ？」

「そう。あの時、釣り上げてたポケモン」

俺は女の子に言われたポケモンを見てないためどんなポケモンなのか分からないが、どうやら俺とピカチュウが急に出てきたせいで逃げられたポケモンみたいだ。

「その……ゴメンな」

「ううん。平気」

俺とアシマリを抱いている女の子の会話がよくわからないのかリーリエを含む残りの3人は首を傾げている。

「ねえスイレン。スイレンの知り合い？」

「ううん。今日、海で釣りしていたとき偶然……」

「俺サトシ。こっちは相棒のピカチュウ。俺たちカントーのマサラタウンから来たんだ」

「ピカ、ピッカチュウ」

「へえ、カントー地方から。あ、あたし、マオよろしくね。こっちは仲良しのアマカジ」

「カ〜ジ」

「スイレンです。この子はアシマリ」

「アウアウ」

「ぼくはマーマネ。で、こっちはトゲデマル」

「マリユ」

「わたくしはリーリエです。よろしくお願いします」

「よろしくなリーリエ、マオ、スイレン、マーマネ。ところで……ここはどこだ？」

「ポケモンスクールよ」

俺の質問にマオが答えてくれた。

「ポケモンスクール………あ！ここがそうなのか!？」

どうやら気付かぬ内に当初の目的地であるポケモンスクールに来ていたみたいだ。

周囲を見ると確かに校舎のような大きな建物、大きな鐘などがある。

正に学校と言うものだろう。

「もしかして迷っちゃった？」

マオが不思議そうに俺を見て聴いてきた。

「あはは。実はそうみたい」

「じゃあ、あたしが案内するね」

「案内？」

「ほら、こっちこっち」

「お、おい………」

マオは俺の手を掴むと校舎の方に案内してくれた。

元から面倒見が良いのだろう。出会ってまだ数分しか立っていないのに友達みたいに接してくれていた。

マオと一緒にアマカジが宙に浮いてついて来てくれた。

アマカジが通ると仄かに甘い香りが感じられた。

その頃

カロス地方

カロス地方、ミアレシテイにある研究所で

「やあ、お帰り。ハウエンはどうだったかな？」

「はい！ヤシオさんの言っていた通りトライポカロンとはまた違う、ポケモンコンテストというものに参加して見ました！」

「ほう。それで？」

「トライポカロンとコンテストとはまた違って色々な事が学べたと思います」

「そうかい、それは良かった。ヤシオさんには伝えたかい？」

「はい、つい先程」

「それで……次はどこに行くつもりだい？」

「アローラ地方に行ってみようと思います」

「アローラ地方か……」

「はい。アローラ地方は独特の文化があるらしくそれもトライポカロンに活かせるかと」

「うんうん。いいね。君のアローラでの活躍を楽しみにしてるよ」

「はい！」

「あ、そう言えば確か今アローラ地方には彼がいるらしいよ
「彼？」

「サトシ君さ」

「え!?!サトシがですか!?!」

「うん。カントーのオーキド博士から連絡をもらってね」

「そうなんですか♪」

「それでなんだけどーつサトシ君に渡して欲しい物があるんだ」

「サトシにですか？」

「うん。実はこのモンスターボールを渡して欲しいんだ」

「このモンスターボール……もしかして！」

「その通り、そのなかにはあの子が入ってる」

「わかりました。必ずサトシに届けます」

「お願いするね」

「はい！」

”サトシ………元気にしてるかな”

「それじゃあ、頑張るんだよセレナくん」

「はい。行ってきますプラターヌ博士。皆さんによろしく伝えてくだ

さい」

アローラ、最初のバトル

俺はマオに手を引かれて校舎の中に入ると、目の前に全身骨格の化石が目に入った。

「おお！ プテラにアマルガ、ガチゴラスの化石だ！ すっげー！」

今まで色々な化石を見たがここまでの化石は見たことがなかった。

窓から外を見るとポケモンと一緒にバスケットボールやサッカー、野球、ポケモンバトルをしている子供たちが目にはいる。

「うおー！ ポケモンスクールって凄い場所なんだな〜」

俺が感動してそう言うのとマオがクスツと笑い、

「でしょ。ここはポケモンとトレーナーと一緒に学ぶところだよ！」
と説明してくれた。

「へえー。いいなあ〜」

俺は不意にそう口に出していた。

「ふふっ♪」

そのままマオと会話……と言うよりポケモンスクールについて聞いて歩いていると不意にマオが1つの扉の前で止まった。

どうやら目的地についたみたいだ。

マオはそのまま扉をノックし。

「校長先生、新生を連れてきました」

と言った。

「え!?! 新生!?!」

俺はマオの予想外の言葉に驚きを洩らした。

そのまま俺があたふたしていると中から扉が開かれた。

扉を開けてくれたのは。

「バリ?」

バリヤードだった。

「え? ポケモン?」

「バリヤード!..もしかして!」

「あら〜、よくここまで来られたわね」

「ママ!?!」

バリヤードに続いてママのハナコが中から出てきた。

「ちよつと見直したわ」

「良かった。先に来ていたんだ」

俺はポケモンスクールに来たのは良いがどうやってママに伝えるか悩んでいたのだ。

ママと会えて安堵しているとママの後ろから。

「アローラ、サトシ」

聞き覚えのある声が聞こえた。

「え？」

「ポケモンスクールへ、ようこそソルロック！」

「オーキド博士!?あれ、でも、なんか違うような……」

俺はポケモンの表情の物真似と名前を使ったギャグを言った人を見てそう感じた。

よく見ると、俺たちの知っているオーキド博士と目の前にいるオーキド博士は微妙に違う。

髪の毛は多く、肌は褐色だったからだ。

「はっはっはっは！よく似ていると言われるよ。私はカントーのオーキド博士のいとこ、ナリヤ・オーキドだ」

「この学校の校長先生なんだよ」

「へー」

「よろしくナツクラー」

「な、ナツクラーって……」

「あはは。校長先生は何時もポケモンギャグを言っているの」

「人もポケモンも一緒に、明るく仲良く暮らすのが、一バンギラス！」
そう言うとなリヤ校長は校長室の中に入ってしまった。

俺とマオ、ピカチュウ、アマカジはナリヤ校長のポケモンギャグに呆然としてしまい苦笑いを浮かべ校長室の中に入った。

「……それで、リザードンを追い掛けてきたら、たまたまここ

に出られたんだよ」

「なーんだ、新入生じゃなかったのね」

「ごめん。なんか説明する隙が無くて」

「ううん。こつちこそごめんね。あたしってよく、早とちりしちゃうんだ」

「いや、むしろここまで案内してくれてありがとうな、マオ。マオに案内してもらわなかったらママとバリアードに合流も出来なかったし、オーキド校長先生にも会えなかったと思うしさ」

「そうかな。……そう言ってくれると嬉しいよ」

俺とマオが互いの誤解を解いている間、オーキド校長は電話でカントーのオーキド博士と繋げていた。

「おーい、ユキナリ！私だ。無事卵は届いたぞ！」

『おー、ナリヤ。そうか無事に届いたか。ありがとう、ハナコさん』
「どういたしまして」

「ねえ、校長先生。サトシにキャンパスを案内してもいい？」

「もちろんポリゴン！ヤブクロン！」

「行こう、サトシ！」

「ああー！」

俺は期待に胸を膨らませ、マオと一緒に校長室を出た。

「ここが、あたしたちの教室よ」
「ピーカー」

「うわー、広いなく。凄くいい景色だ。それに……風が最高だぜ」
「ここだけじゃなくて、さっきあったグラウンドとか湖とか。この広いキャンパスで色々な事を教わるんだ」

「へえー」

俺はマオのこのポケモンスクールについて説明を聞き感動している。

「お二人さん、アローラ」

俺たちの後ろから新しい声がかげられた。

振り向いてみるとそこには日焼けした肌に白い帽子とサングラス、白衣を着た男性がいた。

「クワイ博士！」

「博士？」

「あたしたちの先生よ。博士、この子はサトシ」

「オーキド校長から聞いたよ。サトシ、ピカチュウ。ポケモンスクールは良いところだぜ。今日だけでも楽しんで行ってくれ」

「はい！」

「ピカア！」

クワイ博士と挨拶をしていると、外からポケモンのような声の用な声が聞こえた。

「あれは……」

外を見てみると校門でリザードンを連れた少年と、3人の人影が見えた。どうやら何か揉めてるらしい。

俺たちは急いで校門へと向かった。

校門へと近付くにつれてリザードンを連れた少年よ目の前にいる人影がわかった。

ドクロみたいなマークの入った服を着た怪しい人たちだった。

校門の柱の影に、リーリエ、スイレン、マーマネの3人が心配そうに見ていた。

「なんだ、あれ」

俺が聞くと。

「スカル団よ。無茶な事を言っではバトルを仕掛けてくる嫌な奴らよ」

マオが睨み付けるような眼でスカル団を見て言った。

聞くとリザードンを寄越せだとかバトルしろだと言っている。

だがリザードンを連れだした少年は落ち着いていて怯えも焦りもなく冷静だった。

少年が「後悔しても知らないぞ」と言うとスカル団の3人はモンスターボールをそれぞれ3つずつ手に持ち、ポケモンを出してきた。

それぞれヤングルス、ヤトウモリ、ズバットが3体ずつ合計9体だ。

少年はどうしたものかと考えている感じだった。

「まてー！」

だが俺はスカル団のやり方に少しイラッと来てしまい、気づけば少年の横にたっていた。

「サトシ、危ないよー！」

マオが心配そうに言ってきた。

リーリエたちもあたふたしている感じだった。

「なんすカ、お前」

「お前ら3人がかりで卑怯だぞー！」

「ふん。ならどうする」

「決まってる、俺も戦う。手伝うぜ。えくと・・・」

「カキだ。だが助けはいらない」

「危ないよサトシ！」

「よしっ！・・・行くぞピカチュウ！君に決めた！」

「ピカーー！」

俺はピカチュウを出した。

ピカチュウも元気よく、ひさしぶりのバトルに気合い十分の用だった。

「無理はするなよ」

隣の少年はそう言うと言いつつモンスターボールを取り出し投げた。

「行くぞ、バクガメス！」

出てきたのは赤い体の背中に棘があるポケモンだった。

「かーっこいいい！バクガメスって言うのか！」

「炎とドラゴン。両方のタイプを持つポケモンだ。俺の相棒さ」

カキがバクガメスについて説明してくれた。

「ヤトウモリ、ベノムシヨック！」

「ヤングース、かみつく！」

「ズバット、きゆうけつ！」

スカル団の指示に9体のポケモンが動き出す。

「ピカチュウ！でんこうせっか！」

「ピカッ！」

ピカチュウはでんこうせっかで一気にヤトウモリとの間を詰め攻撃した。

「速いっ！」

余りの速さにカキがそう呟いた。

残りの6体はバクガメスに攻撃を仕掛けた。

だが、バクガメスは攻撃を避けるのではなく背中で受け止めた。

背中に6体の攻撃が決まるといきなりバクガメスの背中が爆発した。

「今のは！」

「バクガメスの背中の棘は、刺激を受けると爆発するんだ」

「おー！かつけー！」

俺は素直にバクガメスを誉めた。

バクガメスは俺の言葉に嬉しそうに声を出した。

「ヤトウモリ、はじけるほのお！」

「ヤトオツ！」

ヤトウモリからはじけるほのおの攻撃がピカチュウに迫る。

「ピカチュウ、かわして10万ボルト！」

「ピカッ！ピーカー、チュー！」

ピカチュウの10万ボルトはヤトウモリ3体に見事に当たった。

「やったぜ！」

その俺たちのバトルを後ろの森の中から見ている存在に俺たちは全く気づかなかった。

「ピーカー！」

「へへ」

続いて攻撃を仕掛けようとする。

「後は任せろ」

カキがそういつて前に出た。

「えっ?」

困惑する俺をよそにカキはバクガメスに気合いをかけた。

「行くぞ、バクガメス!」

「バツスー!」

カキとバクガメスの気合いに左手の腕輪にはまっている鉱石が輝き出した。

「な、なんだ!?!」

「ま、まさか・・・アイツあの技を!」

「あ、あの技っすか!?!」

スカル団はカキの行動の事をわかるみたいだが、俺にはよくわからなかった。

「俺の全身!全霊!全力!すべてのZよ!アーカーラの山のごとく、熱き炎となって燃えよ!」

カキはセリフと踊りを合わせて行い、ポーズを次々決めた。バクガメスもカキと同じ動きを真似している。

そして最後のポーズを取ると鉱石の輝きがより一層増しバクガメスにへと注がれていった。

「喰らえーダイナミック・・・フルフレイム!!!」

バクガメスの口から巨大な炎の塊がヤトウモリたちに向かって放たれた。ヤトウモリたちに当たると大きな爆発が起こり、視界が煙で遮られた。少しして煙が晴れると、爆発が起こった場所には小さなクレーターが出来ており、そのクレーターの中にスカル団のポケモン全員戦闘不能となっていた。

新たる始まり

「喰らえー！ダイナミック・・・・・・・・フルフレイム!!!」

バクガメスから放たれた炎の塊は、ヤトウモリたち9体を纏めて呑み込んだ。

大きな爆音が鳴り響き煙が上がった。

煙が晴れるとそこには、大きなクレーターが出来ており中央にヤトウモリたちが纏めて戦闘不能になっている姿があった。

スカル団の3人は慌ててモンスターボールを取り出してポケモンを戻した。

そして。

「お、覚えてろ！」

「あ、アニキの言うとおりでやんす！」

「あんな、技使えるなら使えるって言えよな！」

「そうだそうだ！」

そう言うのとバイクに乗り何処かに行ってしまった。

「カキ・・・・・・・・今のつて」

俺はポケモン9体を一撃で戦闘不能にさせた技について聞いた。

答えを言ってきたのは。

「Z技さ」

ククイ博士だった。

「Z技？」

俺は聞いたことない技に首を傾げた。

「流石カキだね。スカル団相手に圧勝してるし」

「当然だ。俺のバクガメスはある奴等にやられるほど弱くないからな」

「バツスー！」

「サトシもピカチュウもかつこ良かったよ〜！」

「えへへ。そうか？」

「ピーカ」

「うんうん」

「あんなに素早いポケモン、私初めて見ました」

「ありがたいなピカチュウ」

「ピカッ！」

「それでククイ博士、Z技って？」

「ああ。Z技は、アローラ地方に伝わる、特別な技なんだ。この地方には4つの島があつて、それぞれ島の守り神と言われるポケモンがいる。そして、島めぐりと言われる儀式に参加し、島キングや島クイーンと言われる人から与えられる大試練を達成した者のみZ技が使えるようになるのさ」

「守り神のポケモンに島めぐり、大試練、そしてZ技！くー！やってみたいぜー！」

「ピカピーカー！」

俺とピカチュウは目を輝かせてククイ博士が言った単語を繰り返した。

「ははは。二人ともメガトンパンチ級に良いバトルだったぜ！」

「ふっ」

「へへっ！」

「サトシ、君はバトルが好きなようだね」

「はい！世界一のポケモンマスターを目指してます！」

「へえー」

ククイ博士は手を俺とカキの肩に回して言う。

「イテッ」

すると、俺の頭に何かが落ちてきた。

「これは……」

落ちてきたのは木の実。さっきも森のなかで落ちてきたオボンの実だった。

ふと顔を上げると一匹のポケモンが空を飛んで森の中に入っているのが見えた。

「なんだ、あのポケモン？」

「ポケモン？」

「え、どこ？」

「どこにもいないよ」

俺の言葉にマーマネ、スイレン、マオが辺りを見渡して言う。

「でもいたんだよ！あれは絶対ポケモンだよ！こう、何て言うの、黄色くて、鳥みたいに飛んでいて、頭にオレンジ色の……トサカみたいなのを付けた……」

俺が言うのとククイ博士たちは目を見開いて驚いた表情を出した。

「それって」

「カプ・コケコ……」

「メレメレ島の守り神、カプ・コケコを見たのですか!?!」

「守り神……カプ・コケコ……あれが」

俺は呆然とカプ・コケコが飛んでいった森に視線を向けた。

刻は進み夜

俺とピカチュウ、ママ、バリヤードは宿泊しているホテルでファイアーダンスなるものを見ながら夕飯を食べていた。ママとピカチュウ、バリヤードはファイアーダンスを見ながら夕飯を食べていたが、俺は思考を別のところにしていて、夕飯を食べながら俺は頭の中で、今日の事を思い出していた。

見たことないポケモン、ポケモンスクール、乙技、島めぐり、大試練、守り神のポケモンと今日1日で色々な事が体験出来た。

「何か面白い事でもあったの?」

「えっ?」

いきなりママにそんなこと聞かれた俺は、ママの顔を見た。ママの顔はすべてお見通しと言っている感じだった。

俺は今日あったことをママに伝えた。ママは優しい笑みを浮かべ

て俺の話を聞いている。
すると。

「ケーコー!!」

夜の街にそんな鳴き声が響き渡った。

「!?今のは!?!」

「ピカツ!?!」

俺とピカチュウは視線をホテルのレストランの外に移し辺りを見渡した。

すると空を何かが横切る姿が見えた。

俺は何か横切った先を見た。そこには、昼間見たポケモン。メレメレ島の守り神、カプ・コケコがいた。

カプ・コケコは俺の視線に気付いたのか何処かに行ってしまう。

「行くぞ、ピカチュウ!」

「ピカツ!」

「え、ちよ、サトシ!?!ピカちゃん!?!」

俺とピカチュウはカプ・コケコを追い掛けていく。レストランからはママの驚く声が聞こえてきた。

追い掛けると誰もいない、無人の公園にカプ・コケコはいた。

カプ・コケコは俺を待っていたかのように姿を見せると、奥の展望台へと飛んでいった。

俺はカプ・コケコを追って展望台へと辿り着いた。

展望台からはメレメレ島の街並みやビーチ、海が見え絶景だった。

カプ・コケコは展望台から少し離れた場所に浮いて、佇んでいた。

「島の守り神……カプ・コケコ」

俺はカプ・コケコへと一歩、一歩近づきそう呟いた。

カプ・コケコの蒼い瞳は俺とピカチュウを見据えている。

「なあ、どうして俺だけに?なんか言いたいこともあるのか?」

俺の問いにカプ・コケコは答えず右手を俺に差し出した。右手に何かを持っているらしい。

カプ・コケコの右手が開かれ持っていた物が現れる。

カプ・コケコが持っていたのは、中央に少し透明感のある黄色い鉱石を嵌め込んだ白い腕輪。

昼間みたカキの物と少し似ている感じがした。

腕輪はカプ・コケコの手から離れ宙に浮かんでいる。

「これを・・・俺に？」

俺は宙に浮いている腕輪をみてカプ・コケコに聞く。

「コー」

カプ・コケコは鳴き声を小さく出して頷いた。

俺はカプ・コケコを見て頷く。そして宙に浮かんでいる腕輪……

Zリングを手に取った。

Zリングに触れると眩い光がZリングから放たれ辺り一帯を光が包み込んだ。

Zリングを左手に装着すると光は消えた。

カプ・コケコは。

「コーケーー！」

満足したようで一声鳴くと何処かへ飛んでいってしまった。

そして2日後

「ママ、スゲーんだぜクワイ博士ん家！地下にはトレーニングルームなんてあるしもう最高だぜ！」

俺はマサラタウンの自宅にいるママにテレビ電話で会話していた。

「ありがとうママ」

『え?』

「俺がこつちに残りたいつて言ったときに、すぐに許してくれて」

あのあと、カプ・コケコからZリングを渡された俺はママとバリアードがいるホテルへと帰っていき、部屋で残らせて欲しいとお願いしたのだ。

ママは少し驚いた表情を浮かべるがすぐに頷き、許してくれたのだ。

そして今はククイ博士の了承を得て、ククイ博士の家に下宿させてもらっている。

『そんなの・・・母親ですもの。そう言い出すんじゃないかって思っていたのよ』

「あー!そう言えばポケモンスクール今日からなんだった!じゃあ、俺行くね」

そして俺はポケモンスクールに通う事になった。

新しく今までにない旅だ。

『ええ。気を付けて行ってらっしゃい』

『バリバリ』

「行ってきます!」

ママとバリアードにテレビ電話越しから送られ、俺とピカチュウはポケモンスクールへの道のりを駆ける。

途中、海が見える絶壁で。

「ピカチュウ。ここで俺たちの新しい冒険が始まるんだ」

海を見ながら言う。

「ピカッ!」

「よし。ピカチュウ、ポケモンスクールまで勝負だ!」

「ピツカア!」

「えっ!ちよ、ズルいぞピカチュウ!」

”俺たちはここ、アローラ地方で新たな冒険を始める。見たことないポケモンたちと。そして新たな仲間たちと”

俺はピカチュウと走りながらそう思った。

そして、もう一人

「今日からポケモンスクールね。テールナー、ヤンチャム、ニンファイア大丈夫？」

「テナツ！」

「ヤンチャ！」

「ファイア！」

「サトシ、遂に会えるわ……………それじゃ、行きましょう！」

新しい地方で冒険を始める者がいた。

再会

ポケモンスクールに着くと、授業が始まる前だからか生徒たちはあちこちで様々な事をしていた。

それはこれから俺が学ぶ教室も例外ではない。

教室ではマーマネがトゲデマルと一緒にホログラフを使いシステムを作製しており、リーリエとマオ、スイレンは女子どうし会話をそとしてカキは家が牧場のため、配達をしてからの登校だ。

「アローラー！」

ククイ博士が皆に挨拶をすると、皆席に着き挨拶を返す。

「二二アローラー！」

そしてククイ博士の後からは。

「アローラー！」

俺が入った。

黒板の正面に立つククイ博士の隣に立つとククイ博士が皆に俺の事を話す。

「今日からサトシもポケモンスクールの仲間だ。分からないことがあったら教えてあげてくれ」

「よろしく！色々ところちの地方の事を教えてくれ」

俺が席に座るリーリエたちに言う。

「それと・・・あともう一人いるんだが・・・」

ククイ博士が入ってきたところを見てそう言う。

「もう一人？」

「ああ」

俺は、もう一人いるとは思わなくククイ博士を見た。
すると。

「アローラー！」

オーキド校長先生が入ってきた。

「オーキド校長、どうしたんですか？」

「いやいや、もう一人をここに案内して来ダンゴロ」

オーキド校長先生はお馴染みのポケモンギヤグを言いククイ博士

に説明した。

「おーい。入ってきてても良いイワンコ！」

俺たちはオーキド校長先生が入ってきた後を見た。

「はいー！」

入口から声が聞こえてきた。女の子の声だ。

だが、俺とピカチュウは今の声に聞き覚えがあった。

「あれ？今の声って」

「ピカ？」

俺とピカチュウが首を傾げて思い出そうとしていると、入口から女の子が入ってきた。

その子は赤と白が基調の服を着ており、胸元の青いリボンが目立つ。そして瞳はいままで見たことないくらい綺麗な青。薄ピンクの帽子をしていないが間違いない。

「セレナ？」

入ってきた女の子にそう聞いた。

女の子は俺を見て笑顔で言う。

「久しぶり、サトシ」

最後に見た時より綺麗になったセレナは微笑みながら俺を見る。

ククイ博士とクラスメイトは、俺とセレナを交互に見て戸惑っていた。

「あ、あれ？大丈夫、サトシ？」

「あ、ああ！大丈夫。久しぶりだなセレナ」

「うん。サトシは元気だった？」

「もちろんさ。セレナは？」

「私？私はもちろん元気よ」

「ピツカア！」

「ピカチュウも久しぶりね。元気にしてた？」

「チャアー♪」

セレナはピカチュウを抱き上げ頭をナデナデした。

ピカチュウは気持ち良さそうに声を出した。

「あ、あの」

リーリエが手を上げて俺とセレナの方を見ていた。

よく見るとリーリエだけでなくマオやスイレン、マーマネ、カキ更にはククイ博士までも見ていた。

オーキド校長は何故か腕をくみ頷いている。

「あなたは、サトシとどういう関係ですか？」

疑問に思ったのかりーリエが聞いてきた。

「あ、ごめんなさい。私はセレナ。サトシとはカロス地方を旅していたとき一緒に旅をした仲間よ。ポケモンパフォーマーを目指しているの、よろしくね」

セレナは皆に自己紹介をした。

「セレナ、君を歓迎するよ。ポケモンスクールへようこそ。僕はククイ。一応、博士だよ」

「はじめましてククイ博士。よろしくお願ひします」

「それじゃあサトシとセレナの席はあそこで良いか？」

「はい！」

俺とセレナはククイ博士に言われた席に行き座った。

「それじゃククイ博士。よろしくお願ひマールイカ」

オーキド校長はまたしてもポケモンギャグを言い教室から出ていった。

そのまま朝のホームルームは終わっていった。

クラスメイトは皆、俺とセレナを笑顔で歓迎してくれた。

ホームルームが終わると最初の授業までは少し時間があるためそれぞれ自分の事をやっていた。

だが全員ソワソワしていて落ち着きがない感じだった。

誰も俺とセレナの所に来ないのはホームルームでの事を遠慮しての事なのだろう。

「それでセレナは何時、アローラ地方に来たんだ？」

「昨日の昼間かな」

「えっ!?!昨日!?!」

「うん。此方に着いてプラターヌ博士に連絡したらポケモンスクールに行ってみたらどう? って言われてね、ここで学ぶこともポケモンパフォーマーへの道のりかなって思ったんだ。元々アローラ地方の文化を学びたかったから。でもサトシもいるなんて驚いたよ。プラターヌ博士からアローラ地方にいるって聞いていたけど、まさかポケモンスクールで会えるなんて」

「セレナは頑張ってるんだな」

「そんなことないよ。サトシだってポケモンマスター目指して頑張ってるんでしょ」

「もちろんだぜ!」

「ふふっ。変わらないねサトシは」

「そうか?」

「うん。あの時と変わってなくて良かったよ」

「あ、あの時って……」

「うん。あの時だよ」

「……………」

俺はセレナの言ったあの時、を思いだし顔を赤くした。

「そ、それよりセレナは何処で生活するんだ?」

俺は話題を反らすため、セレナにこれからの生活を聞いた。

「今はホテルで寝泊まりしてるけど……」

「それじゃあ俺たちのところに来ないか?」

「えっ!?!サトシの?」

「ああ。俺、今実はククイ博士のところで下宿させてもらってるんだ」

「そうなんだ」

「だからどう?」

「えーと、それじゃあククイ博士に聞いてからで言いかな」

「ああ」

その直後、鐘の音が鳴り響いた。
どうやら授業開始の音らしい。

「よおし、みんな・そろそろポケモンサイエンスの時間だぜ。今日の講師は、なんとオーキド校長だ！」

ククイ博士がやって来るとそう言った。

俺とセレナのアローラ地方でのスクールライフが遂に始まった。

俺はチラリと隣に座るセレナを見てこれからの冒険を楽しみに心を踊らせた。

その日の夜、ククイ博士の家で。

「無事サトシと会えました、プラターヌ博士」

ククイ博士と相談してセレナは俺と同じくククイ博士の家で下宿させてもらうことになった。

そして今は、カロスのミアレシティにあるプラターヌ研究所に電話をしていた。

『セレナくん、それは良かったよ。やあ、久しぶりだねサトシくん』

「プラターヌ博士、お久しぶりです！」

『元気そうで安心したよ。ところでセレナくん、あれは渡してくれたかい？』

「あれ？」

「サトシ、はいこれ」

セレナはバックから一つのモンスターボールを取り出し渡してきた。

「プラターヌ博士、このモンスターボールは！」

『そう、君の察している通りだよ』

「で、でも何でセレナがこれを？」

『それは僕が頼んだんだよ』

「プラターヌ博士が？」

『うん。セレナくんが丁度アローラ地方に行くらしかつたからお願いしたんだよ。最初はカントーのオーキド博士に送ろうと思ったんだが、オーキド博士が「サトシは今アローラ地方にいますぞ」と言っていたから、セレナくんをお願いしたのさ』

「そうだったんですか……ありがとうございます、プラターヌ博士！」

『うん。それじゃ、二人とも頑張るんだよ。ミアレに来ることがあつたら何時でもおいで。後、ククイ博士にもよろしく伝えてくれ』

「はい！」

「わかりました」

そうして俺とセレナはプラターヌ博士への電話を終えた。

「まさか戻つて来るなんてな」

俺はソファーに座りセレナから渡されたモンスターボールを見た。

このモンスターボールの中に入っているポケモンは、俺がカロス地方で初めてゲットしたともに戦った仲間だ。

「私も驚いたわ、まさかプラターヌ博士のところに戻っているだなんて」

「セレナありがとうな」

「ううん」

「お二人さん、プラターヌ博士とは連絡終わったのかい？」

キッチンで夕飯を作っていたククイ博士がトレーに夕飯を載せてやって来た。

「はい。ククイ博士によろしくだそそうです」

「ははっ。そうかい」

ククイ博士は苦笑いを浮かべて言った。

「さてと……」

ククイ博士はトレーから夕食のアローラプレートを取りテーブル

の上に置いた。

「あ、ごめんなさいクワイ博士」

「良いつてことよ。それよりセレナ、セレナの親御さんは知っているのかい？」

「あー忘れてた」

セレナの言葉に俺とピカチュウ、クワイ博士はコケた。

クワイ博士はトレーの中身を全てテーブルに置いてあつたため問題はなかった。

「セレナ……」

「ピーカ……」

「あはは。後で連絡します」

「そうして方が良いだろう。よし、それじゃ食べよう」

俺たちはそれぞれ席についた。

ピカチュウとクワイ博士のポケモン、イワンコの前にはクワイ博士特性のポケモンフーズが置いてある。

「「いただきますー！」」

「ピカピーカ！」

「アンアン！」

クワイ博士が作ってくれたアローラ地方の代表的な家庭料理、アローラプレートはおいしかった。

今までに食べたことない感じの料理だ。

食事中スクールでの事を話し合った。

最初の授業、ポケモンサイエンスではアローラ地方ならではのポケモン。リージョンフォルムについて学び、リージョンフォルムのナツシーに俺が弾き飛ばされ階段から転がり落ちる事故？があつたが、俺の問題ない姿にアローラ地方の面々は呆気にとられセレナはやれやれと言う感じだった。

お昼にはクラス全員でご飯を食べ、カキに乙技について教えてもらった。カキの目は真剣で乙技についてはより一層学べた。

帰りはそれぞれ別々に帰っていき、俺はセレナと一緒にクワイ博士の家に帰った。

ククイ博士にはセレナの事を、昼休みの時点で相談しており問題なかった。

ククイ博士の家にはイワンコが待っており、イワンコは俺とピカチュウの姿を見ると駆け寄って来て飛びかかってきた。ピカチュウはピカチュウでイワンコと仲良くなっているって良かった。

「うまいっ！これ最高だよ！」

「ほんと、美味しいわね！」

「ははっ。気に入ってくれたようで何よりだ」

「ピカチュウはどうだ？うまいか？」

「ピカ！」

「良かったな、ピカチュウ」

「ピッカチュウ！」

俺は隣でイワンコと一緒にポケモンフーズを食べるピカチュウの頭を撫でた。

「ぐっ馳走さま！」

「はやっ！」

「いや、早いな……」

あまりの俺の早さにククイ博士はもちろんのこと、見慣れている筈のセレナまで驚いていた。

「だってスツゴくおいしかったんですよ！なっ、ピカチュウ」

「ピカ♪」

「って、ピカチュウまで!?相変わらず早いわねサトシとピカチュウは」

「そうか？」

「ピカ？」

「ははっ。イワンコもおいしかったか？」

「イワンツ！」

ピカチュウと同じく皿を空にしたイワンコがククイ博士によってきた。

イワンコはククイ博士に寄って一声鳴くとピカチュウへとより仲良く遊び始めた。

俺は自分の食器とピカチュウとイワンコのお皿を持って

流しに行き、食器を洗うと布巾で水気を取り食器棚に戻しピカチュウたちのところに戻った。

「ピカチュウもすっかりイワンコと仲良くなったな」

「もともとイワンコは人懐っこいポケモンだからな。とは言えこうも早くなつくのは珍しい事なんだけだな」

「そうなんですか。私も仲良くなれるかな?」

「セレナなら大丈夫だよ。呼んでみたら?」

「え。う、うん。おいで、イワンコ」

「アン!」

イワンコはセレナが呼ぶと駆け寄り、足元を回った。

少しするとイワンコはセレナの膝に登り座った。

「おおっ!やるじゃないかセレナ。イワンコもセレナの事気に入ったようらしいな」

「アン!」

「良かった。これからよろしくね、イワンコ」

「アン!」

イワンコは首もとをセレナに当てそのまま擦り付けるようにじやれた。

「いたたたたっ!」

「へえー、セレナもイワンコにやってもらってるのか」

「サトシ、どういう事?」

「イワンコが首の周りの岩をこすりつけるのは仲間同士のあいさつさ。まあ、一種の愛情表現ということだな。イワンコは、よっぽどセレナのことも気に入ったようだな」

セレナの疑問にククイ博士が夕飯を食べながら答えてくれた。

「そうなんだ。あれ、サトシ今、も、って言った?」

「え?ああ」

「ってことはサトシもイワンコにやってもらったの?」

「ああ。昨日な。ちよっとくすぐったかったけどな。ピカチュウもやってもらったぜ。丁度今、やってるな」

セレナは視線をピカチュウの方に向けるとイワンコが首もとの岩

を擦り付けてじやれていた。

ピカチュウは痛いと言うよりくすぐったいって言う感じだった。

「ほんとだ。ピカチュウとイワンコ仲良いわね」

「まあな。でもセレナもやってもらったからなついていると思うぜ」

「そうだと嬉しいな」

その時。

”ピリリリ!”

携帯の着信音が鳴り響いた。

「おっと、すまん俺だ」

ククイ博士は立ち上がると奥の方で着信相手と会話した。

「ご馳走さまでした」

セレナは食べ終わると俺と同じく食器を流しに入れ洗い、布巾で水気を取り食器棚に戻すと俺たちの方に戻ってきた。

「ところでサトシは何処で寝てるの?」

「俺?俺はそのロフトだけど」

「そうなんだ」

「セレナはどうするんだ?」

「私は……. どうしようかな?」

「確か今あの部屋使えないって言ってたんだよな。ん…….
セレナ、なんなら一緒に寝るか?」

「へっ?」

「俺はソファで寝るから、セレナは布団を使ったらどうだ?」

「え、えくと…….じゃあ、お願いね」

「ああ。まあ、と言っても部屋が使えるまでの期間だけだから」

「わかったわ」

その頃、ある場所に5人の人影があった。

『俺だ』

「ククイ博士、例の話実行しても良いですか？」

『おう。オーキド校長には話がついてるから安心しろ。サトシとセレナを驚かせてやれ』

「はい、分かりました」

『それで、明日俺は早く行けばいいのか？』

「はい、サトシとセレナをビックリさせてあげたいので先にお願います」

『了解だ。それじゃ楽しみにしてるぞ』

「はい」

「……ククイ博士なんだって？」

「オツケーだって」

「良かった」

「プログラム・ラン！だね！」

「おう！」

「はい！」

「ククイ博士は明日早めに出るって言ってたけど。サトシとセレナにバレない、かな？」

「大丈夫だろ」

「そうですよ」

「そうだね。えへへっ、楽しみだね。それじゃあみんな明日は計画通り、よろしく！」

「」「おー！」「」

ククイ博士も巻き込んだ、サトシとセレナを驚かせる計画が今、始まった。

サプライズイベントINアローラ!

ポケモンスクールにてカロス地方と一緒に旅をした仲間、セレナと再会した俺はセレナと一緒にククイ博士の家にお世話になっている。そして次の日。

「はっ、はっ、はっ。もう、なんで起こしてくれなかったんだよ」
「ご、ごめん。私もつい寝過ぎちゃって・・・」

俺とセレナ、ピカチュウは大急ぎでポケモンスクールに向かっている。

何故なら。

「このままじゃ遅刻しちゃう!」

俺たち二人は今、遅刻の危機に陥っているからだ。

「ところでセレナ、ククイ博士は?」

「私が起きたときにはもういなかったよ」

「どこ行っちゃったんだろ?」

「多分ポケモンスクールにいると思うよ」

「だいたいけど」

俺とセレナは走りながら会話をしていた。

「もう、ママったら・・・」

不意にセレナからその言葉が聞こえた。

セレナは昨夜、カロスのアサメタウンにいる母親、サキに連絡を取りこれからの事を伝えた。

昨夜

『はあー。セレナ、出来ればもう少し早く教えてくれても良かったんじゃない。しかもポケモンスクールに通うことになっているなんて・・・』

「ごめんってママ」

『まあ、いいわ。あなたの好きなようになさい。……セレナ、これからも頑張りなさい。ククイ博士、すみませんが娘の事どうぞよろしく願います』

『お任せください』

『サトシくんも、引き続きセレナの事お願いね』

『はい！分かりました』

『あ。どうせならサトシくん。セレナの事、貰ってくれても良いわよ』
「えっ!？」

「ちよ、ママ！」

「ふふ。それじゃあねセレナ。何かあったら連絡頂戴ね』

あの後、セレナは顔を真っ赤にして風呂場に行ってしまった俺はサキさんの言った意味が分からず呆然と立ち尽くし、ククイ博士は笑いを堪えるようにしてキッチンへと向かっていった。

その後セレナ、俺、ククイ博士の順に風呂に入ると、ククイ博士は自室に俺とセレナは2階のロフトに向かい、俺とセレナはそのまま、分かれた後の事を語った。

セレナはカロスからハウエン地方に行きポケモンコンテストに参加したらしい。

セレナからポケモンコンテストと言う単語が出てきた俺は昔一緒に旅をした、二人のポケモンコーディネーター。ハルカとヒカリを思い出した。

そして、互いの事を言っていると時間は日付を越える前になっていったため俺はソファで、セレナは布団で寝た。

そして今に至る。

「あ、見えた！」

「急ぐよ、サトシ！」

「ああ！」

視界にポケモンスクールの正門が見えてきた俺たちは、少しスピドを上げた。

そして、二人同時に校門を潜ると。
パァン！パァン！

両側からクラッカーが破裂した音が聞こえてきた。

「え？」

「な、なに？」

俺とセレナは困惑して 立ち尽くしていると。

「「アローラ・サプライズ!!」」

校門の両側からクラスメイトのリーリエ、スイレン、マーマネが出てきた。

3人は声を揃えて言った。

その少し後に俺の隣にカキが、セレナの隣にはマオが来た。

「ど、どういう事？」

「さ、さあ」

「驚いているようだな」

「驚いてるでしょ」

隣でカキとマオが言ってくる。

「あ、ああ。それよりサプライズって？」

俺とセレナの疑問にマオが答えてくれた。

「今日はね、サトシとセレナのサプライズ歓迎会を開くことにしたんだ！今のは、最初のサプライズね！」

「サプライズ歓迎会？もしかして、博士が先にいなくなっていたのって」

セレナが確信したように言った。

「はい。この企画の準備のためにです。もちろん、サトシとセレナにばれないように気を付けなければなりませんでしたが。その点は流石ククイ博士ですね」

リーリエがセレナに引き続いて言う。

「そうだったのか。みんなありがとう」

「ありがとうな」

セレナと俺が皆にお礼を言う。

「ふふくん。お礼を言うのはまだ早いよ。言ったでしょ、さっきのは最初のサプライズだって」

「そういえば・・・」

「そう言っていたね」

するとマーマネが前に出てきて立った。

「2番目のサプライズはこの僕、マーマネとトゲデマルからの挑戦状だ！」

「挑戦？もしかしてポケモンバトルか！受けて立つぜマーマネ！」

「いやいやサトシ、ポケモンバトルとは限らないでしょうが」

「え？そうなのか？」

俺はセレナの言葉に反応していると、リーリエたちに校庭に案内された。

そして校庭には・・・。

「・・・なんだこれ？」

校庭には大量の風船があった。

「はくい！これは、『先に風船を全部割ったチームが勝ち』ゲーム！」

「・・・へ？」

「あつ、風船を割るのは、人間でもポケモンでも構わないからね」

「なるほど。サトシは分かった？」

「んー、まあ、なんとなく。とりあえず風船を割ればいいんだな？よし、やろうぜ、ピカチュウ！」

「ピカッ！」

「じゃあ私は・・・テールナーお願い」

「テナッ！」

「おお。セレナはテールナーか」

ククイ博士がテールナーを見て言った。

俺は久しぶりにセレナのテールナーと会って喜んだ。

「おおっ！テールナー、久しぶりだなー！」

「ピカピーカー！」

「テナテナッ！」

「頑張ろうね、テールナー」

「テナー！」

「それじゃあ、始めるぞ。位置について、よいい、スタート！」
審判であるカキの号令に俺たちは駆け出し風船へと向かった。

「うわっ！割れない」

「ビーガー」

俺は押し潰したり、ピカチュウは噛んで割ろうとするが割れない。

「わ、割れない!?!」

「テナテナ」

セレナの方もどうやら苦戦しているらしかった。

マーマネとトゲデマルの方を見ると。

「はい、トゲデマル」

「マキュ」

トゲデマルの背の刺を上手く使って風船を割っていた。

「サトシもセレナも頑張ってる」

「ピカチュウとテールナーも」

「ポケモンの技を、使ってもいいんですよ」

「ポケモンの技を使っても良いのか。それじゃあ。ピカチュウ10万ボルト！」

「それじゃあこっちも。テールナー、連続でひっかくよー！」

「テナッ！」

マオとスイレンが応援するなかでリーリエのアドバイスの通りピカチュウに10万ボルトを、セレナはテールナーにひっかくを指示した。

「ピカッ！ピーカー、チューー！」

「よしー！」

「今だ！トゲデマル！」

「マキュ！」

ピカチュウが10万ボルトを出すとトゲデマルの背の刺が逆立ち電気を吸いとった。

「えー!?!」

「へへーん。トゲデマルの特性はひらいしん、なんだよ」

「マーマネがトゲデマルを撫でながら説明してくれた。」

「トゲデマル、そのままビリビリちくちく!」

「マキユ! マキユキユキユ!」

トゲデマルはそのまま回転しふうせんをどンドン割っていった。

「ま、まずい! ピカチュウ、連続でアイアンテール」

「ピカッ!」

俺とピカチュウも慌てて風船を割るが始めからリードしていた、マーマネとトゲデマルに追い付けず負けてしまった。セレナは惜しいところまで行つたが同様に負けてしまった。

「この勝負、マーマネとトゲデマルの勝ち!」

「あー、負けちゃったか。お疲れピカチュウ」

「ピーカー」

「ごくろうさま、テールナー」

「テーナ」

次に前に出てきたのはスイレンだった。

「サトシ、セレナ。次はわたしとアシマリとのバトルだよ」

「次は何かな?」

「ランニングから水泳の競争。ポケモンアクアスロンだよ」

「なるほどな。じゃあ今回は。ゲッコウガ、君に決めた!」

俺は昨日セレナから受け取ったモンスターボールを出し投げた。

「コウガッ!」

ボールから出てきたゲッコウガは何時ものスタイルで出てきた。

「久しぶりゲッコウガ。元気にしてたか!」

「コウガ!」

「久しぶりね、ゲッコウガ」

「ピカッ、ピカピーカ!」

「テーナ、テナテナ!」

「コウガッ! コウコウガ!」

「ほおー。サトシはゲッコウガをゲットしていたのか」

ククイ博士がゲッコウガを見て言う。

「はい！ゲッコウガはカロス地方での最初に仲間にしたポケモンなんですー！」

「なるほどな」

「それじゃ、私は。ヤンチャムお願い！」

「ヤンチャー！」

「おー。ヤンチャム相変わらずなんだな、セレナ」

「うん。でも動きは結構上達したのよ」

俺とセレナはピカチュウたちを見て話す。

ヤンチャムはピカチュウとゲッコウガに挨拶をしていた。

「あれがゲッコウガ。本で読んだことありますけど忍者みたいなポケモンですね」

「サトシ、ゲッコウガをゲットしていたんだ」

「水タイプのポケモン！ゲッコウガ！」

「僕、ゲッコウガ始めてみたよ」

「ああ、俺もだ」

アローラ組がゲッコウガを見てそれぞれ感想を言う。

「あ、でもこれじゃあゲッコウガにハンデがいるかも」

セレナがゲッコウガを見て言った。

「ハンデ？どうして？」

セレナの言葉にマオが訪ねた。

「俺のゲッコウガは結構素早いからな」

マオの質問には俺が答えた。

「それじゃあ、ゲッコウガにはハンデとして少し離れたところからスタート、つてことでもいいかな？」

「ああ。構わないぜ」

俺はマオの言葉に首を縦に振って同意しゲッコウガをスタート地点から少し離れた場所に立たせた。

「それでは参ります。位置について、よーい、スタートです！」

リーリエの合図にアシマリとヤンチャムが走りだし湖に向かう。

「頑張つて、ヤンチャム！」

「アシマリ、頑張つて」

地上ではヤンチャムがリードして水に入った。

ヤンチャムが水に入ると同時にゲッコウガが走り出した。

地上ではヤンチャムがリードしていたが水中ではアシマリがヤンチャムを追い抜きリードしている。

そのままアシマリがゴールするかと思いきや。

「コウガッ！」

ゲッコウガがアシマリを抜き先にゴールした。

ちなみにゲッコウガはちゃんと泳いでゴールした。

別に水上を走っても良かったのだがそれは俺が止めさせといた。

「うそっ」

「ゲッコウガ速すぎでしょ」

「しかもゲッコウガ泳いでましたからね」

「ここまで速いなんて。泳がなかったらどんだけ速いんだろう」

「想像以上だ」

結果としてゲッコウガ、アシマリ、ヤンチャムの順になったが俺とセレナ以外はゲッコウガのスピードに驚きなんとも言えないようだった。

「ゲッコウガ、お前更に速くなったな」

「ほんとね〜」

「ピーカ」

「テーナ」

「ヤンチャ」

「コウガッ」

俺たちはゲッコウガのさらなる速さに声を洩らしていた。

「サトシ。ゲッコウガ速すぎなかったか」

ククイ博士も驚きの余り目を見開かせながら聞いてきた。

「まあ、コイツはケロマツの頃から速かったですから。なっ、ゲッコウガ」

「コウガッ！」

「サトシとゲッコウガは互いの事をよく知ってるんだな」

ククイ博士は目を閉じてそう呟いた。

「ありがとう、サトシ。ゲツコウガ。物凄く速かった」

「いや。スイレンのアシマリも速かったぜ。なっ、ゲツコウガ」
「コウガ」

「また今度、勝負してくれる？」

「もちろんだぜスイレン」

「コウコウガ！」

「うん。楽しみにしてる」

俺とスイレンは握手をし、またの勝負を約束した。

その光景に俺とスイレン以外が拍手で互いの健闘を称えあつた。

守り神とのバトル

「次のサプライズは俺との勝負だ！。内容はケンタロスレース。二人はケンタロスに乗れるか？」

スイレンとのアクアトライアスロンが終わった後、俺たちはカキに連れられてグラウンドに来ていた。

「俺は大丈夫だぜ。ケンタロスは慣れてるからな。他にもいろんなポケモンに乗せてもらった事もあるし」

「なら大丈夫そうだな。セレナは？」

俺がカキに言うと、カキは頷きセレナに聞いた。

「私は多分大丈夫だと思う」

セレナは自信なさげに答える。

「大丈夫だってセレナ。サイホーンと要領は同じだからさ」

「それなら大丈夫かな」

そして、クラスメイトやピカチュウ、ゲッコウガ、テールナー、ヤンチャムが見守るなか、ククイ博士の合図によりケンタロスレースが始まった。

レースはセレナが1位、俺とカキが同時にゴールと言う結果になって終わった。

「ふう〜。やっぱりサイホーンとは違うわね」

ケンタロスから降りたセレナが俺にそう言った。

「そりやな。でもケンタロスもいいだろ」

「ええ。サイホーン以外だとマンムーだけだったわね」

「ああ〜。マンムーか、懐かしいなく。フロストケイブを越えるとき乗ったんだっけ」

「ええ。雪上だったからちよつと危なかったけど」

「はははっ。そうだったな。また乗りたいなマンムーに」

「うーん。私はいいかな〜」

「そうか？そう言えばあのときシトロン、顔青くしてたっけ」

「そうそう。ユリーカはなんでかシトロンとは違って楽しいらしいのよね。何でなのかしら〜」

「さあ。今度連絡して聞いてみるか？」

「そうしましょうか」

俺とセレナは今度、シトロロンとユリーカに連絡することにした。

「すごいよセレナ」

俺とセレナが話していると、レースに使用したケンタロスを世話していたマオたちがこっちに来た。

「うんうん。あんな自信無さげだったのに」

「僕たちもケンタロスにはよく乗ってレースするけどあそこまで速くは出せないよ」

「ああ。サトシにも驚いたが、セレナにも驚かされたな」

「ですね。サイホーンに乗ったことはあるみたいですけど……それによつてここまで違うものなのでしょうか？」

それぞれ感想を口に出していると、イワンコを抱えたククイ博士がやって来た。

「サトシ、セレナ。いい勝負だったぜ！」

「ククイ博士！」

「ありがとうございます、ククイ博士。イワンコもありがとう」

「二人とも。次のサプライズは俺とイワンコとポケモンバトルだ！」

「えっ、バトル!? しかもククイ博士と!? やったぜ! 最高のサプライズだ!!」

「はいはい、サトシ。ちょっと落ち着いて」

興奮する俺にセレナが声を掛けた。

その光景に。

「手慣れたる」

「まるで夫婦」

「いや、それは無いんじゃない」

「だが、二人は旅をしていたんだからそれはあなたがち外れてないかも」「いえいえ。せめてそこは恋人じゃないでしょうか？」

クラスメイトの5人はこそこそ話していた。

「それじゃあ、ククイ博士! 今すぐバトルお願……」「ちよつと待った」……」

俺が意気揚々にクワイ博士にバトルをお願いしようとしたとき、マオが待った、と言う風に手を前に出した。

「バトルの前に、アイナ食堂の看板娘、マオちゃんが腕を振るった料理で、ランチタイムだよ」

ところ変わって教室

「おっ待ったせ」

「おおっ！旨そう！」

「美味しそうだね」

マオが運んできたお昼ご飯に俺とセレナは興味津々だった。

「そうだ。ニンファイア出ておいで」

「ファイア！」

セレナは手持ちのポケモン全てを出した。

「おおっ。ニンファイア久しぶりだな。元気にしてたか」

「ファイア！」

俺はニンファイアに挨拶をした。

ピカチュウとゲッコウガも懐かしむように挨拶をしていた。

「セレナ、ニンファイアも持っていたのですね」

「うん、そう。この子はイーブイから進化したの」

「ファイア」

「でもニンファイア、イーブイの頃は人見知りだったんだよな」

「え？そんなんですか？」

「うん。ニンファイアがこうして大丈夫になったのは、サトシたちのお陰かな」

「そんなことないぜ。ニンファイアの進化条件はトレーナーとのなつき具合だろ。セレナが頑張つて向き合ったからイーブイはニンファイアに進化して人見知りが平気になったんだよ」

「ありがとう、サトシ」

マオが運んできたお昼ご飯はどれも見たことない料理ばかりで食欲がそそられた。ピカチュウたちもリーリエが考案しマオが協力して作ったポケモンフーズに、ご機嫌なようだった。

「うまいぜ！」

「美味しい！」

俺とセレナはご飯を食べてとっさにそう口走っていた。

「マオの家のお店、アイナ食堂はね、美味しくて大人気なんだよ」

「そうなのか？すごいな、マオ」

「うん。すごいね」

「そうかな？でもあたしもまだまだだよ。ポケモンフーズだって、前にリーリエから教えてもらったレシピ通りに作っただけだし」

「私はほんの少し材料を加えるように言っただけで、ほとんどマオが自分で考えたレシピですよ」

「リーリエの言う通りだよ。自分からレシピを考えようとするなんてさ。こんなに美味しく作れるんだ。マオは本当にすごいよ。なっ、セレナ、ピカチュウ？」

「ええ！」

「ピツカッチュウ！」

「ありがとう……サトシ、セレナ、ピカチュウ」

俺たちはマオの作ったお昼を十分に堪能した。

そのままお昼を食べ終わった俺たちはスクールにある、バトルフィールドへと向かった。

バトルフィールド

「おっ！来たな！」

バトルフィールドにはククイ博士がイワンコとともにスタンバっていた。

「お待たせしました。ククイ博士」

「大丈夫さ。サトシ、セレナ。マオの料理はどうだった？」

「うまかったです！」

「ええ。見たことない料理ばかりでしたけど美味しかったです」

「ははっ。そりゃ、良かったぜ。それで、どっちから先にバトルする？」

「サトシ、先にバトルしてもいいかな？」

ククイ博士がどちらかと聞くと、セレナが俺に言ってきた。

「いいぜ。頑張れよ、セレナ」

「うん！お願いねニンファイア」

「ファイア！」

セレナはニンファイアを連れてククイ博士とは反対側の立ち位置に立った。

くセレナsideく

私はニンファイアを連れてククイ博士とは反対側の立ち位置に向かった。

「用意はいいかいセレナ」

「はい！バッチリです」

「よし！それじゃリーリエ頼むぜ」

「はい、分かりました。それでは。これよりククイ博士とセレナによ

るポケモンバトルを行います。使用ポケモンは一体。どちらかのポケモンが戦闘不能になった時点でバトル終了となります」

リーリエが線の中心地に立ちルールを説明してくれた。

「頼むぜ、イワンコ！」

「イワン！」

「お願い、ニンファイア！」

「ファイア！」

「バトル、開始です！」

リーリエの合図によりバトルが始まった。

「ニンファイア、スピードスター！」

「ファイア、ファイア！」

「イワンコ、かわせ！」

「イワン！」

私の初手のスピードスターはイワンコにかわされた。

「イワンコ、かみつく！」

「イーワンツ！」

「避けて！」

「ファイア！」

イワンコのかみつくをニンファイアは後方に下がって避けた。

「素早いわ、あのイワンコ……ニンファイア、かげぶんしんでイワンコの周りを走って！」

「ファイア！」

「お！何かするつもりか」

ククイ博士は私の顔を見てそう言った。

「ニンファイア！走りながら、スピードスター！」

「ファイア！」

私は前に見たサトシの戦法をやってみた。

結果は。

「イワンコ、避けるんだ！」

ククイ博士はイワンコにそう指示を出すだが、ニンファイアはイワンコの周囲を走り回っており逃げる場所は何処にもない。

イワンコは限られたスペースの中でニンファイアのスピードスターを避けるが次第にかわしきれなくなり、スピードスターを受けた。

「フイーア！」

「いいわよ、ニンファイア！」

「ファイア！」

「大丈夫か、イワンコ」

「イワン」

「よし。今度はこっちからだ、たいあたり！」

「避けて」

咄嗟にニンファイアに指示を出すがいワンコのスピードが速くたいあたりがニンファイアに直撃した。

「ファイア!?!」

たいあたりを受けたニンファイアは空中に飛ばされるも器用に一回転して私の前に立った。

「大丈夫、ニンファイア」

「ファイア」

「まだ、行くぜ。イワンコ、たいあたり！」

「イワンツ！」

「ニンファイア、まもる！」

「ファイア！」

「そのままイワンコを捕まえて」

まもるでイワンコのたいあたりを防御した後、ニンファイアのリボンのような触手でイワンコを捕まえた。

「イワンコ！」

「ワン」

イワンコは触手から抜け出そうとするが抜け出せない。

「ニンファイア、そのまま、ようせいのかぜ！」

「フイーア！」

ニンファイアはイワンコを捕まえたままようせいのかぜを繰り返した。
た。

イワンコは身動きが取れないためようせいのかぜを避けることは

出来ず、攻撃を浴びた。辺りには砂煙が立ち込めた。

砂煙が晴れるとイワンコは目を回して気絶している姿があった。

「そこまで！イワンコ戦闘不能！ニンファイアの勝ちです！よって勝者、セレナ」

〈セレナ side out〉

ニンファイアのようなせいのかぜで砂煙が立ち込め、砂煙が晴れるとそこには気絶しているイワンコの姿が見えた。

「そこまで！イワンコ戦闘不能！ニンファイアの勝ちです！よって勝者、セレナ」

審判のリーリエがそう言うと、拍手の音が鳴り響いた。

「スゴいよ、セレナ！」

「うんうん」

「ニンファイアとの相性抜群だったね」

「ああ。俺もバトルしてみたいぜ」

横ではクラスメイトたちが拍手しながら今のバトルの感想を言っていた。

「セレナ、ニンファイア、お疲れ！」

俺はニンファイアというセレナに近寄り声を掛けた。

俺に続いてピカチュウたちもセレナに向かっていった。

「ありがとう、サトシ」

「ファイア」

「セレナ、最後のあれってもしかして……」

「うん。マーシユさんの戦法を取り入れてみたの」

「やっぱりか！」

俺は最後、ニンファイアの戦法を前に見た……と言うよりさせ

られた経験があるためすぐにわかった。

あれはカロスのクノエシティジムリーダーであるマーシユさんがパートナーのニンフィアを使って行った戦法だったからだ。

セレナとそのまま会話していると、イワンコを抱き抱えたククイ博士がやって来た。

「ナイスバトルだったぜ、セレナ」

「ありがとうございます、ククイ博士」

「次はサトシの番だな」

「はい！お願いします」

その時。

「コーケーー！」

辺りに声が鳴り響いた。

俺はその声にハッと顔を上げ、辺りを見渡した。

「今の声は……」

「ピーカ……」

すると、いきなり目の前に1つの影が現れた。

「うわっ！」

俺はいきなり現れたポケモン。メレメレ島の守り神であるカプ・コケコに驚きバランスを崩してしまった。

「サトシ！」

だが、慌ててセレナが支えてくれたため倒れはしなかった。

「メレメレ島の守り神、カプ・コケコです」

「あたし初めて見た」

「私も……」

「僕もだよ……」

「俺もだ……」

ククイ博士を含むクラスメイトたちは驚愕のあまり動けずにいた。

「サトシ、このポケモンは……」

この中で唯一守り神であるカプ・コケコを知らないセレナが隣から聞いてきた。

「このポケモンは、カプ・コケコって言うんだ。この島の守り神らしい」

「守り神のポケモン・・・」

俺はカプ・コケコに少し近づいた。

「また会えてよかったよ、カプ・コケコ。Zリングのお礼。ちゃんと言えてなかったしな。ありがとう」

俺がそう言うのとカプ・コケコは一声鳴き、俺たちの周りを移動し始めた。

「なっ!?は、速い!」

カキがカプ・コケコの速さに驚きそう口に出した。

カプ・コケコは再度、俺の前に姿を出すと帽子を奪って森の中に飛んで入っていった。

「あっ!待って!」

俺は慌ててカプ・コケコの後を追いかけた。

俺に追隨してピカチュウとゲッコウガも一緒だ。

「サトシ!」

後ろからセレナが俺を追い掛けて走ってくる。

更にその後ろにはリーリエたちが追い掛けて来ていた。

「サトシ待って!」

セレナがテールナーたちと追い掛ける中、リーリエたちは俺たちの速さに驚いているようだった。

「ちよ、サトシもセレナも速すぎ!」

「ゼエー、ゼエー。まっ、待ってよー」

「マーマネは俺が見ているから他はサトシたちを追い掛けるんだ」

「ククイ博士、わたくしも手伝います」

「てゆうか、アイツらどんだけ速いんだよ」

「それとも私たちの運動不足?」

カプ・コケコを追い掛けて森の中に入った俺は、しばらく行った先の少し開けた場所にいた。

目の前にはカプ・コケコが浮いている。

カプ・コケコはこの場所に来ると、素直に俺に帽子を返し、俺から距離を取りバトルの態勢を取った。

「もしかして……俺とバトルしたいのか？」
俺が聞くと。

「コー」

短く鳴いた。

「サトシ！」

「セレナ!？」

俺は後ろから追い掛けて来たセレナに少々驚いた。

「もお、速すぎるよサトシ」

「すまん。他のみんなは？」

「みんな追い掛けて来てるよ。そろそろ追い付いて来るんじゃないかな」

セレナは息を整えながら言った。

「それでサトシ。バトルするの？」

「ああ。もちろんだぜ！」

「頑張つてね」

俺とセレナの会話が聞こえたのか、追い付いて来たクワイ博士たちの声が聞こえた。

「次のサプライズは、俺じゃなくてカプ・コケコとのバトルか」

「わたくし、本で読んだことがあります。カプ・コケコは好奇心旺盛で、昔からトレーナーたちにポケモンバトルやアローラ相撲を挑んでいたそうです」

「よおーし！行くぜ、ピカチュウ！」

「ピーカ！」

セレナは俺から離れ、ククイ博士たちのところに行き、俺はピカチュウを出した。

「コー！」

カプ・コケコが鳴くと周囲の地面に電気が走り、辺りを電気のフィールドに包み込んだ。

「これは、エレキフィールド……シトロンがよく使っていた技と同じか……」

俺は電気のフィールドを見てそう呟いた。

すると後ろから。

「サトシ！エレキフィールドの中では、電気タイプの技の威力が上がるはずですよ！」

リーリエが助言をしてくれた。

「気を付けてねサトシ！」

「コウガツ」

「テナテナ」

「ヤンチャ、ヤンチャ」

「フイーア」

そしてセレナ、ゲッコウガ、テールナー、ヤンチャム、ニンファイアが応援してくれた。

「行くぜ、カプ・コケコ！ピカチュウ、でんこうせっか！」

「ピカー！」

初手に俺はピカチュウにでんこうせっかを指示した。

対するカプ・コケコも素早い動きでピカチュウにぶつかってきた。

ピカチュウとカプ・コケコが激突し衝撃波が発生した。

パワーの差でか、カプ・コケコと激突するとピカチュウは後ろに吹き飛ばされた。

「速いだけじゃない。強い。これが守り神のポケモン。大丈夫かピカチュウ？」

「ピカピーカー！」

ピカチュウは態勢を立て直すと、そこにカプ・コケコが迫ってきて追い打ちを仕掛けてきた。

「かわして、10万ボルト！」

「ピッカー！チュー!!」

カプ・コケコの攻撃をかわしたピカチュウは、技の隙をついて攻撃した。

10万ボルトが直撃し俺はよし、と言った。

だが。

「なっ、全然聞いてない!？」

「ピカチュウの10万ボルトに耐えるなんて……」

「力の差がありすぎる。これが守り神、カプ・コケコ……」

俺は愕然としセレナは驚いていた。カキはカプ・コケコを見てそう呟く。

愕然としていると、カプ・コケコが俺に突っ込んできた。俺は咄嗟に両手で身構える。しかし、カプ・コケコは俺の顔の前で止まり、そつと左手に装着しているZリングに触れた。

すると、Zリングはカプ・コケコから受け取ったときと同じ用に、目映い輝きを放った。

光の発元は中央に嵌め込まれているZクリスタルだった。

「もしかして、使えってことなのか」

俺の疑問に答えるかのようにピカチュウの前で、カプ・コケコは止まる。

「いきなりZ技を使うのか」

「大丈夫かな、サトシ……」

「Z技……でもサトシとピカチュウなら」

カキとマオが心配する中、セレナはZ技がなんなのか分からず首を傾げていた。だが、なんとなくカキとマオの言葉で分かったのか期待と心配の混ざった眼差しを向けていた。

「やろうぜ、ピカチュウ。Z技」

「ピカ！」

放て、全力のZ技！

「やろうぜ、ピカチュウ。Z技」

「ピカ！」

俺とピカチュウがZ技を放つ決意をすると、カプ・コケコが腕を動かした。カプ・コケコはZ技を放つのに必要なポーズを教えているらしかった。

俺とピカチュウは、目の前のカプ・コケコの動きを真似して、同時に動く。

そして、最後に腕を交差しポーズを決めると、Zリングからあふれでた光がピカチュウの体へと注ぎ込まれた。

「行つけえー！ピカチュウ！」

「ピーカ!!」

そして、俺とピカチュウの動きがシンクロし。

「これが俺たちの、全力だぁー!!!」

同時に右腕を突き出した。

ピカチュウの突き出した右腕から、巨大な電気の塊が発生し電気の槍……………雷槍が光のごとく放たれた。

「電気タイプのZ技!?!」

「ああ。スパークキングギガボルトだ」

後ろからカキとククイ博士が驚きの声を出して言う。

ピカチュウから放たれた雷槍は、カプ・コケコに命中し爆発すると、光輝く雷の柱となって空に消えた。

カプ・コケコに命中したZ技の爆発の影響で、俺たちは後ろに吹き飛ばされそうになる。飛ばされないように目を閉じ懸命に堪えているとやがて爆風は消えた。

爆発により煙が立ち込め、煙が晴れ目を開けると。

「なんて威力だ……………」

「わたくしこんな電気技、見たことありません……………」

「僕もだよ……………」

「あたしも……………」

「すごい……」

「ああ……エレキフィールドで電気技の威力が上がっているとはいえ、ピカチュウの電気技の威力が強化されたのがあのZ技なんだ……サトシとピカチュウ……とんでもないやつらだな」

そこには木々が風ぎ払われており、爆心地を中心に地面が抉れ、大きなクレーターが発生していた。

クワイ博士たちは、俺とピカチュウのZ技の威力に驚き、騒然としていた。俺自身も、エレキフィールドで電気技の威力が上がっているとはいえここまでとは予想していなかったのだ。

爆心地の中心には、カプ・コケコが両腕をくっつけガードした姿があった。

「これが……Z技……すごい威力だ」

「ピーカ……」

俺とピカチュウがZ技に啞然としているなか、カプ・コケコはガード状態から元に戻し、一声鳴くと何処かに飛び去ってしまっ

た。
カプ・コケコが飛び去っていくと、俺は急に力が抜けたように体のバランスが崩れた。

「サトシ!!」

「コウガツ!!」

バランスを崩した俺は、地面に膝をつく前にセレナとゲッコウガにより支えられた。

「大丈夫、サトシ」

「コウ」

「あ、ああ。なんか急に力が……」

セレナとゲッコウガに支えられながら言う。と。

「それは、Z技を放ったあとだからだ」

後ろからクワイ博士が言ってきた。

「Z技は、使用すると使用者の体力をゴソツと持っていく。つまり全力の攻撃なんだよ」

「そうなんだ。俺もまだまだ足りないな」

「いや・・・サトシが規格外すぎるんだ」

「え？」

「まあ、それは後で話そう。今は・・・」

ククイ博士が視線を自身の後ろに向けると、そこにはクラスメイトたちが心配した感じで立っていた。

「大丈夫、サトシ？」

「ああ・・・なんとかな」

「びつくりしました。これが、サトシたちの全力なんですね」

リーリエは、Z技の影響でなったクレーターを見て言った。

「あつ、Zリングが」

「ん？」

するとスイレンが視線を俺の左腕に装着しているZリングを見て言った。

Zリングを見ると中央に嵌め込まれていたZクリスタル。デンキZにひびが入り、砕け散ってしまった。

「Z技を使うには、まだ早かったということだな。試練も突破していないわけだし」

この中で唯一、大試練を受けZリングを所有するカキが俺のZリングを見ながら言う。

俺はしばしZリングを見て、決意した。

「俺、島めぐりに挑戦する！試練を受けて今度こそ、Z技を使いこなせるようになりたい！」

「ははっ。でんこうせっかのような決断だな」

「いいね。サトシ、あたしたちも応援するよ！ね、みんな！」

「うん！」

「もちろんです！」

「電気タイプには詳しんだよね、僕とトゲデマル。電気タイプのことなら協力できるよ〜」

「ふっ。いいぜ。俺も、お前の完全なZ技が見てみたいしな」

「ありがとう、みんな！」

クラスメイトたちの言葉に、俺は新たな目標と旅に胸を踊らせた。

カプ・コケコとのバトルを終えポケモンスクールに戻っている道中、最後尾にいる俺はセレナに手を貸してもらっていた。

理由は、Z技の反動で体力を持っていかれた為だ。

「大丈夫、サトシ」

俺の隣を歩いているセレナが心配そうに聞いてきた。

「大丈夫だ。後少しで自分で歩けようになると思う」

「そう？ならいいけど。……………サトシ。Z技を放って何か感じた事あるんじゃない？」

「何でわかったんだ？」

「サトシが倒れるのって、ゲッコウガとシンクロした時でしょ。だからなんとなく」

「……………Z技を放った時、ゲッコウガとシンクロするときと同じ感じになったんだ」

俺はセレナに、Z技を放った時からの事を話した。

「それって……………」

「わかんない。ゲッコウガの時と同じなのか違うのか……………」

「そうなんだ。……………プラターヌ博士が言っていたキズナ現象と関係あるのかな？」

「さあな」

「……………サトシは島めぐりをするんでしょ」

「ああ」

「その島めぐり、私も付いて行ってもいい？」

セレナが言った言葉に俺は少し驚いた。

「セレナさえ、良ければ俺は別にいいぞ」

「それじゃあ、島めぐりに行くときは私に声をかけてね」

「わかったよ」

セレナとそんな会話しているとあつという間にポケモンスクールに着いた。

「さて、サトシ。さっきの話の続きだが」

所変わって、ククイ博士の家に俺たちは帰ってきている。

あの後、サプライズの続きをもらいサプライズが終わると各自帰路に着いた。

ククイ博士とは帰り時間が少し違ったが、俺とセレナは昨日と同じように一緒に帰った。

途中、夕日に照らされた海を見たり、見た事ないポケモンに出会いながら帰ってきた。

そして、ククイ博士が家に帰ってきて暫くたち今に至る。

「まず……普通のZ技はあそこまで威力が高くない」

「えっ!」

「ククイ博士、”普通”と言うことはサトシは普通では無いと言うことですか?」

俺と一緒に聞いていたセレナがククイ博士に聞いた。

「それは分からない。だが、幾ら試練を受けてないとはいえZ技を放ち、あそこまで影響を出すとなると普通とは言えなくなるんだ」

「確かに木々が風ぎ払われていましたし、クレーターも出来てたね」

「まずZ技ってのは、トレーナーとポケモンが互いの信頼を深めて放つ技なんだ。例と言うならカキだな。カキのZ技。ホノオのZ技、ダイナミック・フルフレイムだ。サトシはカキがZ技を出すのを見たことあるな」

「はい」

「カキは相棒のバクガメスと一緒に放つ。Z技はトレーナーとポケモン、両方に多大な疲れを伴う。だが、カキとバクガメスは疲れは伴ってはいたが倒れはしなかった。そして今回サトシが放ったZ技。スパーキングギガボルト、を放つとサトシは急に力が抜けたんだな」

「そうです」

「それは、恐らくサトシの体力を根こそぎ使ったからなんだろう。だから力が急に抜けたんだろうな」

「それじゃあ、サトシはZ技を使えば体力を急激に失うってことですか?」

「うーん。まあ、体力は俺の家の地下にあるトレーニングルームでなんとかなるんだろう……今回の前例が無いんだよな」

「そうなんですか」

「まあ、なんとかなるだろう。俺も色々調べてみるさ」

「わかりました」

「はい」

その後、Z技について更に詳しく教えてもらった。

以前カキから簡単に教えてもらっていたが、ククイ博士の説明から更にZ技について知ったと思う。

そして、夕飯を食べお風呂に入り終わり就寝時。

ククイ博士は自身の部屋に、俺とセレナは2階のロフトへと向かった。

「ふふっ。楽しかったね今日のサプライズ」

「ああ。サプライズイベントを用意してくれたのは嬉しかったな」

「そうだね」

ロフトの上には小さな窓があり、そこから空に浮かぶ月と星が見える。

俺とセレナは空を見上げ語った。

ピカチュウたちはすでに寝ており、起きているのは俺とセレナだけだった。

そのあと、多々色々な事を喋り就寝した。

俺はセレナがいなかったら一人だったんだなと思いつつながら瞼を閉じた。

二人だけの休日

新しく出来た仲間。クラスメイトたちから歓迎のサプライズイベントを受け取った翌日、俺とセレナはククイ博士の家でのんびりしていた。

今、家には俺とセレナの二人だけしかない。

ククイ博士は、何か用事があるらしくイワンコとともに家を開けていた。

「んー……久しぶりね、こんなにのんびり出来るのって」

テールナーにブラッシングを掛けながらセレナが言う。

「そうだなー。ここ数日は色々な事があったからな」

俺も同意するようにして頷く。

「ピカピーカー」

「コウ」

ピカチュウとゲッコウガも同意するようにのんびりしていた。

正確に言うと二人とも寝っ転がり寝ていた。

「ピカチュウはともかく、ゲッコウガののんびりする姿久しぶりに見たわね」

「確かに……。コイツはゲッコウガになるといつつも鍛練ばかりしていたからな」

「それはサトシもでしょ」

「俺もか？」

「そうよ。だってサトシ、ゲッコウガになるんだって言って、ゲッコウガと一緒に走ったりして鍛練ばかりしてたじゃない。かっこよかつたけどね」

「ああ。そう言えばそんなこともあったな」

俺はゲコガシラがゲッコウガに進化し、キズナ現象によりサトシゲッコウガになるため互いをシンクロするための特訓をやっていたときの事を思い出していた。

「ところで、セレナ」

「なにかしら？」

「セレナは今日、このあとどうするんだ？何か予定でもある」
「ん〜．．．特にないかな。あ、でもシヨツピングモールに行つてみたいかな」

「シヨツピングモールか．．．俺も行ったことないんだよな」

「今度、ククイ博士かりーリエたちに案内してもらおうよ！」

「それいいな！．．．ん？あれ？」

「どうしたのサトシ？」

「いや。セレナ、あれ持っていないのか？」

「あれ？」

「カロスでよく使っていたピンク色のやつ」

「．．．．．あー！忘れてた！」

ズゴーツ!!

セレナの言葉にセレナ以外、俺、ピカチュウ、ゲッコウガ、テールナー、ヤンチャム、ニンフィアはその場でこけた。

「せ、セレナ．．．」

「ごめんごめん、サトシ」

セレナは荷物からカロスで使っていたピンク色の2面画携帯端末を取り出した。

「えーと．．．．．これね、シヨツピングモール」

セレナは端末を操作して表示されている画面を見せてくれた。

「おおーっ！すっごく広いな！」

「ええー！食料品売り場にポケモン専門店、ブティックにアクセサリーシヨツプもあるんだって！」

「へえー」

「サトシ！今度一緒に行きましょう」

「ん。ああ、別にいいぜ」

了承するとセレナは俺に背を向けて拳を握っていた。だが、顔は笑顔と言うより喜んでいる感じた。

「そうだ、サトシ。シトロンとユリーカに連絡しない？」

「おっ！それいいな。．．．．．ところでシトロンとユリーカの番号知ってんの？」

「へへーン。もちろんよー!」

セレナはそう言うのと電話に番号を打っていった。

そのままコール音が流れしばらくすると繋がった。

『はい、どちら様ですか?』

「ユリーカ、私よ」

『その声はセレナ!?ちよつと待っててお兄ちゃん呼んでくる!』

セレナからの電話にユリーカは驚いたようだ。

ユリーカはシトロンを呼んでいるらしく画面は真っ黒に染まってる。

しばらくすると。

『セレナ!』

「久しぶりね、シトロン」

『はい、お久しぶりです。それでどうしたんですか?急に連絡をくれるなんて』

「んー。ちよつとね。それとシトロン、ユリーカ、ここには私以外にもう一人いるわよ」

『もう一人?』

「俺だよ、シトロン」

『サトシ!』

『えっ!サトシ!?どうしてサトシとセレナが一緒にいるの!』

「実は俺たち今アローラ地方にいるんだよ」

『アローラ地方、ですか』

「ああ!俺たち、そのポケモンスクールに通ってるんだ」

『え!?!サトシが学校!』

『そこまで驚く事か?』

「そこまで驚くかしら?」

シトロンの驚きに俺とセレナが同時に答える。

『ええ、まあ。セレナはともかくサトシが学校、というのは……』

「あはははは……」

「?」

シトロンの言いにセレナはわかったのか苦笑いを浮かべて返す。

俺は意味がわからず疑問符を頭に浮かべた。

『それで、セレナ。どうしてセレナとサトシと一緒に写ってるの？そこ家、だよね』

ユリーカは背後の家具を見てそう言う。

『確かにそうですね』

「そ、それは……」

「どうしても何も一緒に住んでるからだけど？」

セレナは言いにくそうにし、俺は即直に答えた。

『え!?!』

『一緒に暮らしてるって……もしかして同棲!?!セレナやるじゃん』

「ん？一緒に暮らしてるって言うかスクールの先生。ククイ博士の家に下宿させてもらってるだけだぞ？」

「さ、サトシ……」

「セレナ、どうして顔赤いんだ？」

『やれやれ』

『どうしたんだいユリーカ？』

『ううん。サトシは相変わらずだなんて』

『?』

「と、ところでシトロン！ミアレシテイの方はどうかしら？」

セレナは顔を赤くしながらシトロンに聞いた。

『なおもあちこちで復興中ですよ。ですけどそろそろ元に戻ると思います』

「それはよかったわ」

「ああ」

『ジム戦のチャレンジャーも増えてるんだよ』

「へえ……シトロン、今度またバトルしようぜ！」

『サトシとバトルですか……いいですよ！承けて立ちます！』

「そう来なくちゃ！」

「サトシ、シトロン……」

『お兄ちゃん、サトシ……』

俺の隣でセレナが、画面の中ではユリーカが呆れている姿が見えた。

その後、他多色々と話、ゲッコウガが帰ってきたときには二人とも喜んでいた。

『それじゃあまた何かあったら連絡してください』

「おう」

「わかったわ」

『頑張つてねセレナ』

「ゆ、ユリーカ／＼／＼／」

「？」

『それでは失礼します』

『またねサトシ、セレナ』

「またな！シトロン、ユリーカ！」

「じゃあね二人とも」

二人と電話が切れると画面は黒く、何も写ってなかった。

「シトロンとユリーカ元気そうだったな」

「ええ！プラターヌ博士のところに行ったときは時間がなくて行けなかったもの」

「そうだったのか」

「ええ」

不意に時計を見るとすでにお昼の時間を過ぎていた。

「どうやらシトロンとユリーカと一時間以上話していたらしい。」

「いけない！お昼ご飯作らないと！」

「手伝うぜ、セレナ」

俺は立ちあがりセレナにそう言うと。

「大丈夫よ。サトシはテールナーたちのご飯お願い出来る？」

「わかった」

「お願いね」

その後俺はピカチュウたちのポケモンフーズを、セレナは俺たちのご飯を準備した。

ピカチュウたちも手伝ってくれたお陰で15分でお昼の準備が出

来た。

「どう……かな」

セレナがセレナの作ってくれたお昼を食べている俺に聞いてくる。

「うまいぞセレナ！腕あげたんじゃないか」

俺は素直に感想を言う。

「ありがとうサトシ／＼／＼／」

そして、いつも通り楽しくお昼を食べた後。

「ピカチュウ、アイアンテール！」

「ピカ！チュー、ピツカ！」

「ゲッコウガ、いあいぎりでガード！」

「コウガツ！」

「テールナー、かえんほうしゃ！」

「テナツ！」

「ニンファイア、スピードスター！」

「ファイア！」

「ヤンチャム、あくのはどう！」

「ヤンチャ！」

砂浜で俺はピカチュウとゲッコウガと一緒にバトルのトレーニングを、セレナはテールナー、ニンファイア、ヤンチャムと一緒にパフォーマンスの練習をしてる。

「ピカッ！」

「コウガツ！」

ピカチュウのアイアンテールをゲッコウガは両手に持った光輝く短刀。いあいぎりを交差させて防ぐ。

「コウ！」

「ピーカ」

「ゲッコウガ、更にレベルアップしたな！」

「ピカ！」

「コウガ」

「よし、ゲッコウガ。レベルアップしたお前の力見せてくれ！」

「コウガッ」

「ゲッコウガ、つばめがえし！」

「コウ、ガッ」

「ピカチュウ、でんこうせっか！」

「ピカッ！」

ゲッコウガのつばめがえしとピカチュウのでんこうせっかがぶつかる。ぶつかった衝撃で砂浜の砂が巻き上がる。

「！テールナー、ヤンチャム、避けて！」

「テナッ！」

「ヤンチャー！」

「うそー……ゲッコウガ、強くなりすぎでしょ」

近くでパフォーマンスの練習をしていたセレナの声が聞こえた。

事実砂煙が晴れると、ピカチュウのでんこうせっかとゲッコウガのつばめがえしの影響で砂浜の一部がえぐれていた。

「ピーカ」

「コウ」

ピカチュウとゲッコウガは互いに離れたところに行った。

「ちよつ、サトシ。やりすぎよ……」

「あ、ああ……」

「ピーカ……」

「コウ……」

俺とピカチュウ、ゲッコウガは自分達で起こした場所を見て啞然としながら答えた。

「と、ところでセレナは何の練習してるんだ？」

俺は話題を逸らすためセレナに聞いた。

「サトシ、話逸らそうとしてない？」

「気のせいだよ」

「まあいいけど。今はハウエン地方で見たポケモンコンテストのコンテスト技を練習してるのよ」

「コンテスト技か……俺たちも久しぶりにやってみるかピカチュウ」

「ピッカチュウ」

「え!? サトシ、コンテスト技出来るの?」

「一応な……行くぞピカチュウ!」

「ピカッ!」

「上空にエレキボール!」

「ピカッ! チュー、ピッカ!」

ピカチュウが打ち上げたエレキボールは空高くに登った。

「続けてアイアンテール!」

「チュー、ピッカ!」

ピカチュウはエレキボールと同じ高さにまで飛ぶとエレキボールを縦に半分、横に半分と4等分に切った。

「そこから回転10万ボルト!」

「ピカ! ピーカー、チュー!」

ピカチュウは10万ボルトを放ちながら空中で回転する。

ピカチュウの放った10万ボルトは電気の檻を作り出し、エレキボールと連鎖反応を起こし、4つに分かれたエレキボールが爆発し、綺麗な花火を起こさせた。

「ピカ!」

「お疲れ、ピカチュウ」

俺は着地したピカチュウの頭を撫でながら言う。

「ピッカチュウ」

「すごいわサトシ! ピカチュウ!」

「へへっ」

「ピーカ」

「サトシ、ポケモンコンテストに出たことあるの?」

「ああ、カントーとシンオウでの大会でな」

「なるほどね〜」

「セレナは今、コンテスト技でどんなことしようとしてるんだ？」

「ポケモンコンテストでのパフォーマンスをトライポカロンのパフォーマンスに活かせないかなって思ったんだけど……見るのとやってみるとじゃぜんぜん違うわね」

「まあな。でもセレナのやり方でやってみたらどうだ？」

「私のやり方？」

「ああ。トライポカロンでやって来たことを思い出してやってみたら？」

「……そうね。ありがとうサトシ。私のやり方でやってみるわ！」

「ああ、頑張れよ！」

「ピーカ！」

「コウガツ！」

「ありがとう、ピカチュウ、ゲッコウガ。……さあ、テールナー、ニンフィア、ヤンチャム。私たちも頑張っていくよ！」

「テナツ！」

「フィア！」

「ヤンチャ、ヤンチャ！」

その後、俺はピカチュウとゲッコウガとの訓練を止めセレナたちのパフォーマンスの練習を応援した。

セレナのパフォーマンスの練習を見ているとき俺は。

”なんだろうこの気持ち。なんかセレナの事をずっと見ていたい気がする”

そう思っていた。

ククイ博士とイワンコは夜に帰ってきた。帰ってきたククイ博士とイワンコは何故か疲れている様子だった。

夕飯はお昼に引き続きセレナの料理を食べた。

ククイ博士からもうまいぞと言われ、セレナはご機嫌だった。

食後お茶を飲んでいる最中ククイ博士が。

「サトシ、セレナ。明日ポケモンスクールに行く前に俺の研究室に来

てくれないか？渡したい物がある」
と言った。

俺とセレナはククイ博士の言葉に頷き、やることをやりおえると俺は何時の間にか眠ってしまった。

新図鑑、その名は……

昨日ククイ博士に言われたように、少し早く起きた俺とセレナはククイ博士の研究室に来ていた。

「おっ！来たな二人とも」

研究室に入ると、ククイ博士とイワンコがいた。

「おはようございます、ククイ博士、イワンコ」

「おはよう、ククイ博士。イワンコも」

「おう、おはようさん」

「ククイ博士、渡したい物ってなんですか？」

「これさ」

ククイ博士は、机に置いてあるふたつの赤い物を俺とセレナに渡した。

「ククイ博士、これは？」

「これは、ポケモン図鑑だ」

「ポケモン図鑑？」

「ああ。今から起動するところだ。ちょっと待ってな」

「待つ？」

「ククイ博士、何を待つんですか？」

俺とセレナが疑問に思っていると、不意に研究室の電灯が一瞬消えた。

「来たな」

ククイ博士が天井を見上げてそう呟く。

消えたり点いたりしてセレナが少し不安がり、俺の腕にしがみついてくる。

しばらくすると点灯が元に戻った。

その次の瞬間、研究室にあるコンセントのソケットから2匹のポケモンが飛び出してきた。

「ロトム!？」

俺は驚いてそう言うと、出てきた2匹のロトムはあちこち飛び回ると、俺とセレナの手に持つ図鑑に入ってきた。

「ククイ博士、これって一体……」

「この図鑑はな、ロトム図鑑と言って、ロトムが入ることによって起動する図鑑なのさ」

「ロトムが図鑑に!?!」

俺とセレナは、ロトムが入った図鑑に視線を向けると、ロトムの顔のようなものが一番上に現れた。

そして、何か機械的に言う듯起動し宙に浮いた。

『アッローラー! ユーザーサトシ。これからよロトしく!』

「おお! 喋った!」

俺の持っていたロトム図鑑がしゃべっていると隣でも。

『アローラ、ユーザーセレナ。これからよロしくね』

「ええ、こちらこそよろしくね、ロトム」

セレナがロトム図鑑と話していた。

「ロトム図鑑にはさまざまな機能や言語能力が備わってるのさ。ロトム、これからサトシとセレナをサポートしてやってくれ」

『了解ロト』

『了解です』

「ロトム、こっちは相棒のピカチュウだ」

「ピッカチュウ」

ロトムにピカチュウを紹介したあと、俺の図鑑のロトムがピカチュウの頬をピタッと挟み、それがくすぐったかったのかピカチュウは電撃を放ち、それに巻き込まれてセレナとセレナのロトム図鑑、ククイ博士が電撃を浴びた。もちろん、それには俺も入っている。

とまあ、そのようなひと悶着のあと朝食を食べ、ククイ博士は先に出了たため、俺とセレナで戸締まりをしポケモンスクールへと向かった。

道中、セレナの顔が赤くなっていて気になり聞くと、なんでもないと答えるので詳しくは聞かないでおいた。

「アローラー！」

「アローラー、みんな」

挨拶をして教室の中に入るとすでにクラスメート全員が揃っていた。

カキはマーマネと話しており、リーリエはスイレン、マオと会話していた。

「アローラー、二人とも。相変わらず二人とも仲良いわね〜」

クラスに入ると最初に、やっぱりと言うべきかマオが挨拶を返してくれた。

「そんなことないよマオ／＼／＼／＼」

セレナはマオの台詞に少し頬を火照らして返す。

幸いにも火照らした姿はマオたちには見えなかったため特に聞かれなかった。

「みんなに見せたいのがあるんだ」

「見せたいもの？サトシそれは……」

リーリエが首をかしげながら聞くと。

『アローラー！ぼくはサトシの凶鑑のロトム！よロトしく！』

『アローラー。私はセレナの凶鑑のロトムです。よロしくお願いします』

俺とセレナのロトムが出てきて自己紹介をした。

「へえ、ロトムが凶鑑に入ってるんだ」

「驚いた、話せるんだね」

『そうロト！あとの姿は、ロトムポケテックスフォーム、ロト』

「君、どういうプログラムで出来てるの？少し調べさせてくれないかな？」

マーマネがドライバーを持って俺の凶鑑のロトムに近づいていっ

た。

『お断りするロトム!』

ロトムは全力でマーマネの台詞に断っていた。

セレナたちはと言うと。

「へえ、このロトム女の子なんだ」

「そうなんですか?ですが、ロトムは性別不明のはずです」

「そうなの?」

「リーリエの言う通りよ。ロトムは性別が不明なの」

「でも、この子女の子だと思う」

「スイレン、その根拠は?」

「勘」

「「えっ?」」

「ロトム、あなたは女の子?」

『一応、私は女の子ですよ』

「ほらね」

「うそ」

「ほんとにそうだった」

「スイレンの勘恐るべし」

セレナたちは女子通し会話が弾んでいるようだ。

カキとマーマネと話していると、途中でククイ博士とオーキド校長が来てポケモンギャグを披露した。

ロトム図鑑には自動アップデート機能が備わっているため、ロトムはオーキド校長のギャグを取り入れギャグ返しをしていた。その光景にはさすがに呆れるとしか言えない感じだった

幸いにもそれは俺のロトム図鑑だけだったため俺はそつと安堵した。

オーキド校長が退室すると、ククイ博士が黒板の前に立った。

「さてと。みんな!今日の授業はフィールドワークだ!」

「えっ、本当?あたしフィールドワーク大好き!」

「いいな」

「うん」

「えー、僕歩き回るの苦手なのに〜」

「まあまあ、これも勉強ですから。頑張りましょう」

「フィールドワークかあ。新しいポケモンに出会えるかな、ピカチュウ、セレナ」

「ピカピーカー！」

「そうね！」

『そこは、僕にお任せロト。この辺りで野生のポケモンに出会う確率、83%ロト！』

『私も同じです』

「よし！セレナ、ピカチュウ、ロトム、行っくぞー！」

そう言うと俺はバックを背負って教室を飛び出した。

「ちよ、待つてよサトシ〜！」

セレナも追いかけるようにして出ていってしまい、リーリエたちは急いであとを追い掛けた。

ポケモンスクール裏の森

俺たちは今、ポケモンスクールの裏にある森に来てポケモンを探していた。

まだ、新しいポケモンをゲットしてない俺とセレナは期待と興奮を弾ませていた。

「早く会いたいなあ、新しいポケモン！」

「ふふ。サトシは相変わらずね」

「なんだかこの辺りは出るような気がするんだよなあ」

「そうなの？でも、サトシの勘って以外にあたるのよね」

「サトシは、どんなポケモンをゲットしたいと考えてるんですか？」

「んー、まだわからないや」

「それじゃあ、セレナは？」

「私もまだ、分からないかな」

「二人ともほんと似た者同士ね」

マオが俺とセレナを見てそう言った。

「タイプ相性は考えておいたほうがいいと思いますよ。サトシは島巡りをするみたいですから、バランスのいいパーティのほうが臨機応変に対応出来ますから」

リーリエがそうアドバイスを言ってくれる。

「俺やマーマネのように、一つのタイプにこだわるのも良いと思うがな。だが、対策を立てておけば、どんなタイプとも戦える」

カキは炎はタイプ、マーマネは電気タイプのポケモンを待っているためそう言う。

「まあまあ、そういうのサトシとセレナ。本人が決めることだし」
しばらく歩いていくと不意に茂みが揺れ中からポケモンが出てきた。

「あ！見つけた！」

俺は茂みの中から出てきたポケモンを見て言う。

全員の視線が出てきたポケモンに注がれる。

「？あれって、ピカチュウ？」

セレナが出てきたポケモンを見て言う。

出てきたポケモンは、何故かピカチュウと似たようなポケモンだったのだ。

「んー。ピカチュウ、じゃないわね」

「あれはミミツキユです。わたくし本で読んだことがあります。確かタイプは……」

『おっと、そこから先はぼくにお任せロト！ミミツキユ、ばけのかわポケモン。ゴースト・フェアリータイプ。ピカチュウそっくりの布切れをかぶっていること以外は、正体不明の謎多きポケモン。中身を見ようとした学者は、ショック死したと言われている』

リーリエの解説を俺のロトムがみんなに説明した。

「ショック死？」

疑問に思ったのかセレナは首をかしげミミツキユを見た。

「よし、ピカチュウ！ミミツキユをゲットだ！」

「ピッカチュウ！」

俺は肩にいるピカチュウにそう言うと、ピカチュウは元気よく前に飛び出して行った。

「ピカチュウ、アイアンテール！」

「ピカッ！チュー、ピツカッ！」

俺の指示でピカチュウはミミツキユにアイアンテールを仕掛ける。ピカチュウのアイアンテールは見事ミミツキユの頭部に命中した。ミミツキユはフェアリータイプを持っているため、アイアンテールは効果抜群のはずだ。

だが、アイアンテールが命中するとミミツキユの頭が、ガクツ、と支えを失ったかのように下がり、ミミツキユから不気味な笑い声が聞こえてくる。

「ピカチュウのアイアンテールが効いてない!？」

「サトシ！ミミツキユは特性、ばけのかわで、一度だけ攻撃を無効化することができるんです！」

「え、そうなのか？」

俺とピカチュウはリーリエの台詞に驚き動きを止めた。

すると、その隙にミミツキユがピカチュウに近づき攻撃を仕掛けてきた。

「ピカチュウ！」

「あれは、ミミツキユのじゃれつく、です！」

ピカチュウはミミツキユのじゃれつく、により吹き飛ばされた。さらにそこに追い打ちをかけるようにミミツキユは攻撃を仕掛けてきた。

「今度はシャドークローです！」

リーリエが後ろから説明してくれる。

「くっ！強い、こうなったら接近戦は止めだ！ピカチュウ、エレキボール！」

「ピカッ！ピカピカピカピカ、チュッビイ!!」

ピカチュウはミミツキユにエレキボールを放ったが、命中する直前、ミミツキユは尾のような物でピカチュウのエレキボールをピカチュウに弾き返してきた。

「ピカッ!?!」

ピカチュウは空中で慌てて身を捻り跳ね返されたエレキボールを避ける。

「大丈夫かピカチュウ!」

「ピカピカ!」

「よっし!お次は……」

俺がピカチュウに次の指示を出そうとすると。

「ちよつと待ったー!!」

何処からか声が響いてきてバトルを中断するかのようにつてきた。

「な、なんだ?」

俺たちが突然響いた声に驚いていると、目の前に4つの影が立ち塞がった。

その4つの影に。

「なんだお前たちは?」

俺は訪ねる。

「なんなんだお前たちは、と聞かれたら」

「聞かせてあげよう、我らの名を」

「花顔柳腰、羞月閉花。儂きこの世に咲く一輪の悪の花!ムサシ」

「飛竜乗雲、英姿颯爽。切なきこの世に一矢報いる悪の使徒!コジロウ」

「一蓮托生、連帯責任。親しき仲にも小判輝く悪の星!ニャースで、ニャース」

「ロケット団、参上!」

「なのニャー!」

「ソーナンス!」

出てきたのは毎度お馴染みロケット団だった。

毎度毎度新しい地方に行くごとに、新しい長ったらしい口上を述べるが、今回も新しくしたようだ。

『ロケット団？宇宙にでも飛んでいくロト？』

『宇宙にでも飛んでいくんですか？』

「やな感じ〜！なんて、飛ばないわよ！」

「ロケット団というのはだ、超有名な悪の組織の名だ！」

「そんなことも知らないなんて、困ったポケモン凶鑑だニヤ〜」

『!!!データなし。喋るニヤースを発見。新種のポケモンの可能性あり！』

『凶鑑データ、更新……アップデート完了しました』

ロトム凶鑑たちとロケット団のやり取りに、俺とセレナ以外はわけが分からないようだった。

「悪の組織？ロケット団？」

「聞いたことないけど」

「俺も」

「わたくしもです」

「スカル団みたいなのかな？」

「みんな、気を付けて！」

「あいつら、人のポケモンを奪う悪い奴らなんだ」

「ポケモンを!？」

スイレンたちは、ポケモンを庇うようにして動く。

俺とセレナは自然と前が出る。

「また、あんたたちなの！」

「おや、ジャリガールなんであんたまでこんなどこにいのよ」

「それはこっちのセリフよ！それにさっき、やな感じ〜！なんて飛ばされないわよ、って言っていたけど毎度毎度、やられて飛ばされてるのって誰だったかしら？」

「くうー！ムカつくわねジャリガール！」

「セレナ……」

「お前たちのポケモンは、全部俺たちロケット団がもらう」

「ついでにミミッキュもね。あの子見つけたのは、あたしたちが先な

んだから！」

「もお、毎回毎回本当にしつこいんだから！テールナー、ヤンチャム、ニンファイアお願い！」

「テナツ！」

「ヤンチャー！」

「ファイア！」

「えっ!?ちよつ、待つニャ!!?」

「待つわけないでしょう！テールナー、かえんほうしゃ！ヤンチャム、あくのはどう！ニンファイア、ようせいのかぜ！」

「テナツ！テー、ナー！」

「ヤンチャー！」

「ファイア！」

テールナーたちの攻撃は全てニャースに当たった。
はず、だった。

ミミツキュがニャースを攻撃の車線上から外させシャドーボールを放った。

「ピカチュウ、エレキボール！」

「ピカッ！チュ、ビツカツ！」

俺は瞬時にピカチュウにエレキボールを指示し、ピカチュウの放ったエレキボールはミミツキュの放ったシャドーボールに当たり弾き飛ばした。

「ミミツキュ！お陰で助かったのニャ」

ニャースがミミツキュに言うと、何故かニャースは驚いた表情を浮かべていた。

「ニャ、ニャんですとー！」

ポケモンの言葉が分かるニャースはミミツキュの言葉を訳して言った。

どうやら、ミミツキュはピカチュウの事をかなり憎んでいるらしい、断片的に聞こえた為詳しくは分からないが、ミミツキュがロケット団の方に着いたと言うことは確からしい。

「よおーし、ミミツキュ！なんでもいいから攻撃しちゃつて！」

ムサシの指示にミミツキユがピカチュウに攻撃を仕掛けてくる。

「ピカチュウ、アイアンテールで防げ！」

「ピカッ！チュー、ピッカ！」

ミミツキユの攻撃をピカチュウはアイアンテールで防いだ。

「あれは、ウッドハンマーです！」

リーリエが今の技を言ってくれた。

「ピカチュウ！」

「いいぞいいぞ、ミミツキユ行つけー！」

「ソーナンス！」

ついで攻撃を仕掛けて来ると思いきや。

突如現れたキテルグマによってムサシとコジロウが連れさらわれてしまった。それを追いかけるようにして、ミミツキユを連れてニャースとソーナンスが走っていった。

「行っちゃった」

「行っちゃったね」

「なんだったんだらう？」

「さあ？」

俺たちは今の光景に呆然と立ち竦むしかなかった。

「結局、ミミツキユ、ゲットできなかつたな」

「大丈夫ですよ、サトシ。アローラ地方には、まだまだたくさんポケモンがいます」

「そうだよ、サトシ。一緒に頑張っていこう！」

「へへっ、そうだよな。よし、ピカチュウ、ロトム。次のポケモンを探そう！」

俺はそう言うのとセレナたちと一緒に更に奥へと進んで行った。ゲットとはいかなかったがミミツキユと言うポケモンに出会え、バトル出来たことは良い経験になったと思う。

アローラで初ポケモンゲット!

とある休日。

マオの家、アイナ食堂に3人の人影があった。

「今日こそは、絶対ポケモンゲットだぜ!」

「張り切ってるね、サトシ」

「見つかるといいね♪」

俺、マオ、セレナの3人だ。

何故俺とセレナが、マオの家にいるのかと言うと。ククイ博士が不在だからだ。

ククイ博士は今朝早くに研究のため外に出掛けたため、俺とセレナはここにいるのだ。

ちなみに、アイナ食堂で朝食をご馳走になった。

アイナ食堂の料理は、人気なだけあってどの料理も美味しかった。セレナやピカチュウたちも絶賛だ。

「フラン、ポケモンスクール裏の森ってどんな感じかしら?」

「セレナがロトム図鑑に聞いた。」

俺とセレナのロトム図鑑は、ククイ博士から受け取ったものなのだが、どちらも図鑑の色が赤で見分けがつかなくなるため、俺のは普通のロトム図鑑を、セレナはロトム図鑑の色を赤から自身が使っている端末のピンク色に名前をフラン、と名付けた。

カロスを旅していたときは二人とも同じ図鑑だったのだが、今回はロトムが図鑑に入り見分けがつかないためそれぞれに分けることにしたのだ。

『ポケモンスクール裏の森、野生のポケモン出現確率は、86%ですよ』

セレナのロトム図鑑、フランが出現確率を言ってくれた。

「いいんじゃない?あたしがアマカジと出会ったのも、そのポケモンスクール裏の森だったし」

「カジ〜」

マオの側を浮いているアマカジから、ふわりと甘くいい臭いが漂っ

「3回もって……」

「アイツ、もしかしてお腹すいてんのかな？」

セレナと俺が、電線にぶら下がるモクローを見ながらそう言うと、足の力が弱くなったのか電線から外れ落ちてきた。

「やばっ！」

俺はテラスの柵を慌てて飛び越え、落ちてくるモクローをギリギリのところまで受け止めた。

「サトシ！大丈夫！」

「ああ！大丈夫！」

「よかったあくモクローはどう？」

「大丈夫だ。どこも怪我してない」

「そうして、サトシ！腕！怪我してるじゃない！」

「え？……あ、ほんとだ」

「ちよつと待ってて」

テラスに戻り、セレナとマオに言うと、セレナが俺の両腕の指摘で自分が軽く怪我をしていることに気付いた。セレナはリュックから簡易救急箱を取り出し、俺の隣に座り両腕のかすり傷を手当てしてくれた。

「ちよつと染みると思うけど、我慢してね」

そう言うとセレナは、脱脂綿に消毒液を付け、傷口に塗り絆創膏を両腕に着けた。

「サンキュー、セレナ」

「もお、気を付けてよサトシ。いくら何回もポケモンの技を受けてるからって、人はそこまで丈夫じゃないんだから」

「わかってるよ」

セレナが隣で心配そうに言ってきた。

俺はなんともないように元気よくセレナに言う。

俺からモクローを受け取り横に寝かせていたマオは、何故か驚いた表情をしていた。

「ちよつと待って!?!。今の会話から察するに、サトシってポケモンの技、直に受けたことあるの!?!」

「えっ？あ、ああ。あるぞ」

「よくピカチュウの電撃を食らっていたからね」

「……………」

俺とセレナの台詞にマオは、何とも言えない表情を浮かべ固まった。

ちなみにロトムとアマカジ、気絶しているモクロー以外、ピカチュウたちはセレナの言葉に同意したように頷いていた。

「と、とにかくこれからは気を付けてよ。あたしも心配するから」

「ああ。すまん」

しばらくすると、気絶していたモクローが少しずつ動き始め、徐々に目を覚ましていった。

「あ！気が付いた！サトシ！セレナ！」

マオの声に俺とセレナは、モクローを見た。

「モクロー、大丈夫か？よかった気が付いて」

「ええ。気が付いて、よかった」

モクローが背を覚ましたことに、俺とセレナはホッと安堵した。

モクローはそのまま、俺のリュックを感触を確かめていた。しばらくして、意識がはつきりしたのか周りを見て、近くにあった果物に飛び付いた。

「クローー！」

モクローは果物に飛び付くと、余程お腹が空いていたのか、果物にかぶりついた。

「すっげえ食欲だな」

『食べる量、スピードともに驚異的レベルロト……』

「あ！……サトシ、これ」

「サンキューセレナ。モクロー、これも食べるか？」

俺は、セレナから受け取ったポフレを、モクローに渡した。

モクローは、ポフレを受けとると少しずつ食べ始めていき、美味しかったのか徐々に食べるスピードを速めていった。

「クロツ、クロー!!」

ポフレを食べ終わるとモクローは、俺の肩に飛んでクロー、と鳴いた。

「もしかしてもつと食べたいのかな？」

「そうなのか？」

「クロツ」

「セレナ、ポフレってまだある？」

「ええあるわよ」

セレナは手元にある、ピンクの小型の箱。カロスで使っていたものを開け、中身を見せた。

「はい」

「サンキュー。ほらモクロー」

「クロ」

モクローは、やや足の力を強め体を固定する。

その力の強さの予想外に俺は少し驚くが、対して痛くもないのでそのままモクローにポフレを食べさせる。

そのまま、しばらくポフレや果物でお腹一杯になったモクローは、テーブルの上で幸せそうな表情を浮かべ鳴いた。

「お腹一杯になったのかな？」

「ポフレ全部食べちゃったしね」

「なんか、シトロンのハリマロンみたいだな」

「ふふ、そうね。ハリマロンはマカロンだったけど」

「そうだったな」

マオは、果物とセレナの作ったポフレを全部食べたモクローを驚いたように見て、俺とセレナはシトロンのハリマロンの事を思いだしな

がらモクローの羽を撫でていた。

モクローの羽は毛並みのように柔らかく、ずっと撫でていても飽きないくらいにフサフサ感だった。

俺とセレナの撫でようにモクローは気持ち良さそうな表情を浮かべる。

そのまま撫でてしているとマオが。

「ねーあたしも撫でていいかな?」

モクローに聞いた。

モクローは、クロー、と軽く鳴いた。

「良いってことじゃないか?」

「マオ、この羽気持ち良くて、柔らかいわよ」

「ほんとだ!ふかふかで触り心地がいいね」

そのまま俺たちは、モクローを撫でたりして手を放した。

「なあ、俺がモクローゲットしても良いかな?」

セレナとマオに聞いた。

「良いんじゃない!モクローもサトシに懐いてるみたいだし」

「ええ。いいと思うわよサトシ」

「サンキュー。モクロー、お前をゲットしてもいいか?」

俺はモンスターボールを取り出し、モクローに聞いた。

すると、モクローは何かを思い出したかのように近くにあった木の实を取ると、慌てて森の方へと飛んで行った。

「行っちゃった・・・」

「どうするのサトシ?答えは・・・聞くまでもないわね」

「ああ!俺はあいつを・・・モクローを絶対にゲットする!追い掛けようぜ!」

「ふふ、言うと思っていたわ。もちろん、私もついていくわよ」

「あ!あたしも着いていく」

俺たちはモクローを、追い掛けて森の中へと入っていった。

ようやく追い付いてモクローのいる場所を見ると、そこには多くの鳥ポケモンと一緒にいる、モクローの姿があった。

「あのポケモンは……」

『そこは、僕の出番ロト！ツツケラ、きつつきポケモン。ノーマル・ひこうタイプ。秒間16連打で木をつついてあけた穴に、食料を貯蔵する。ケララツパ、ラツパぐちポケモン。ツツケラの進化形。口にため込んだきのみ種を、敵や獲物に、一気に発射する』

『ドデカバシ、おおづぶポケモン。ケララツパの進化形。発熱させた嘴の温度は100度を超え、つかれただけでも大やけどする』

ロトムとフランが、モクローと一緒にいるポケモンを説明してくれた。

フランがドデカバシの説明をしている最中、ロトムはドデカバシに近づき、ドデカバシの嘴を触っていた。

少ししてロトムは、手をヤケドしたようであちこちを跳び跳ねた。

その光景に、フランは呆れ、俺たちは苦笑いを浮かべるしかなかった。

すると、ドデカバシたちと一緒にいたモクローが俺たちの方に飛んでくると、何故か俺の背負ってるリュックに入り込んできた。

「モクロー、お前こんなに沢山の仲間がいたんだな！」

「クロ」

「モクロー、すっかりサトシのリュックが気に入ったみたいね」

「ほんとだ」

『リュックに入るモクロー。データアップデート……完了しました』

モクローの行動にロトムとフランは、図鑑の更新をしたようだ。

そのまま、和やかにいると。

「クロッ！」

「な、なんだ!？」

何処からか投げられた網にドデカバシたちを捕らえられる。

俺たちとモクローが驚いていると。

「な、なんだ。と言われたら」

「聞かせてあげよう、我らの名を」

「花顔柳腰、羞月閉花。儂きこの世に咲く一輪の悪の花!ムサシ」

「飛竜乗雲、英姿颯爽。切なきこの世に一矢報いる悪の使徒!コジロウ」

「一蓮托生、連帯責任。親しき仲にも小判輝く悪の星!ニャースで、ニャース」

「ロケット団、参上!」

「なのニャ!」

「ソーナンス!」

「あんたたちこの間の!」

「また、あんたたちなの!」

「ロケット団!ツツケラたちを放せ!」

「そうはいかないわジャリボーイ。こいつらはキテルグマの食料を取ったんだもの」

「一宿一飯の恩義故、取り返させてもらおうぜ!」

「そしてピカチュウも一緒に、サカキ様にプレゼントするのニャ!」

「ミミツキユ、お願いつ!」

ムサシは手に持っていたボール。ゴージャスボールを投げた。中からは先日のミミツキユが現れる。

「キュキュ」

「ビーカ……」

ミミツキユの強さは、先日の戦闘で分かっているのため、俺もピカチュウも気は抜けない。

「ピカチュウ、気を引き閉めていくぞ!」

「ピカッ！」

「ミミツキユ、何でもいいからやつちやつて！」

「キユキユ」

「いくぞピカチュウ！エレキボール！」

「ピカッ！チュ、ビツカ！」

ミミツキユの放ったシャドーボールとピカチュウのエレキボールがぶつかり、両者の間で爆発が起こる。

「モクロー、今のうちに仲間を助けるんだ」

「クロー！」

シャドーボールとエレキボールのぶつかりで起こった爆発により、爆風が起こり俺は素早く背後のモクローにそう言った。モクローは、俺の指示にうなずくと素早く仲間たちのところに飛んでいった。

「ニヤ！？そうはさせるかニヤ！」

だが、ニヤースがモクローを妨害しようと立ち塞がる。

「テールナー、お願い！」

「テナッ！」

「かえんほうしゃ！」

「テーナ、テーナ！」

そこにテールナーを出したセレナがニヤースに攻撃を与える。

「サンキユーセレナ。ピカチュウ、ミミツキユに10万ボルト！」

「ピカッ！ビーカ、チュー！」

「ミミツキユ避けて！」

ピカチュウの放った10万ボルトを、ミミツキユは紙一重の所で避ける。

その攻防の間に、モクローはドデカバシたちが捕らえている網を切り裂き、ドデカバシたちを逃がす。

「よっし！」

「ピカー！」

「ピカチュウ！」

ピカチュウの方を見るとミミツキユは、シャドークロウとウッドハンマーを使ってピカチュウを攻撃していた。

ピカチュウはでんこうせっかどアイアンテールで避け、相殺していたが爆発の衝撃波で地面に叩きつけられた。

その隙を逃さずミミツキュは、ピカチュウに迫りじゃれつく、で攻撃をした。

「くっ……大丈夫かピカチュウ」

「ビーカ……」

「テールナー、ピカチュウを助けるわよ！かえんほうしゃ！」

「テナツ！テナー！」

「ソーナンス、よろしく！」

「ソーナンス！」

テールナーのかえんほうしゃはソーナンスのミラーコートで跳ね返される。

その間にもミミツキュは、ピカチュウに止めをさすように近づいていく。ミミツキュはシャドークロウでピカチュウを攻撃しようとしたそのとき。

「クロ！クロー！」

ピカチュウの周囲に落ちていた葉っぱがピカチュウを守るかのようにして舞い上がった

「モクロー！」

「この技は……このは!？」

ピカチュウを見失い辺りを見るミミツキュは無防備状態だった。

「よしっ！いまだピカチュウ！10万ボルト！」

「ピカ！チューー!!」

ピカチュウの10万ボルトはミミツキュに見事命中した。

ピカチュウの10万ボルトが当たり、倒れたミミツキュはそれでもかと言うように立ち上がる。

ミミツキュを見てピカチュウは警戒するかのようにして見る。
すると。

「え?」

「あ、あれ?」

「ニヤ!?なんニヤ!？」

ロケット団の後ろに現れた大きな手が彼らを捕まえる。

ロケット団の後ろに現れたのはいつぞやのキテルグマだった。

「これってなんだかデジジャビュ?」

「って、やっぱりキテルグマ!?!」

「キーツー!」

「「なにこの感じく」」

「ぞ、ソーナンス!」

「キュキュ」

キテルグマはロケット団全員を捕まえると、後ろを向き何処かに連れ去ってしまった。

「・・・・・・・・行っちゃったね」

「・・・・・・・・行っちゃった」

「・・・・・・・・ああ」

「ピーカチュ」

「テーナ」

何時もとは違う退場に長年の付き合いのある俺とピカチュウを初めセレナとテールナー、2回目のマオも全員を啞然と言うよりか呆然とするしかなかった。

「クロー!」

モクローのほうを見るとモクローは、ドデカバシたちのところにいた。

ケララツパが羽でモクローの頭を撫で、ツツケラがモクローを囲む。ドデカバシはモクローを見守っていた。

モクローは幸せそうにしていた。

「モクロー」

俺の肩に止まったモクローを見て言う。

肩にとまるとモクローは俺の頬にすり寄ってきた。

「ありがとうモクロー。お陰で助かった」

「仲間たちも助けられたみたいね」

「かつこよかったよ！」

「ピカ！」

「テーナ！」

『驚異的な蹴りだったロト』

『先程とは違って見えました』

次々に誉められたモクローは胸を張り、嬉しそうに照れた感じであった。

そのまま肩にいるモクローをしばらく撫でると俺は、モクローをドデカバシたちのいる近くの地面に下ろした。

「じゃあなモクロー。元気だな。・・・帰るぞ、ピカチュウ、ロトム」

俺の言葉にピカチュウたちは驚いていた。

「え!?!サトシ!?!」

『帰る!?!ゲットしないロト?』

「サトシ、どうしたの急に? あんなに、モクローをゲットするって言うてたのに」

『理解不能、理解不能』

『同じく理解不能です』

唯一、ピカチュウとセレナは多少は驚いていたものの、俺の言いたいことに分かったようだ。

「サトシがそれでいいなら私は何も言わないわ」

「ピーカツチュ」

「ごめんなピカチュウ、セレナ」

「ううん」

「ピカ」

「それに、これでいいんだ。だってモクローには、こんなに沢山の仲間がいる。モクローにとってあいつらは、みんな家族なんだよ。姿は違うかもしれないけど、それでも確かに親子で、兄弟で、仲間なんだ。だ

から・・・いいんだ・・・」

俺はモクローに背を向け、セレナたちにそう言うのと去るように歩き出した。俺の隣にピカチュウとセレナが並ぶようにして歩き、テールナーはセレナに付いていくようにしていく。マオとロトム、フランはその少しあとを追い掛けるようにして来る。
すると。

”バサリ”

背中のリユックから羽音が聞こえ、新たな重みが伝わってきた。後ろのリユックを見るとそこには、リユックから顔をだして俺の顔を見る。

「クロ〜」

「モクロー!?!」

モクローの姿があった。

「モクロー。お前どうして?」

俺がモクローに訪ねるかのように聞くと、モクローは羽でドデカバシたちの方を差した。

ドデカバシたちの方を見ると、ツツケラとケララツパは翼を振っていて、ドデカバシは俺を見て頷いていた。

俺はドデカバシの眼を見て、ドデカバシの言いたいことを理解した。

俺はドデカバシにうなずくと、モクローに聞いた。

「モクロー。お前、俺と一緒に来たいのか?」

「クロッ!」

「そっか。俺も、本当はお前と一緒にいきたいって思ってたんだ!」

俺がそう言うと、モクローはリユックから飛び出し、俺の目の前に降り立った。

『何をしてるロト?』

ロトムが不思議そうに聞いてくる。

「へへっ、モクロー。一緒に行こうぜ」

「クロ」

俺は取り出したモンスターボールをモクローに近づけ、そっと触れ

た。

触れると、モクローはモンスターボールの中に入り、ポンツ、と音を立てた。

「モクロー、ゲットだぜ!!」

「ピッピカチュウ!!」

『ロトオオ!』

「えええっ!」

『嘘でしょ!』

「ふふふっ」

「テナ、テナ」

後ろから驚きの声が響き、隣からは嬉しそうな声が聞こえる。

『こんなゲットの仕方って、ありロト!』

「ありだよ!」

「サトシだもん。ありだよ♪」

俺の普通じゃないゲットの仕方にロトムが驚きそれに俺とセレナは肯定する。

「出てこい、モクロー!」

「クローツ」

「これからよろしくな、モクロー」

「クロツ」

たった今ゲットし、新たな仲間になったモクローを出すと、モクローはそのまま俺のリユッククに一直線に潜り込んだ。

「ははっ。そんなに俺のリユッククが気に入ったのか?」

「クロッ」

俺の問いにモクローは、満足そうな顔で答えた。

『リユッククが好きなモクローもいる、情報アップデート』

「アップデートする必要あるのかしらそれ?」

ロトムの行動にセレナが少し戸惑ったように言う。

その言葉に周囲から笑いがあがった。

俺たちは、ドデカバシに別れを告げ出口へと向かっていた。リユッククからはモクローがドデカバシたちに羽で手を振っている。

アローラ地方での初ゲットを終えた俺は、新しい仲間モクローと共に
ここからの冒険を進んでいく。

スイレンとアシマリの夢

俺がアローラ地方に来てもう数週間の月日が流れた。新たな仲間、リリーエ、マオ、スイレン、カキ、マーマネ、ククイ博士やオーキド校長と出会い楽しく過ごしている。

そしてもう一人……。

俺は、横にいる彼女。セレナを見て思った。

「早く行こ、サトシ♪」

「ああ！今日も張り切って行こうぜ！」

「ピカピカツチュウ」

「ふふっ、元気いっぱいねサトシとピカチュウは」

『ほんとですね。サトシとピカチュウの、あの元気はどこから来るのですかセレナ？』

「さあ、私にもわからないわ」

『なるほど』

俺たちは今、下宿させてもらっているククイ博士の家からポケモンスクールへの道なりを進んでいた。

その道中。海岸付近を通っていると、不意に近くの砂浜に見知った姿が二つあった。

「おーい、スイレン、アシマリ！アローラ！」

「アローラ！スイレン、アシマリ」

俺とセレナがスイレンとアシマリに声をかけると、二人は顔を上げてこちらを見た。

アシマリを見ると特訓でもしていたのかバルーンを膨らませていた。

「サトシ、セレナ、ピカチュウ。アローラ！」

「アウ、アウ、アウ！」

スイレンとアシマリが俺たちに挨拶をすると、アシマリのバルーンが破裂した。

どうやら集中力が途切れたために割れたようだ。

アシマリはその破裂で後ろに回転しながら海に落ちていってし

まった。

しかしすぐさまアシマリは海から飛び上がってくる。さすがは水タイプのポケモンだと思う。

「ごめん！大丈夫だったか？」

「スイレン、アシマリ大丈夫？」

俺とセレナが心配そうに聞く。

「うん、アシマリなら大丈夫」

「よかった〜」

「そつか。じゃあ俺たち先に行くな。また後で！」

「うん！」

「アウー！」

俺たちはアシマリに怪我が無いことを確認すると、先にポケモンスクールに向かうことにした。

スイレンたちはまだしばらくいるみたいだ。

ポケモンスクール

スクールに着くと、クラスメイトであるリーリエ、マオ、カキ、マネの四人がすでにいた。

さつき会ったばかりのスイレンはまだいない。

「アローラ！」

「アローラ！」

俺とセレナが教室に入り挨拶をすると、リーリエたちも挨拶を返してくれた。

それぞれの席……と言っても俺とセレナの席は隣通しなのだが。に着くと、俺はリュックを机の上に置き開けた。

すると。

「うおつとつと！・・・ふう〜」

中から寝ているモクローが転げ落ちてきた。

つい先日ゲットしたばかりのモクローは何故か俺のリユツクの中がえらく気に入ってしまつた様で、よくリユツクの中に潜り込み寝ているのだ。

「モクロー、またリユツクの中にいたのサトシ？」

隣の席に座っているセレナが聞いてきた。

「ああ。まったく、リユツクの中で寝るときは気を付けろよ、モクロー」

俺はそう言うとモクローを優しくリユツクの中に入れてあげた。モクローは、リユツクから落ちたのにも関わらず相変わらず寝ているままだつたのには、セレナと苦笑するしかなかったが。

そんなやり取りをしているとスイレンが登校し、始業の鐘の音が鳴り響く。

鐘が鳴るとククイ博士が教室に入ってきて、今日も授業が始まつた。

刻は過ぎて帰りのHR

帰りのHRにて明日の予定をククイ博士から聞いていた。

「明日の課外授業は、海のポケモンたちとの触れ合いがテーマだ。みんなで沖に出るぞ。・・・さて、海といえばスイレンだ。明日はスイレンに、特別講師を頼んでいる。よろしくな、スイレン」
「はい、頑張ります」

ククイ博士の言葉にスイレンは、緊張するように立ち上り返事し

た。

「そういえばスイレン、俺と初めて会った時も釣りしてたな」

俺ははじめてスイレンと出会った時の事を思い出していた。

「うん、そうだったね」

「スイレンは、釣りの達人だからね。海のポケモンにも詳しいんだ」

マオがスイレンの側に寄って、友達を自慢するように言う。マオの言葉にスイレンは照れたように頬を少し赤くする。

「へえ、すごいんだな、スイレンって」

「そ、そうかな？わたし、海のポケモンが好きただけだし・・・」

「何言ってるんだよ。好きなことをちゃんと、極められてるってかっこいいし、凄いことじゃなか」

「ええ。そこまで一直線の人中々いないと思うわ」

「二人とも・・・ありがとう」

するとマーマネが、思い出したかのようにリーリエに聞いた

「釣りだと、ポケモンに触ることになるよね？大丈夫、リーリエ？」

「問題ありません！秘密兵器を用意していますから！」

マーマネの問いにリーリエが自信満々に答えた。

普段からポケモンに触れないリーリエが、大丈夫と言ったからには、その秘密兵器とやらでなんとかなるのであろう。

「ふふっ、なんかシトロロンみたいね」

「ああ。シトロロンは新しい発明を出す度に自信満々に言うからな」

俺とセレナは秘密兵器と聞いてシトロロンを思った。

シトロロンは新しい発明を出すと言った

”ふふ、サイエンスで未来を切り開く時！シトロニックギア、オン！”

と言うからだ。

そして、決まって必ず爆発する。

俺とセレナはそこまで思い出すと、声には出さずに笑った。

リーリエの言葉に安心したスイレンが近くに寄ると、抱いていたアシマリが、リーリエの膝の上に乗った。

「はうわっ！」

アシマリに、悪気はなかったであろうがリーリエはいつも通り固まってしまった。

「わあああ！アシマリったら……」

スイレンがアシマリを慌ててリーリエの膝の上から、自分に移すと、リーリエのフリーズが解けた。

「おっと。気を付けてくれよ、アシマリ」

「ごめん、リーリエ。アシマリも、ごめんなさいだよ」

「アウ……」

「い、いいですよ」

フリーズから戻ったリーリエは、自身が流す冷や汗をハンカチで拭き取り、謝るスイレンとアシマリに微笑を浮かべて返した。

「それじゃあみんな、明日は釣竿を忘れないようにな」

ククイ博士はそう言う教室から出ていった。

「釣竿？……あっ！俺持ってない！」

「わ、私も……」

俺とセレナは釣竿を持っていないことに気が付き慌てた。

「私の家にあるの、貸してあげる」

「いいの！」

「うん。たくさんあるから」

「助かるよスイレン！」

「ありがとうスイレン」

俺とセレナはスイレンから釣竿を貸してもうことになった。

そして。

俺たちはスイレンから釣竿を借りるためにスイレンとともにスイレンの家に向かっていた。

その道中。

「あの、ちよつと寄り道してもいいかな？」

「寄り道？ いいぜ。セレナは？」

「私も大丈夫よ」

「ありがとう」

俺たちはスイレンの案内で、朝とは違う砂浜に来ていた。

そこは、人氣がなく、プライベートビーチ、という感じの砂浜だった。

「そういえばスイレン、朝のあれ、二人で何していたの？」

「ああ。そう言えばなんかやっていたな」

「あれはね、アシマリとバルーンを造る練習をしていたんだ」

「バルーン？」

『アシマリは、水でできたバルーンを操ることができるロト』

「そうなのか。いつもここで練習しているのか？」

「うん。ここ、私とアシマリの思いでの場所」

「思いでの場所？」

「そう。会ったの、ここで……」

そしてスイレンが話してくれた。

アシマリと出会った時の事を……

この近くでライドポケモンのラプラスに乗り、釣りをしていたとき、ここでアシマリが大勢のスカル団に苛められていたそうだ。とつさにラプラスとともに向かい、スカル団をラプラスのれいとうビームで氷漬けにし、アシマリを助けすぐさまポケモンセンターへ駆け込んだ。

幸いにもアシマリはすぐに回復したが、スカル団のせいで人に恐怖心を抱くようになってしまったそうだ。

スイレンは、アシマリを助けるために付きつきりで看病し、互いに信愛を抱きパートナーになったらしい。

ピカチュウとアシマリが砂浜で遊ぶなか、岩に座ってスイレンの話聞いていた俺とセレナは、二人が出会えて嬉しくなった。

「よかったな、アシマリ。スイレンと出会えて」

「ほんと、よかったわね二人とも」

「アウ！」

「アシマリ、バルーンの練習、頑張れよ！俺も応援してる」

「私も応援してるわ！」

「ありがとう、サトシ、セレナ。うまくできるようになったら、二人も入れてあげる。バルーンに」

「へ？入れるって？」

「どう言うこと？」

「夢があるの」

「夢？将来なりたいものとか？」

「ううん。私の、私たちの夢はね、アシマリの作った大きなバルーンの中に私が入って、海の中、どこまでも、どこまでも、行くこと。そしてたらきつと誰も見たことない、深海のポケモンにも会えるかも」

「いいなそれ、俺もやってみたいな」

「私もやってみたいかも」

「絶対、大きくしようね、アシマリ」

「アウ！」

『でも、アシマリは通常、小さいバルーンしか作れないロト』

ロトムが疑問符を浮かべてそう言ってきた。

フランもロトムと同じく疑問符を持っているようだ。

確かにロトムの言う通りだろう。

基本図鑑に載っているデータは外れることはない。だが、例外として育て方やポケモンの能力等によっては変わることもある。

「そんなのやってみないとわからないだろ？スイレンとアシマリならできるーいや、絶対出来るさー！」

『きわめて非論理的な理屈ロト・・・』

「あははは・・・」

『セレナはどうなのですか？』

「うーん、私も確証はないかな。けど、常識はずれなのはどっかの誰かさんで見馴れちゃってるのよね」

『なるほど。なんとなくわかりました』

フランはセレナの視線の先にある、俺も何故か見ていた。

「ん？常識はずれてのはどういう意味だセレナ？」

「まるでそんな常識はずれなことはしてない言いつぶりね」

「え？違うのか」

「いやいや、あんなことする人が常識はずれじゃないっておかしいでしょ？」

「そうか？」

常識はずれと言われても俺にはさっぱりわからなかった。

セレナを見るとやれやれ、といった感じだった。

やがて、アシマリの特訓が始まった。

「アシマリ、練習してみよう。今度はゆっくりね」

「アウツ！」

俺たちが見守るなか、アシマリは徐々にバルーンを膨らませていった。

朝の時とは段違いに大きいバルーンだ。

『50%、60%、まだまだいくロト!?!』

「おお！スツゲー！」

「スゴい、朝見たときよりも大きい……」

「スゴいよ、こんなの今まで見たことないよ」

『100%、110%、120%……』

アシマリの作ったバルーンは、アシマリが離し俺たちの上に来るとパンっ！と音を立てて破裂した。

「「えっ!?!」」

バルーンが破裂したことにより、その下にいた俺たちは全員びしょ濡れになってしまった。

『やっぱり非論理的ロト』

『濡れました……』

ロトムとフランが濡れながらそれぞれ言う。

流石防水加工されているからか凶鑑の中は壊れてないようだ。

お騒がせ双子姉妹

しばらくあの砂浜でアシマリの特訓をすると、俺たちはスイレンの案内でスイレンの家へと来ていた。

スイレンの家の外にはラプラスがいた。

「あつ！ラプラスだ！」

「あれがライドポケモンのラプラスね」

俺はラプラスを見ると小走りになり駆け寄った。セレナは普通に歩いてラプラスの近くに来た

「アローラ、ラプラス！明日はよろしく頼むな！」

「明日はお願いね、ラプラス！」

「フーン」

ラプラスは一声鳴き答えた。

「ふふ。二人とも、こっちだよ」

俺たちはスイレンに続き家に入った。

「ただいま」

「お邪魔します」

すると、奥からドタドタと走る足音が聞こえてきた。

足音の主は二人の少女だった。

二人の少女はそのまま走り滑ってくる、玄関前で止まった。

「おかえり〜！ぎよぎよぎよ！」

「ぎよぎよぎよ？」

目の前の二人の少女の台詞に俺とセレナは首をかしげながら繰り返した。

目の前の二人の少女スイレンの妹なのだろう。それも恐らく双子。何故なら二人とも容姿も顔立ちもそっくりだからだ。詳しく言うならスイレンをそのまま小さくした感じだ。

「紹介するね、ホウとスイ」

スイレンが双子の姉妹を説明するなか、ホウとスイと呼ばれた双子はピカチュウを物珍しげに見ていると……

「……双子」

ピカチュウを捕まえて後ろの扉から部屋に入ってしまった。この間約5秒。

俺とセレナが呆然とするなかスイレンは頭に自分の手を置いていた。

「す、スイレンと似てるわね、あの双子」

「・・・・・・・・うん。よく、言われる」

「・・・・・・・・なんか大変そうだな・・・・・・・・」

「・・・・・・・・うん・・・・・・・・」

俺たちは暫しの驚きから解けると、スイレンとともに先ほど双子が入った部屋に入った。

その部屋はリビングらしく、ソファやテレビ、テーブルや椅子があった。

そしてそのリビングでは・・・・・・・・

「びくか・・・・・・・・」

「やわらかい、やばかわ!」

「あつたかい、すごかわ!」

双子がピカチュウのほっぺたをつついたりして遊んでいた。

「ホウ、スイー!ピカチュウ困ってる」

「やっぱこれ、ピカチュウ?」

「本で見たよ、本物すごかわ!」

『ピカチュウは、アローラ地方でも人気ポケモンロト』

「へえくそうなのか。よかったな、ピカチュウ」

「び、びくかくチュウ」

「あははは・・・・・・・・」

『なんともいえませんね』

スイレンの注意に双子はピカチュウを触りながら興奮したようにいい、ロトムが即直に言い、俺はピカチュウを見て言う。それにセレナは苦笑いを浮かべ、フランは両手を広げて落胆していた。

ピカチュウに触りながら双子は俺とセレナを交互に見ると、

「え、えくと、どうしたのかな?」

「な、なになかな?」

「お兄さん、お姉ちゃんのボーイフレンド?」

俺の方を見てそんなことを言ってきた。

「えっ?」

「……………」

双子の突然の爆弾発言に、俺とスイレンは呆然とし、セレナはフリーズしたように固まっていた。

「ち、ち、違う!全然違う!」

「ほんとのほんとのほんとにいい?」

「ほんとのほんとの、ほんとにいい!」

スイレンが顔を何故か赤くしながら双子に言っているなか俺はセレナに近づき。

「おい、セレナ?大丈夫か?」

セレナの状態を確認していた。

「……………」

「おい、セレナ?」

「……………はっ!」

「あ、やっと戻った」

「わ、私は一体何を……………って、あれ?スイレンは何をしてるの?」

「あ……………なんかよくわからんが。カクカクシカジカメブキジカ」

「なるほど……………」

と、俺がセレナに説明していると。

「それじゃあ、こつちのお姉ちゃんがお兄さんの恋人?」

と、またしても双子が爆弾発言を投下した。

「へっ!」

俺とセレナは再び呆然としスイレンは首を傾げながら俺とセレナの方を見ていた。

さすがにこれには俺も顔を赤くするしかなかった。

セレナを見るとセレナは熱があるのではないかと言うぐらいに顔を赤くしていた。

「確かに、セレナとサトシって付き合ってるの？」

「え、いや、違うよ！」

「そこまではつきり言わなくても……」

俺が否定するなかセレナは顔をうつ向かせて何か小声で言った。

「セレナ。なにか言った？」

「う、ううん。何でもないの！」

そんなやり取りをスイレンと双子のホウとスイがニヤニヤしながら見ていたのが気になった。

しかしそんなことを聞く暇はなかった、何故なら。

「ビーカ。チューー!!」

ホウとスイがずっとピカチュウを触っていたりいたずらをしていたのでピカチュウの我慢がなくなり10万ボルトとはいかなくと、電撃がピカチュウから発せられその場にいた全員電撃をもろに受けたのだ。

ピカチュウの電撃が終わると俺たちは全員、焦げた感じになっていった。

「ビーカチューー……」

ピカチュウもさすがにやり過ぎたかと思ったのか、少しやり過ぎた感じの顔をしていた。

そのあとスイレンから謝罪を受けたが大丈夫、と返し釣竿を借りに来たことをホウとスイに伝えそれが終わったらピカチュウと一緒に遊ばせてあげて約束した。

ちなみに今ピカチュウは、ホウとスイと一緒にいる。

「わあー、こんなに釣竿があるなんて」

「おお！こんなにたくさん釣竿が」

「どれでも好きなのを借りていいよ」

「ありがとな、スイレン。おつ、ピカチュウのルアーだ」

「ありがとうスイレン。じゃ、私は……あつ！これなんてどうかな？」

「へえー、フオツコのルアーもあるんだ」

「うん。ルアーはいろいろある」

「じゃあ、私はこれにするわ」

「うん。わかった。ホウとスイたちのところに戻ろう」

俺たちはスイレンから釣竿を借りるとピカチュウたちのいるリビングに戻った。

「ピ〜カ……………ピ〜カ……………」

「スウ……………スウ……………」

リビングではピカチュウとホウとスイが仲良く寝ていた。

「寝ちやつてるね」

「ああ」

「ホウとスイもぐっすり。余程ピカチュウと遊べて嬉しかったんだ」

『みなさんぐっすり眠ってますね。私も眠く……………なっちゃいま……………す……………』

『ピカチュウと一緒に寝ている姿。データアップデート……………』
フランとロトムも疲れてしまったのか何時もはまだ起きているのに二人とも寝てしまった。と言うよりかスリープモードに移行したらしい。

俺とセレナは凶鑑を背中のリュックに入れた。

俺たち3人は静かに双子とピカチュウを起こさないように軽く笑った。

「さてと……………」

俺は寝ているピカチュウをそっと持ち上げ優しく抱えた。

「それじゃ俺たちはこれで」

「うん。ホウとスイには起きたら言っておく」

「ああ。またピカチュウと遊んでくれたら嬉しいって言っといてくれるか?」

「うん。任せて」

「それじゃあねスイレン」

「うん。また明日ね」

俺とセレナはスイレンに見送られながらスイレンの家を後にした。

スイレンの家を後にしクワイ博士の家へと帰っている道中、俺とセレナは帰り道の途中にある絶壁から夜空に浮かぶ星々と海を眺めていた。

「綺麗ね〜……………」

「ああ。他では見られない景色だな」

「そうね〜。ヒヤツコクシテイで見た日時計から見る景色も綺麗だったけど……………こつちも綺麗」

「そう言えばそんなこともあったな〜。あつ、でもミアレのプリズムタワーも綺麗だったな」

「ふふふ。そうね……………フレア団事件の後プリズムタワーのライトアップ、シトロンとユリーカも一緒に見たわね」

俺とセレナは手すりに手を寄りかかって話す。

「セレナはアローラでどんなポケモンゲットしたいんだ？」

「ん〜。いろんなポケモンをゲットしてみたいけど……………」

「明日ゲット出来るかもな」

「え？なんで？」

「なんとなくだな」

「ふつ……………ふふふ。なんとなく。ふふふ」

「笑わなくてもいいだろ」

「ごめんごめん……………そうね。明日ゲット出来るかも知れないわね」

「ああ。それじゃあ、帰ろうか」

「ええ……………ありがとう、サトシ……………」

「ん？なんか言ったか？」

「なんでもないわ。帰りましょ」

「ああ」

俺たちはそのままその場を後にしククイ博士の家へと帰った。

スイレンとアシマリ、本気のバルーン！

翌日、ククイ博士とともに集合場所である海岸近くの栈橋に着くと、すでにクラスメイトのスイレン、マオ、マーマネが来ていた。

そして俺たちが着くと同時にカキガリザードンとともにやって来て、最後にリーリエがやって来た。

「アローラー！」

「「「アローラー！」」」

挨拶をし俺はリーリエの格好に少々驚いた。

チラリと横を見るとセレナも驚いた表情を出していた。

何故ならリーリエの格好は……

「これがリーリエの秘密兵器かあ。かつこいいじゃん」

マオの言った通りかつこいいはかつこいいのだが……

「へえー。まるで宇宙服みたいだね」

マーマネの言ったように、リーリエの格好はまるで宇宙服のような物だったからだ。

「はい。これで釣りもライドポケモンも、問題なく参加できます！」

どうやらそれがリーリエの用意した秘密兵器らしい。

「ははっ。それじゃあスイレン、ここからは君が先生だ」

「は、はい！」

ククイ博士に呼ばれてスイレンが前に出る。

多少ぎこちなく緊張した趣で俺たちを見る。

「頑張つて、スイレン先生！」

「しっかりな」

マオとカキの応援を受けてやや俯いていたスイレンの顔が上がった。

「頑張つて！」

隣でセレナがスイレンに言い、俺はスイレンを見てうなずく。

それにスイレンは一回深呼吸をし落ち着かせると何時ものスイレンになった。

「それじゃあ、みんな、ライドポケモンに乗ってください。今日はラプ

「私は1回だけ」

「サトシ……………3回もって……………」

「マジかよ……………」

「驚き……………」

「信じられないよ……………」

「カイオーガを何回も見たことあるなんて……………」

「サトシ、セレナ。それホントか……………」

「はい」

「ええ」

「……………驚いたな。じゃ、なかった。とにかくみんなその話は後にしよう。今はやるのが先だ」

ククイ博士の号令で俺たち全員釣竿を用意した。

「よおし、とにかくすごい釣るぞ」

「私も」

「じゃあ、みんな、釣竿を用意して。そして、ルアーを思いっきり、海に投げ込む！」

スイレンを初めとしてククイ博士以外全員、海にルアーを投げ入れた。

「釣りのコツは、浮きに反応があったら。そのタイミングで、一気に合わせて釣り上げる！」

「ママーン！」

「おおつ、ママンボウだ！」

「釣れたらポケモンフーズで。仲良くなってスキンシップ」

その後もスイレンはママンボウを初めとしてサニーゴ、ラブカス、ウデッポウ、等々どんどんと海のポケモンを釣り上げていく。

「流石は海のスイレンだな」

「よつ、名人！」

「すごいわ、スイレン！」

「へへっ……………」

俺もセレナも釣りの経験はあるため、スイレンほどではないが釣っていく。だが、周りのみんなは、速すぎたり遅すぎたりで逃げられて

しまう。が、そもそも浮きに反応がなければ釣れないのだが。
ちなみにピカチュウも尻尾を使って釣りをしてコイキングを釣り
上げていた。

「き、来ましたー！」

引いたのはリーリエみみたいだ。

リーリエの浮きは沈んで水面にバシャバシャと水面が出来ていた。
水飛沫を上げ出てきたのは、

「あれはー！」

「ミロカロスだ！」

「やるねー、リーリエ」

「こ、これはレアケース!？」

「あわわわわ！」

リーリエはミロカロスに翻弄されて慌てていた。

俺とスイレンは急いでリーリエの元に向かう。

リーリエはミロカロスの引く力にラプラスの背から落ちそうに
なっていた。

「リーリエ、落ち着いて！」

「待ってる、今そっち行くー！」

俺はある程度リーリエに近づくと飛び乗ろうとジャンプした。

だがその瞬間、リーリエの引いていた釣糸が切れミロカロスが俺の
横から飛び出て、横腹に衝撃を加えて潜っていった。

「ぐふっー！」

俺はミロカロスから与えられた衝撃でリーリエから90度ずれて
セレナの方に飛んでいってしまった。

「え!?!サトシ!？」

「うわあー！」

「キヤアアアア！」

俺はセレナとぶつかり、セレナと一緒に海に落ちた。

俺とセレナが落ちた水音と水しぶきが辺りに響いた。

「……………ぷはっ」

俺たちが水から顔を出すと近くに俺とセレナのラプラスがいた。

ラプラスの頭の上でピカチュウが心配そうに俺たちを見ていた。

「おーい！大丈夫か〜！」

「ククイ博士！」

「二人とも無事か？」

「はい」

「大丈夫です」

「そうか、良かった」

俺とセレナが無事だと言うことを言うとククイ博士は安堵したように胸を撫で下ろした。

「よつと………セレナ」

「ありがとうサトシ」

俺は先にラプラスに乗り、セレナを海から引き上げた。

「お〜い、サトシ〜、セレナ〜」

「大丈夫か二人とも！」

「ああ。俺もセレナも大丈夫だぜ」

「良かった〜」

「そう言えばリーリエは？」

「リーリエなら大丈夫。海に落ちなかったし、座席から少し落ちそうになっただけだから」

「よかった」

俺たちは駆け付けてきたマオとカキ、ククイ博士とともにリーリエの側にいるスイレンとマーマネのところに向かった。

「大丈夫？二人とも」

「ああ、平気だぜ」

「私も無事よ」

「リーリエは大丈夫か？」

「はい。わたくしはなんともありません」

「そうか。でも、ミロカロスは逃げちゃったか〜。惜しかったな、リーリエ」

「そうですね。次こそは、成功させて見せます」

「俺も負けてられないな！」

「あと、ありがとうございますサトシ」

「え？」

「いえ、助けようとしてくれて」

「いいっていいって。それにちゃんと助けられた訳じゃないし」

「いえ、それでも助けようとしてくれたので。ありがとうございます」

「リーリエが無事ならよかったよ」

俺とリーリエの会話を横から、ほんの少し不機嫌そうな表情でセレナが俺を見ていたことは、俺以外誰も気がつかなかった。

「よし、とりあえず一旦休憩をとるぞ」

ククイ博士の言葉で、俺たちは近くにある小さな島に立ち寄り、休憩することにした。

俺たちは近くにある小島に立ち寄りラプラスたちから降りた。

「みんなここで待っていてくれよ」

俺がそう言うと、ラプラスとホエルコたちは声を出して返してくれた。

「休憩は15分。しっかり休んでおけよ」

「ふう〜」

「リーリエ、大丈夫？それ来たまま動くのって、すごく大変じゃないかしらっ。」

「だ、大丈夫ですセレナ。す、少し休めば問題なく動けます」

「そ、そう？でも無理だけはしないでね」

「は、はい」

なかった。

その後色々と二人で話していると、ラプラスとホエルコたちがいる場所の上に気球が何処からか現れた。

その気球は網でラプラスたちを捕まえた。

「なっ!?!」

「なに、いきなり!?!」

俺とセレナは急いでみんなと合流する。

「アッローラッ!生徒諸君!」

気球の中から声が響いた。

「ひどい!」

「なんなの、あんたたち!?!」

「なんなのあんたたち、と言われたら」

「聞かせてあげよう、我らが名を」

「花顔柳腰、羞月閉花。儂きこの世に咲く一輪の悪の花!ムサシ」

「飛竜乗雲、英姿颯爽。切なきこの世に一矢報いる悪の使徒!コジロウ」

「一蓮托生、連帯責任。親しき仲にも小判輝く悪の星!ニヤースで、ニヤース」

「ロケット団、参上!」

「なのニヤ!」

「ソーナンス!」

「ロケット団!」

「またあんたたちなの!」

「ジャリーズの諸君!ラプラスたは、我らロケット団ライドポケモン部隊に任命しちゃうのだ!」

「さらば!」

「ま、まて!」

「待ちなさい!」

ロケット団の後を俺たちは追いかける。

すると、俺たちから少し離れたところで止まった。

「ストロープ!なんか余計なおまけがついてきてない?」

「わ、ほんとだ。小さいのがいっぱい」

「ライド以外の雑魚はいらないのにゃー!」

ロケット団の言葉にスイレンが反応した。

「えっ・・・雑魚・・・?」

よく聞き取れなかったがスイレンが普段見せない表情をしていたのは見えた。

「行くぞ、ピカチュウ!」

「ピカッ!」

「おおつとだめにゃ!」

「撃つてもいいの? ラプラスたちが苦しむだけよーん」

「くっ」

「なんて卑怯な」

ピカチュウの10万ボルトで打ち落とそうとしたがロケット団と一緒に電撃を浴びることになる上、そのしたにはあちこちに岩が出ておりもしポケモンたちが落ちたら危険だ。

「サトシはロケット団をお願い! スイレン、アシマリの力を借りたいけどいい?」

「うん。もちろん」

「スイレンは合図したらポケモンたちの下に大きなバルーンをお願い」

「わかった!」

「サトシ!」

「わかった! ロトム、そこを動くなよ」

『何をする気ロト?』

ロトムの位置は俺たちとロケット団の気球との間くらいに浮いている。

俺はセレナの言うことをいち速く察した。

遠距離がダメなら近接攻撃をするまでだ。

「行くぞピカチュウ!」

「ピカッ!」

ピカチュウは勢いよく飛び出し高くジャンプした。

『ロト!?!』

そして浮いていたロトムを足掛けにして更に高く上がりロケット団の気球に近づいた。

「ピカチュウー! アイアンテール!」

「ピカッ! チュー、ピツカア!」

ピカチュウのアイアンテールはポケモンたちが捕まっている網を見事に切り裂いた。

網を切り裂かれポケモンたちが落ちる。

「まずい! 岩にぶつかるぞ!」

「大丈夫! スイレン、アシマリ!」

「うん! いくよ、アシマリ!」

「アウ!」

「アシマリ、バルーン!」

スイレンが言うとおアシマリは、物凄い速さで水中を泳ぎ瞬間にラプラスたちが落ちる近くまで行き大きなバルーンを作り出した。

その大きさは昨日練習していた時よりも倍、数倍いや、何十倍もの大きさとなっていた。

アシマリのバルーンのお陰で怪我することなくラプラスたちは海に戻れた。

「やった!」

「いいぞ、アシマリ!」

「ピカチュウー!」

「こらあ! なんてことを!」

「せっかくのライドポケモン部隊だったのに!」

「許さない、あんたたち」

ロケット団が何か言うがそれはスイレンの低い声に掻き消された。

「ヒッ!」

スイレンの声にセレナが数歩後ずさった。

よく見るとスイレン以外クイ博士も数歩後ずさっていた。

その後俺たちの中であるひとつの協定が確定した。それは、『絶対にスイレンを怒らせないようにしよう』と言うことだ。

「こうなったら。いくわよ、ミミックユ！」

「キュ、キュ」

「シャドーボール！」

「アシマリ、バルーン！」

「アウ！」

ムサシの出したミミックユの技。シャドーボールはアシマリのバルーンにより跳ね返り気球に命中した。

「いくぞモクロー！このは、だ」

「クロ！クロロ！」

追い討ちを仕掛けるようにモクローのこのは、が当たり気球が爆発した。ロケット団はそのまま海に落ちるかと思いきや。

「キーーーーッ！」

「「何この感じく!?」」

颯爽とキテルグマが現れロケット団を連れていった。

しかも、

『水の上を走るキテルグマ、データアップデータート』

「ビーカ」

水の上を走っていた。

その光景に俺たちは呆然とするしかなかった。

ロケット団の魔の手からラプラスたちを守った俺たちは、スイレンのところに集まっていた。

「アシマリ、かっこよかったぞ」

「今日のMVPだな」

「ですね」

「MVPは言いすぎじゃないかな？」

「もう。文句あるっての？」

「い、いやあ、別に」

「ふふっ。あたし、感動した！」

「ええ。私も感動したわ。凄いわスイレン、アシマリ」

「ありがとう。サトシとセレナの協力がなかったらラプラスたちは助けられなかった」

「ああ。それにしてもさすがセレナだな」

「ありがとうサトシ／＼／＼」

『先程のバルーン、昨日図った時よりも1000%ほど大きかったです』

『フランの言う通り昨日の数百倍は大きかったロト』

「な、言っただろ。スイレンとアシマリなら絶対にできるって」

「スイレンのポケモンたちを助けたいという思いに、そしてサトシとセレナの絶対にできるって言う信じる心が、アシマリの籠っていた殻を破ることになったんだ。最高じゃないか」

『理解不能、理解不能』

『やれやれですね、ロトムには』

「ね、ね、スイレン。さっきのバルーン、もう一回やってみて！」

「僕も見たい！」

「ああ、俺も見してみたいぜ！」

「私も！」

「よし、アシマリ。やってみよう」

「アウツ」

アシマリが再びバルーンを作り出していく。

バルーンは俺とピカチュウ、セレナを包み込むかのようにゆっくりと出来ていた。

やがて俺とピカチュウ、セレナはアシマリの作ったバルーンの中に入ることができた。

「やった、完成だね。アシマリ！」

「アウ！」

少し浮いているバルーンを見てスイレンとアシマリが喜んだ。
すると、

”パンツ”

バルーンの破裂音がなり、俺たちは落ちてしまった。

幸いにも少ししか浮いてなかったため怪我をすることはなかった。

「あははは。どうやらアシマリはまだ練習が必要なようだな、スイレン?。」

「はい。一緒に頑張ろうアシマリ」

「アウ！」

「頑張れスイレン、アシマリ」

「頑張つて〜！」

「ピーカッチュ」

俺たちの声援を受けスイレンとアシマリは更に互いの絆を深めていった。

その後授業が再開し特に邪魔も入ることなく釣りを俺たちは楽しんだ。

余談だがセレナがミロカロスを釣り上げたのは驚いた。

まあ、さすがにそれはセレナだけでは危ないため俺も手伝った。

セレナ、アローラで初ゲット♪

海での実習が終わった後、俺とセレナは釣竿をスイレンに返すため、スイレンとともにスイレンの家に行き釣竿を返却してきた。

その際、スイレンの双子の妹ホウとスイとポケモンたちを遊ばせた。ホウとスイはメチャクチャはしゃいでいたことを覚えている。

そして、時間も遅くなりスイレンの家を後にした俺たちは、ククイ博士の家に帰っていた。

「んー、疲れた〜」

「もうサトシったら」

「セレナは疲れてないのか？」

「疲れてないって言ったら嘘になるけど……………」

「にしても今日のアシマリ凄かったな」

「ええ。スイレンとアシマリの絆のお陰だと思うわ」

「絆か」

「ええ。サトシとゲッコウガのようにね」

「そうだな……………スイレンとアシマリなら夢を叶えられるかもな」

「そうよ」

そんな会話をしながら二人で並んで帰っていると。

「ん？」

「どうかしたのサトシ？」

「いや、今なんか聞こえたような……………」

「え？」

俺とセレナはその場で立ち止まり耳を澄ませた。

すると、

『ミロー……………』

小さな声が聞こえた。

『今のはポケモンの鳴き声です！』

『間違いないロト！何処かにポケモンがいるロト！』

フランとロトム言葉を聞き、今しがた自分達も聞いた音を使い刃りを見渡す。

「サトシ！あそこ！」

「あれは……！」

セレナが指差したところは海岸だ。海岸にはポケモンが一体倒れていた。

「急ぐぞセレナ！」

「ええ！」

俺とセレナは走って倒れているポケモンに駆け寄った。

『これはミロカロスです！』

倒れているポケモンはミロカロスだった。

「大丈夫かミロカロス！」

「しっかりして！」

「ピーカ、ピカチュウ！」

『サトシ、この傷を見るロト！』

「え？これは！」

『これは明らかに人為的な傷です！』

「酷い……誰がこんなことを……あれは……」

セレナは何かを見つけたのか砂浜に落ちてある何かを拾い上げ持ってきた。

「セレナ、それは？」

「多分、網？だと思うけど」

『それは電磁ネットロト！』

「電磁ネットだと！」

ロトムという言葉に俺とセレナは驚愕した。

「電磁ネットってまさか……」

俺とセレナが電磁ネットを見ていると、

「ビーカー！」

ピカチュウがある一面を見て呻いた。

「ピカチュウ？」

「サトシ！」

「え？」

ピカチュウの視線の先には3人の人影があった。

「なんなんだお前たち！」

「ああん。それはこっちの台詞だガキ」

「まさかミロカロスにこの傷を負わせたのは」

「ああ、俺たちだ」

「！」

「なんてことを」

「別に良いだろう。そのポケモンはどのみち売っ払うんだからよ」

俺たちは目の前の3人組の1人の言葉に反応した。

「売っ払う、ですって？」

「お前たちポケモンハンターか！」

「そうだ。俺がリーダーのガイズ」

「俺がイグラ」

「そして俺がナグラだ」

目の前の3人組のポケモンハンターはそれぞれ名前を言った。

「許さない。ポケモンを売り払うつもりで捕まえるなんて、絶対に許さない！」

「私も許せない！」

「許せないならどうするんだ？」

「まさか俺たちとバトルするきか？あーん？」

「……良いぜ、受けてやる！」

「サトシ、私も手伝う！」

「サンキュー、セレナ」

「ふっ、生意気なガキ共だ。後悔しても知らねえぞ」

そう言うとりーダーの男らしいガイズがポケモンを出した。

「行け、バンギラス！」

「サイドン！」

「ボスゴドラ！」

3人は1体ずつポケモンを出してきた。

「セレナ行くぞ！」

「ええ。お願いテールナー！」

「頼むぞピカチュウ！ゲッコウガ！」

俺はモンスターボールを取り出しゲッコウガを出した。

「テナツ！」

「ピカチュウ！」

「コウガツ！」

「バンギラス、あくのはどう！」

「サイドン、ストーンエッジ！」

「ボスゴドラ、ラスターカノン！」

「テールナー、ボスゴドラにかえんほうしゃ！」

「ピカチュウ、サイドンにアイアンテール！ゲッコウガはバンギラスにいいいきりだ！」

俺とセレナとポケモンハンターたちの技がぶつかる。

結果、テールナーのかえんほうしゃはボスゴドラのラスターカノンを打ち破りボスゴドラの体にかえんほうしゃを、ピカチュウはストーンエッジを上手く避けて接近し頭にアイアンテールを、ゲッコウガは素早い動きでバンギラスのあくのはどうを避け、いいいきりで切り裂く。

「バンギラス！」

「サイドン！」

「ボスゴドラ！」

ピカチュウたちの攻撃にポケモンハンターたちのポケモンは戦闘不能では無いものの倒れていた。

「くっ、こうなったら」

サイズがさらにモンスターボールを取り出すと残りの2人。イグラとナグラもモンスターボールを取り出した。

「いけっ、ゴルバット、アイアント！」

「アリアドス！マニョーラ！」

「ドラピオン！ヘルガー！」

「なっ!?卑怯よ！」

「あん。卑怯？勝てばいいんだよ勝てば」

「何処まで腐っているのこの人たち」

「……セレナ。俺がやる。ピカチュウはミロカロスをセレナと

「一緒に頼む」

「ピーカ」

「サトシ、気を付けてね」

「ああ、わかっているさ」

セレナとピカチュウ、テールナーがミロカロスの方に向かい着いたのを確認すると、俺はガイズたちを見、ゲッコウガを見た。

「ゲッコウガ、久しぶりに行くぞ！」

「コウガッ！」

「ゲッコウガ！フルパワーだ!!」

「コウガーーーーッ!!」

ゲッコウガの体が激流に包み込まれたかと思うと、水の中でゲッコウガの姿が変化した。

「な、なんだよそれ！」

「なんなんすか！」

「そんなのありかよ！」

ガイズたちが口々に何かを言っている。

やがて激流が収まるとその中から姿を変えたゲッコウガが出てきた。

背中に巨大なみずしゆりけんがあることが一番の注目すべき点だ。

ゲッコウガの頭には赤色が現れ、胴体も変化している。

「久しぶりに見たわね。サトシゲッコウガ」

「ピーカ」

「テナ」

ゲッコウガとのシンクロで成り立つ、俺とゲッコウガの合わさった姿。メガシンカではなく絆で進化したことによる進化。その名もキズナ現象。これが俺とゲッコウガのキズナの力だ！

「行くぞゲッコウガ！」

「コウガ！」

「くっ、こけおどしが。バンギラス、はかいこうせん！ゴルバット、エアカッター！アイアント、ラスターカーノン！」

「サイドン、つのドリル！アリアドス、ベノムショック！マニニューラ、

れいとうビーム！」

「ボスゴドラ、かえんほうしゃ！ドラピオン、クロスポイズン！ヘルガー、あくのはどう！」

「ゲッコウガ、かげぶんしん！」

「コウガ、コウガ、コウガ、コウガ」

「そして連続でいあいぎり！」

「コウガ！」

ゲッコウガはかげぶんしんをした後いあいぎりでガイズたちのポケモンに迫る。

迫る技をギリギリのところまで避け接近する。

まず最初にドラピオンとサイドンにその次にヘルガーとリアドスをそしてマニニューラとアイアント、ゴルバットを切り刻んでいく。

「ゲッコウガ、もう一度いあいぎりだ！」

「コウガ！」

「させるか、バンギラス、すなあらし！」

「みずしゆりけん！」

「コウガッ！」

ゲッコウガの放ったみずしゆりけんはすなあらしを起こしているバンギラスにすなあらしを貫いてダメージを与えた。

「バンギラス！」

「ボスゴドラ、ラスターカノン！」

「かわして、つばめがえし！」

「コウガッ」

ゲッコウガはラスターカノンを避けボスゴドラの顎辺りを蹴り上げた。

そして上空に舞い上がると。

「止めだ！ゲッコウガ、みずしゆりけん！」

「コウガッ！」

ゲッコウガのみずしゆりけんは倒れている9体のポケモンに命中し爆発を引き起こした。

「バンギラス！ゴルバット！アイアント！」

「サイドン！アリアドス！マニユーラ！」

「ボスゴドラ！ドラピオン！ヘルガー！」

爆発の煙が晴れるとその場にはガイズたちのポケモン9体全体が戦闘不能になっていた。

「くっ、覚えてろ！」

「そうはさせるか！ピカチュウ、10万ボルト！」

「ビーカ、チューー！」

「アババババハハ！」

ピカチュウの電撃をくらいポケモンハンターのガイズ、イグラ、ナグラの3人は気絶した。

戦闘が終わるとゲッコウガとのシンクロが切れ元のゲッコウガに戻った。

「ふう〜」

「お疲れサトシ、ゲッコウガ」

「コウガ」

「セレナ、ミロカロスの容態は？」

「衰弱が激しいわ。ポケモンセンターで治療しないと」

「でもここからポケモンセンターまでは遠いし……」

「ククイ博士ならなんとかなるかもしれないわね」

「ところでロトムとフランは？」

「あれ？2人ともどこ行っただのかしら？」

そう言っていると。

「おーい、サトシ、セレナ」

砂浜の奥の方から見知った声と姿が見えた。

「ククイ博士！」

「ククイ博士、どうしてここに？」

「説明は後だ！取り敢えず今はミロカロスをポケモンセンターに連れていくのが先だ」

「はい！」

「ええ！」

「ククイ博士、コイツらは？」

「今、ジュンサーさんが向かって来ているから大丈夫だ」

俺とセレナはジュンサーさんが向かっていることに安心して念のため、ククイ博士が持ってきていたロープで3人纏めて縛りそこに放置した。

ポケモンセンター

「ジョーイさん！」

「話は聞いているわ。任せて」

ミロカロスをストレッチャーに横たわらせ、ジョーイさんに預けた。

ミロカロスはジョーイさんとハピナスの押すストレッチャーとともに奥の部屋に運ばれていった。

「ミロカロス、大丈夫かな」

「絶対によくなるさ」

「はい」

ジョーイさんの姿を見送っていると、

「ククイ博士」

後ろから声が聞こえた。

後ろを向くと、

「ジュンサーさん！」

「あ、ロトム！」

そこにはジュンサーさんとロトムがいた。

「どうしてロトムとジュンサーさんが一緒に？」

『それは僕がジュンサーさんと呼んだからロト』

「そうなのか!？」

「ええ。急にこのロトム図鑑が現れたから何事かと思っついていていつてみたら、指名手配中のポケモンハンターがいたのよ」

「ちなみに俺はフランに呼ばれたのさ」

「そうだったのフラン!？」

『はい。あのポケモンハンターたちが現れ名乗ったところで私とロトムでお二人を呼びに行つたんです』

「そうだったの。ありがとうございます、フラン、ロトム」

「サンキュー、ロトム、フラン」

「ピーカッチュー」

俺たちはロトムとフランの知らぬ間の活躍に感謝した。

「ところでジュンサーさん。あのポケモンハンターたちは？」

「あの三人ならすでに逮捕しました。あ、これはお返しします」

ジュンサーさんはククイ博士にあの3人を縛る為に使用したロップを返却してきた。

「どうも」

「いえ。それでは本官はこれで。サトシくん、セレナちゃん。2人のお陰であの3人を逮捕することが出来ました。ありがとうございます」

そう言うと、ジュンサーさんは急いでポケモンセンターから出ていった。

「サトシ、セレナ。立派だったぞ」

「サンキュー、ククイ博士」

「ありがとうございます、ククイ博士」

「ピーカッチュー」

しばらくしてジョーイさんが戻ってきた。

「ジョーイさん、ミロカロスの様子は？」

「もう、大丈夫です。後は体力の回復を待つだけよ」

「よかったー」

「ほんと、よかったわ」

『良かったロト』

『ええ』

「ジョーイさん、ミロカロスの様子を見てきても良いですか？」

「ええ。もちろんいいわよ。案内するわ」

ジョーイさんに連れられてミロカロスの休んでいる部屋にやって来た。

その中でミロカロスは眠っているようだった。

「明日には治っているわ」

「ありがとうございます、ジョーイさん」

「いえ。ミロカロスが良くなったのはサトシくんとセレナちゃんのお陰ですよ」

「そう言ってもらえると2人も嬉しいでしょう」

「それでは」

「ええ」

ククイ博士と話していると、ジョーイさんは書類を手に離れていった。

「良かったなセレナ」

「うん」

今日そのまま俺とセレナは帰らずポケモンセンターで夜を明かすことにした。

ククイ博士にはキッチンと話、許可をもらっているため大丈夫だ。幸いにも今日はポケモンスクールはお休みだ。

夜更け、空が明るくなったときミロカロスが目を覚ました。

「ミロ」

「ミロカロス、大丈夫？」

「ミロロ♪」

「そう、よかった」

そのあと、ジョーイさんがミロカロスの容態を検診しに来た。

「もう、大丈夫。ミロカロスはすっかり元気になりましたよ」

「ありがとうございます、ジョーイさん」

「よかったな、セレナ、ミロカロス」

「ええ」

「ミロ」

セレナはミロカロスを抱きしめ優しく撫でている。

ミロカロスもセレナに撫でられて気持ち良さそうにしている。

そして俺はセレナに提案した、

「セレナ、ミロカロスをゲットしたらどうだ？」

と。

「え？」

「ミロカロスもセレナの事信用してるみたいだし。それに一番セレナがミロカロスの事心配していただろ」

「け、けれど……」

「ミロカロスはどうしたい？」

俺がミロカロスに訪ねると、ミロカロスはセレナの頬に頬擦りをして返した。

「ミロカロス……私でいいの？」

「ミロ♪」

「セレナ」

「うん。一緒に行こう、ミロカロス」

セレナはモンスターボールを取り出し、ミロカロスに近付けた。

ミロカロスはそのモンスターボールに鼻先をくっ付け自らボールの中に入っていった。

ボールが赤く点滅し数回揺れる。

そして。

ポンッ！

「私の新たな一頁。ミロカロス、ゲット！」

「やったなセレナ！」

「うん♪出てきてミロカロス」

「ミロ♪」

「ミロカロス、これからよろしくね！一緒に頑張りましょ」

「ミロ」

セレナはこうして新しくミロカロスを得た。これでセレナのポケモンパフォーマーとしての道が近づいたことだろう。

そして、俺も……

セレナ、新たなる挑戦！

セレナがミロカロスをゲットした数日後、俺とセレナはククイ博士の家の前の砂浜でそれぞれ特訓していた。

「ピカチュウ、10万ボルト！ゲッコウガ、みずしゅりけん！」

「ピーカ、チューー!!」

「コウ、ガッツ!!」

”ドカンッ!”

ピカチュウとゲッコウガの技がぶつかり爆発が起こる。

ピカチュウとゲッコウガは互いに対峙している。

「よーし、そこまで」

俺はそうピカチュウとゲッコウガに声をかけ特訓を終わらせた。

「ピーカ」

「コウガ」

「お疲れ二人とも。二人ともいい動きしていたぞ！」

「ピーカチューー」

「コウガ」

『テールナー、だいもんじー!』

『テナツ』

俺たちの近くでセレナたちも特訓していた。

セレナは少し汗をかきながらもテールナーたちと特訓している。

ここ最近、俺はセレナをいつの間にか目で追いつけていた。セレナを意識しているのだろうか？ミロカロスを助ける前からセレナにはドキドキしていたが、セレナがミロカロスを助けたときからいつの間にか目で追っていた。

思い出すのはカロスで、セレナと別れたときにセレナからもらった、キスだ。

それを思い出すと少し俺は顔が熱くなる気がしてくる。

そんな事を思っていると。

「.....シ.....トシ.....サトシ!

ねえ、サトシってば」

いつの間にか目の前にセレナがいた。

「うわっ!? な、何セレナ?」

「聞いてなかったの?」

「あ、ああ。すまん」

「もお、サトシったら。ミロカロスの事で話があるの」

「ミロカロスの事で?」

「ええ。水タイプのポケモンは初めてだからどうしたら良いのか分からないのよ」

「そう言うことか。にしてもミロカロスかく。ミロカロスを見てるとミクリさんを思い出すな」

俺は近くの岩場に腰掛けながら、ピカチュウたちと仲良く遊んでいるミロカロスを見ながらそう呟いた。

「ミクリさん?」

「あ、セレナは知らないんだっけ。ミクリさんは、前はハウエン地方のルネジムのジムリーダーで今はポケモンコンテストマスターになんだよ」

「ポケモンコンテストマスター? それってポケモンコンテストと関係してるの?」

「ああ。ミクリさんはその中でもトップコーディネーターとして有名なんだよ。確か何回か雑誌の表紙に載ったこともあるはずだけど」

「サトシはミクリさんと会ったことあるの?」

「シンオウを旅していたときにな」

「へえー」

「ミクリさんが主催するミクリカップって言うポケモンコンテストにも出場したことあるんだぜ」

「ミクリカップ? ポケモンコンテストじゃなく?」

「ミクリカップってのはミクリさんが主催するポケモンコンテストの事で、このコンテストで優勝した時に送られるリボンがポケモンコンテスト・グラントフェスティバルを行うカントー、ジョウト、ハウエン、シンオウなどの地方の会場で使える特別なリボンなんだよ」

「凄いわねそれは」

「だろ！」

「ええ！」

「それで、ミクリさんがパートナーとしているポケモンがミロカロスなんだ」

「ミクリさんのパートナーがミロカロス……」

「ああ」

「……私もそのミクリさんみたいに来れるかな」

「セレナなら出来ると思うよ。でも、セレナはセレナらしい方が俺は好きかな……」

「え？」

「あ、いや、なんでもない！とにかくセレナはセレナ自身でミロカロスの魅力を引き出せばいいと思う」

「……そうね。ええ、サトシの言う通りだわ。何時もそれでやって来たのだから。ありがとう、サトシ」

「ああ」

セレナはそう言うのとミロカロスの方に駆け出していった。

セレナがミロカロスに着くと同時にピカチュウが戻ってきた。

「チャアー」

俺はそのままピカチュウの頭を撫でる。ゲッコウガは近くの木の幹に寄りかかり気持ち良さそうに寝ていた。

モクローは家で寝ている。まあ、モクローの場合は何時も寝ているのだが。

「サトシ」

ピカチュウを撫でているとセレナがミロカロスたちと戻ってきた。

「なに？」

「サトシ、私とバトルしてくれない？」

「セレナと？」

「ええ。ミロカロスの事をもっとよく知りたいの」

「いいぜ」

「ありがとう、サトシ」

ゲッコウガだとミロカロスはキツイと思うしモクローは起きない

だろうからな、ピカチュウに任せるかな。

「ピカチュウ、頼んでもいいか？」

「ピーカチュウ！」

俺とセレナは少し離れて相對する。

テールナー、ヤンチャム、ニンフィア、ゲッコウガは木陰で休みながらバトルを見ている。

「行くぜ！ピカチュウ、キミに決めた！」

「ピカッ！」

「ミロカロス、お願い」

「ミロ！」

「先攻をどうぞ、セレナ！」

「じゃあ遠慮なく。ミロカロス、みずのはどう！」

「ミロ！ミローッ！」

「躲せ！」

「ピカ！」

ミロカロスの放ったみずのはどう、をピカチュウは紙一重で躲す。

「ピカチュウ、でんこうせっか！」

「ピカッ！」

「躲して、みずのはどう！」

「ミロ」

「ピカッ!?」

「ミローッ！」

「ピカー！」

「ピカチュウ！」

ピカチュウのでんこうせっかはミロカロスに上手く躲され反撃でみずのはどうを喰らった。

「ピーカ」

「大丈夫か、ピカチュウ！」

「ピカチュウ！」

「よし！エレキボール！」

「ピカ！チュツ、ピカッ！」

「ミロカロス、りゅうのはどうで防いで！」

「ミロツ！」

「りゅうのはどう!?!」

俺はセレナがミロカロスにりゅうのはどうを指示したことに驚いた。確かにミロカロスはりゅうのはどうを覚えるが、他のトレーナーのミロカロスを余り見たこと無いからだろうかりゅうのはどうを使ってくるとは思わなかったのだ。

”ドカンツ!!”

エレキボールとりゅうのはどうがぶつかり爆発が起きた。その影響で砂煙と黒煙が立ち上る。

「いまだ!でんこうせっか!」

「ピカ!」

爆発の影響で視界が遮られる中、俺はピカチュウにでんこうせっかを指示した。

「どこから来る。気を付けてミロカロス！」

「ミロ」

「チュビツカー!」

「ミロー」

「ミロカロス!」

視界が遮られる中ピカチュウはミロカロスに接近し死角からミロカロスを攻撃した。

「よっし!」

「ミロカロス大丈夫?」

「ミロロロ」

「うん。まずは体力を回復しましょう、アクアリング!」

「ミロ」

「セレナのミロカロス、アクアリングまで使えるのか!?!」

「ええ!」

アクアリングは自身の体力を徐々に回復させる技だ。

攻撃しダメージを与えても回復されたら意味がない。

「長期戦は不利か。……………よし!ピカチュウ、10万ボルト

！」

「ピーカ、チュウ!!」

「れいとうビームよ!」

「ミロー!」

”ドーンツ!!”

「くっ」

「うっ」

10万ボルトとれいとうビームでまたしても爆発が起こる。

爆風に吹き飛ばされないように俺は帽子を押さえながら、セレナは帽子とスカート裾を押さええて踏ん張る。

「ピカチュウ!」

「ミロカロス!」

爆煙が晴れると二体とも倒れていた。

「ピーカ」

「ミロ」

俺とセレナは急いでピカチュウとミロカロスへと向かう。

「大丈夫かピカチュウ?」

「ピーカ」

「よくやったな、ピカチュウ」

「ピカ」

「ミロカロス、お疲れさま」

「ミロ」

「うん。貴女もかつこ良かったわよ」

「ミロ」

「?セレナ、そのミロカロスもしかしてメスなのか?」

「え?ええ。そうよ」

「マジか」

「ピーカ」

俺とピカチュウはミロカロスがメスだと言うことに驚いた。正直気付かなかった。

「それで、どうだセレナ。ミロカロスのこと少しは感じた?」

「ええ。ミロカロスの事がわかった気がするわ。ありがとうサトシ」
「どういたしましてかな。俺たちももつとトレーニングが必要だな。
な、ピカチュウ」

「ピツカア！」

「私たちもね」

「ミロツ！」

「それで、この後どうする？」

「そうね……」

セレナはミロカロスたちを見て少し考えたあと、

「サトシ、一緒に出掛けましょ」

俺にそう言った。

「えっ!?出掛けるってセレナと!?!」

「ええ。もしかしてイヤ……?」

「そ、そんなことはないから平気だ」

「なら一緒に出掛けましょ」

「ああ」

俺はこの後セレナと一緒に出掛けることになった。

「それで、場所は何処だ？」

「そうね……あつ、シヨップینگモールはどうかしら？」

「シヨップینگモールか一度行って見たかったんだよな。いいぜ、行
こう」

「ええー！」

サトシとセレナ アローラ、デートショッピング!

セレナからの提案でこの島のショッピングモールに行くことになった、俺たちはお昼を食べたあとショッピングモールに来ていた。一応、ククイ博士に書き置きを置いてはきている。

ショッピングモール

「へえー、ここがショッピングモールなのね」

「地図で見た限りだとそうみたいだな。しかし……」

「大きいわね……」

俺とセレナの目の前にはショッピングモールの入り口が見える。

「それで、今日は何を買うんだ？」

「えっとね、新しい服を買おうかなって思ってるの」

「へえー」

「そうだ! どうせならサトシも新しい服買ってみたら？」

「え? 俺はいいよ、別に」

「まあまあ、とにかく行こー!」

「えっ? ちよ、セレナ〜!」

俺は無言を言わずに右手を捕まれセレナに連れていかれた。

そして、俺たちから少し離れたところでは。

「リーリエ、スイレン。あれ見て、あれ!」

「どうしたのマオちゃん?」

「どうしたんですマオ? …… あら、あれは」

「うん。サトシとセレナ」

「だよね。二人して買い物かな？」

「あ、サトシがセレナに連れていかれた」

「もしかして、あれデートなんじゃない！」

「デート(ですか)!?」

「うん。だって、男女二人で買い物ならどう考えたってデートでしょ！」

「で、デート……」

「よし！二人とも行くよ！」

「行くってどこに行くんですか？」

「どこに、ってあの二人の後を追い掛けるんだよ！さあ、行くよ！」

「ちよ、待つてくださいマオ！」

「ひ、引っ張られる」

そんなことがあるとは知らずにセレナに連れられて、俺たちはあくセサリーシヨップへ。

「これなんてどう、サトシ？」

「へえー、サニーゴの角のペンダントか……いいんじゃないか？」

「ほんと？あ、これは？」

セレナは近くにあったイヤリングを手に取った。

「うくん、それは派手すぎないか？」

イヤリングの色は赤でセレナに余りしつくりときてない気がした。

「そうかしら？んー……あ、ならこれは？」

「お！似合ってるぞセレナ」

今度はピンクとスカイブルーを基調にしたブレスレットを見せた。

セレナがそのブレスレットを着けると、何時もセレナが着ている服と合い、よく似合っていた。

「ありがとうサトシ♪じゃあ、これは買うとして……あ、サトシもお揃いのを買って見たらどうかしら？」

セレナはそう言うとなりとすぐとなりにあった白と赤、碧の三色を基調に

したブレスレットを見せてきた。

「うーん。俺、ブレスレットつて着けたこと無いんだよな」

「取り敢えず着けてみたらどうかしら?」

「まあ、セレナが言うなら・・・」

俺はセレナからブレスレットを受け取り右手首に着けた。

「どうだ?」

「うん。似合ってるわよサトシ♪。ね、ピカチュウ♪」

「ピカッ」

「んー、なら俺も買ってみるかな」

セレナとピカチュウに似合っているとわれ俺は、そのブレスレットを購入する事にした。

そしてその光景を見ている人影が・・・

「ペ、ペアルックじゃないのあれ!?!」

「マオちゃん、少し落ち着こう」

「で、ですがスイレン。流石にこれは落ち着けないですよ」

「リーリエの言う通りだよ、スイレン。もし、サトシとセレナが付き合っているなら、すぐに情報が回るよ!」

「ま、まあそうだけど」

「あ、二人ともあのブレスレット買ったみたいですよ!」

「今度はどこ行くんだろ?」

物陰から二人の様子を見ている三人に背後から声が掛かる。

「ん?マオ、スイレン、リーリエ何してんだこんなところ?」

「ホントだ。三人にともなんで植木に隠れてるの?」

「カキ!」

「マーマネも」

「お二人はなんでここに」

「俺は配達終わりの買い物だ」

「僕も新しい機材を見に来たのさ」

「それより、お前らは何を……」「シーツ！」……「な、なんだマオ？」

「二人ともあれ見て、あれ」

「ん？」

「あれ、サトシじゃないか？」

「セレナもいるよカキ」

「マオ、すまんが説明してくれ」

「もおー、デートだよ！デート！」

「デート?!」

「シーツ！声が、大きいよ！」

「す、すまん。それで、デートって……」

「マオ曰く、男女二人で出掛けていたらデート、みたいです」

「うん。そう」

「へえー……あの二人って付き合ってるの？」

「わからない。でも、前に一緒に旅したみたいだし」

「とにかく、あの二人の後をつけるよ。カキとマーマネも来る！」

「お、俺も参加するの?!」

「僕も!」

「当然！さあ、行くよ！」

アクセサリーショップでセレナとのペアのブレスレットを購入した俺たちは、今度はブティックに来ていた。

「わあー……カロスとは違ってアローラ独特の文化の服が多いわね〜」

セレナはブティック内にある服を見ると眼を輝かせて言った。

「ホントだな。アローラの服屋には始めてきたが、確かに他の地方とは違う感じだな」

俺も近くにあつた服を見てそう言う。

この店にある服は、カントーやシンオウ、カロス等とは違い独特の衣装が多々あつた。

「セレナ、何か気に入つたのあつたか？」

「ええーちよつと試着してくるわ」

「あ、ああ」

セレナは意気揚々に言うのと幾つかの服を持って試着室に入つていった。

俺とピカチュウはセレナの行動に少し呆気を取られた。

「さ、さすが女子……」

「ピーカ……」

しばらくして

「じゃじゃーん♪」

セレナが試着室のカーテンを開けた。

「どおう？」

「ああ。似合ってるぞセレナ」

「ピカツチュウ」

「ありがとうサトシ、ピカチュウ」

セレナの試着した服は青い青空をイメージした感じのワンピースだ。

セレナはスタイルが良かったため、青空をイメージしたワンピースがしっくりときていた。

正直、セレナの姿に俺はドキッ、とした。ここ最近、セレナにドキッ、つとするのがこれがなんなのかよくわからないでいた。

「よしっ、次にいきましょ」

「ああー」

セレナは試着はしたワンピースを購入し、購入した服の入った紙袋を俺は持つ。

「ありがとう、サトシ」

「対して重くないから構わないさ」

そして、その光景を見ている五人の人影があった。

「……………デートね」

「……………デートだね」

「……………デートですね」

「……………デートだな」

「……………デートだよね」

順にマオ、スイレン、リーリエ、カキ、マーマネが視線の先を見て言う。

「なあ、何時までついていくつもりだ？」

「何時までって、終わるまでに決まってるじゃん」

「マオちゃん、なんかスイッチ入っちゃってる……………」

「さあ、後をつけるわよ！」

展望台広場

「綺麗な場所ね、ここ」

シヨップピングモールを回ったあと、俺はセレナを連れてこの展望台広場にやって来ていた。

「そうだろ」

「ええ」

セレナは髪を押さえて海を見る。

海から来る潮風と夕日に照らさせた海がここからよく見れる。

「ここで、カプ・コケコからこれを貰ったんだ」

「Zリングね」

「ああ」

俺はZクリスタルが付いてないZリングを見る。

「あの時は驚いたな……いきなりカプ・コケコが現れたかと思ったらここでZリングを渡すからさ」

「多分、カプ・コケコはサトシの中にある何かを感じ取ったのかもしれないわね」

「何かをつてなんだ？」

「さあ、わからないわ。でも、サトシだからこそゲツコウガと絆進化出来たのかもしれないわね」

「セレナだって、俺にはない何かをいっぱい持ってるだろ」

「フフ、そう言ってもらえると嬉しいわ」

しばらく俺とセレナは手摺に手をつけて目の前の海を眺める。

「……ねえ、サトシ」

「なんだ、セレナ？」

「サトシはあの時の事、覚えてる？」

「あの時？」

「ええ。ヒヨクシテイでテールナーたちにプレゼントを買うために一緒に出掛けたときの事」

「ああ……あの時か」

「このリボンタイもあの時にサトシから貰ったのよね」

「そう言えばそうだったな……カロスではいろんな事があつたからなく」

「フフ、そうね。最初に私が驚いたのってサトシがプリズムタワーから落ちたことなのよ」

「あれかー。あれ、よく思い出してみたらカロスについて初日に起こったんだよな」

「え？そうだったの？」

「ああ」

「あの時、サトシの事テレビで見て思い出したの、あ、サトシだ、って。」

それで、旅に出たの。でもまあ、最初は何するか決まっていなかったけど」

「俺は、セレナがハンカチを返してくれるまで分からなかったからな。それ以前にあの時の麦わら帽子の女の子がセレナだなんて分からなかったぜ」

「それから一緒に旅してサトシはジム戦を私はトライポカロンを」

「シトロンとユリーカと一緒にいろんなところを回って、いろんな事を知れたな」

「ええ」

セレナは右手を自分の胸元につけてるリボンタイに触れた。

「私ね、いろんな事あったけど一番思い出に残ってるのって、サトシからプレゼントを貰ったことなの。他にも色々あるけど、これが一番かしら」

「そう言ってくれると嬉しいな。俺もセレナからいろんな事を教わったり手伝ってもらったからな」

「フフ。そうね」

「ああ。そう言えばセレナ、前に俺が熱で寝込んでたとき代わりにバトルしてくれたんだっけ？」

「あ、あああ、あれは、ジミーって人が余りにもうるさくて、それにサトシの熱が悪化したらどうしようって、その、あの……」

「いや、セレナには常日頃から助けてもらってるからな。たまにおっちょこちよいなのが傷だが。まあ、ここでもだけど」

「ううー……／＼／＼／＼」

「でも、俺はセレナに感謝してるよ。セレナがいてくれたからなんとかなったって」

「サトシ……」

「だから、これからもよろしくな、セレナ！」

「ええ！こちらこそ！」

俺とセレナは握手をし、その姿が夕日に照らされ影が出来る。

「さ、そろそろ帰ろうぜ。余り遅くなるとクワイ博士も心配するかもしれないから」

「そうね」

俺は寝ているピカチュウを抱き抱え展望台から背を向ける。

「サトシ」

「ん？」

俺は後ろからセレナに呼ばれ振り返った。

すると、

「んっ……………」

「!?」

至近距離にセレナの顔があり、セレナがあの時と同じようにキスをしてきた。

「そ、その私はサトシが好きです。ずっと一緒にいたいと思ってるんだけど……………サトシは？」

いきなりのセレナの台詞に俺は思考が回らないでいた。

ちなみにピカチュウはいつの間にか起きてセレナを見ていた。その顔は驚きの表情だった。

「え、えつと、そ、その……………」

「返事は何時でも……………」「ちよつと待って!……………え？」

「い、今答える!だから少し、待って」

「うん」

俺は思考で考えセレナを見た。

そしてしばらくして、ここ最近俺の中にあつたのに気付いた。

なんだ、簡単な事だったんだ。俺もセレナの事が好きだったんだ、と。

「セレナ……………」

「サトシ……………?」

「お、俺もセレナの事が好きだ」

「……………!!／／／／／」

「だから、そ、そのセレナさえ良ければこれからもずっと一緒に居たい。だから……………」

「うん♪よろしくねサトシ!」

「ああ!」

俺とセレナは黄昏時の展望台で思いを伝えあった。
まるで、それを祝福するかのように一陣の風が優しく俺たちを包み込んだ。

そして、その頃。

「何処行つたのかなー」

「サトシとセレナを見失ってしまいました」

「もしかして尾行してることがバレた？」

「ねえー、もう帰らない？」

「同じく」

「何言つてんのよ二人とも」

「ここまで来たら気になる」

「わたくしも同じポケモンスクールの仲間として気になります！」

「でも、見つからないよ」

「もう、帰つたんじゃないか？」

「いや、あたしの勘がするに二人ともすぐ近くにいるはず！」

「……当たるのかその勘は」

「……多分」

「あ、いた」

「見つけましたわ」

「え、スイレン、リーリエどこどこ？」

「あそこ」

スイレンの指差した方にはサトシとセレナが仲良く手を繋いでいる姿があった。

「……」

「ねえ、あそこ桃色空間が見えるのは気のせいかな」

「マオちゃん、現実から目を背けちゃダメ」

「あ、ああ、あれ二人とも、て、手を繋いでいますよね！」

「ああ。俺の眼にも手を繋いでいるように見える」

「て言うか手を繋いでるよね」

「」「」「」「」「」「」

「……………帰ろうか」

「……………うん」

「……………ですね」

「……………ああ」

「……………だね」

そして静かに五人はその場を立ち去った。

手を繋いで家に帰った俺たちは、家に着くとまだククイ博士が帰ってきていなかったため、夕御飯の支度をし、ククイ博士の帰りを待った。ククイ博士とイワンコはセレナが夕御飯を作り終わると同時に帰ってきた。

二人とも何処かに行っていたのか、特にククイ博士は疲れている状態だった。

その翌日、ククイ博士は何時も通り速めに家を出、俺とセレナは通常……………ではなくポケモンスクールの近くまで仲良く手を繋いで登校した。

クラスに着くとクラスメイト5人から何時もと違う視線を受けたがそれが何かはこの時、俺とセレナは知らなかった。